平成仮面ライダーほのぼの劇場

sabu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
平成仮面ライダーほのぼの劇場

【Ｎコード】
Ｎ９６５５Ｒ

【作者名】
ｓａｂｕ

【あらすじ】
ある仮面ライダーの世界ここではクウガからフォーゼまで様々なライダーが存在していた。　この世界は仮面ライダーと怪人、本来、敵対関係である二つの勢力が共存し、平和に暮らす世界。これはそんな仮面ライダー達の物語　※リクエスト、ネタ募集中！

第一話そんな日常

～クスクシエ～

火野映司「いらっしゃいませ～」

と、頭にターバンを巻きインドの民族衣装を纏った青年が接客をしていた。

青年の名は火野映司

何を隠そう仮面ライダーの一人、仮面ライダーオーズである。

今日は彼の格好の通りインドフェアである。

五代雄介「こんにちは～」

入店してきたのは仮面ライダーの一人、仮面ライダークウガに変身する五代雄介

喫茶ポレポレでカレーを作る五代にとって他店のカレーに興味があるのでお邪魔させてもらったのである。

白石知世子「あら、いらっしゃい五代君」

五代「知世子さん、今日は勉強させて頂きます♪」

クスクシエのオーナーの白石知世子、クスクシエ自体カレー専門店と言うわけではないので快く五代を迎える。

五代達がカレー談義で盛り上がっているころ……

～公園～

ブレイドジャックフォーム「ウェェェェイ！！」

仮面ライダーブレイドＪＦに変身し、飛翔しているのは剣立カズマ

彼が飛ぶ先にあるのは木の頂上付近に引っかかっている風船

ＫａブレイドＪＦ「捕ったーーー！！」

ＫａブレイドＪＦ　は風船を取り下に居た子供の所に降り立つと変身を解き風船を渡す

カズマ「ほい！風船」

子供「ありがとう！お兄ちゃん！」

カズマ「おう、気をつけろよ？」

子供「うん！　バイバイ！！」

カズマ「じゃあな～～」

とまぁ、いきさつは簡単なもので、子供が木に風船を引っかけ、困っている所にカズマが通りかかり、とってあげたのだ。

仮面ライダーの力をこんなことに使うな、と言う輩もいるがこれも人助けだ、とカズマは思う

実際、こんなことでなければ仮面ライダーの力を使う機会もない、つまるところ平和なのである。

城戸真司は仕事が休みのため散歩に出ていた

公園の池の畔を歩いていると遠くにスマートブレイン・ハイスクール写真部の尾上タクミと友田由里が仲睦まじげに写真を撮っているのを見かけ、青春だなぁと思っていると何故か公園にいたラッキークローバーに絡まれ青春だなぁ？と首を傾げた

紹介したいことはまだまだあるがとりあえず

続く

第二話フィリップの思惑

～神代家～

英国名門貴族・ディスカビル家本家筋―神代家

一時期は経済破綻し、没落していた神代家だが、神代家当主・神代剣の必死の努力により復興を果たしていた。

現在では、洋式家具、インテリア、洋雑貨等の輸入会社を企業し、かなりの業績を収めている。

以前と同じような生活が出来るまでになったが、無駄な贅沢はせず、必要最低限とまではいかないが慎ましやかな生活を送っている。

性格は相変わらずだが、親友である加賀美新や思いを寄せている岬裕月と接する内に他人を思いやる気持ちが強くなり、余った収入等は孤児院等に寄付している。

閑話休題

そんな神代家の大広間には妙な雰囲気を醸し出す男達が居た。

面子を見てみると、剣、五代、津上翔一、神崎士郎、天道総司、野上良太郎、天堂ソウジ、フィリップ＝園咲来人、そして加賀美

全員黙って長テーブルに着いている。

上座にはフィリップが座っていて彼の後ろの壁には段幕が掛かっていてそこには【姉妹を愛する会】と書かれている。

加賀美「……何だこれ？」

加賀美は思った事を素直に言う。

加賀美はよく剣から岬について相談を受ける。

自分の正体がワームとゆうことに負い目を感じ、最初、岬から距離をとっていたが、そんな自分を受け入れてくれた岬に相応しい男になるために努力している。

加賀美はそんな二人を応援していて献身的に協力している。

今日も剣に相談を受けたためやって来たのだが……

剣「すまない加賀美、今日は会合があるのをウッカリ忘れてしまっていた」

加賀美「いやっ何だ会合って！なにこの会！？姉妹を愛するって……」

天道「黙れ愚弟」

天道はしんそこ嫌そうな顔をして言う。

加賀美「なっ！？」

天道から愚弟と呼ばれた加賀美、そう、実は加賀美は天道の妹、日下部ひよりと付き合っているのだ。
籍は入れていないのでまだ義弟ではないが嫌そうながらもそう呼んでいるのは加賀美を認めているからだろう。

そのため愚弟と呼ばれた加賀美の心情は怒り半分、嬉しさ半分だったりする。

剣「落ち着け二人共、フム、加賀美にはこの会の事を教えて無かったな、この会はその名の通り姉妹を愛する兄弟達の会だ」

至って真面目な顔で言う剣に加賀美は少し…いや、かなり引いている。

次の言葉が出ず黙っている加賀美

すると突然扉が開きそこにはゼクトルーパーに拘束された門矢士が居た。

士「は～な～せ～！！」士は抵抗するがえらい屈強な隊員のためあまり意味が無さそうだ。

連れて来られた士にフィリップが声をかける。

フィリップ「やっと来たかい門矢士」

士「フィリップ！？ってか何だお前ら！？」

フィリップ「ようこそ門矢士、【　姉妹を愛する会】へ」

士「ハァ！？何だソリャ！？」

士はフィリップのいきなりのセリフに訳が分からなかった。

フィリップ「とりあえず座りたまえ」

フィリップに促され警戒しながら士は席に着く。

席に着きもう一度フィリップを見る。

士「で？何なんだ一体これは？」

フィリップ「さっきも言った通り姉妹を愛する会さ、そして門矢士、君は新会員に選ばれたんだ」

士「イヤイヤイヤ！？待て待て待て！？どうゆう事だ！？何故俺がそんなシスコンの会に入らなければならない！？」

フィリップ「惚けるのかい？証言は出ているのだよ？」

士「証言だと？」

何のことか全く分からない士、フィリップは話を続ける。

フィリップ「Ｏ．Ｙさんからの証言だ。二週間ほど前、海東大樹が冗談で「次のお宝は小夜ちゃん……」とまで言って「だよ」と繋げる前にディケイド激情態に変身し、《アタックライド・クロックアップ》を発動、この間０．０５秒、その後は限界まで殴る蹴るの暴力、最後はディメンションブラストでとどめ、海東大樹もよく生き

ていたものだね、今も入院中だけど……どうだい？」

ん？とフィリップはしたり顔だ

士「クソッ！ユウスケめ」

士ははっきり分かっていた証言者に毒づく。

正直口喧嘩でフィリップに勝てるとは思っていない士、観念したのか黙り込む。

それを肯定と受け取り満足そうなフィリップ

士は改めて面子を見る。

そして疑問に思う。

士「……ん？ひとついいか？」

フィリップ「なんだい？」

士「五代と野上とソウジはシスコンとは違う気がするんだが……」

実際三人に聞いてみても

五代「たった一人の家族だからね」

良太郎「確かに姉さんのことは好きだけど……家族としてですよ」

ソウジ「家族を愛することは男として……いや、人として当たり前だ」

といった答えが返ってくるが三人共「「「まぁ、楽しそうだからいいや」」」ということでこの会に入っている。

三人の話を聞いて「そんなものか」ととりあえず納得する士。

完全に諦めたのか、ため息を吐き完全に聞く状態に入った士。

士「ハァ…で？この会は何をするんだ？」

フィリップ「何と言っても特に何もしないね」

士、加賀美「「え？」」

今まで静かにしていた加賀美も思わず聞き返す。

加賀美「どうゆうことだ天道？」

天道「まぁいつもは俺や津上、ソウジが料理して飲み食いして騒いでいるな」

士「じゃあ、この会は……？」

フィリップ「ああ以前仮面ライダーについて検索している時にシスコンライダーという項目を見つけてね、何となくおもしろかったので声をかけてみたら結構集まってね、霧彦義兄さんと照井竜には断られたけど……以外だったのは神崎士郎が一番ノリが良かったことだね」

神崎「フッ」

士「俺を拉致ったのは？」

フィリップ「ドッキリ？特にする事もないから丁度いいかと思ってね」

結局はお遊びだったようで……

士「そんな……下らん遊びに……俺を巻き込むなぁぁぁぁぁ！！！」

神代家に士の絶叫が響く。

第三話日下部ひよりの思い

～Ｂｉｓｔｒｏ　ｌａ　Ｓａｌｌｅ～

営業を終え、ひよりは片付けをしていた。

彼女の胸には高級品ではないが大切な恋人から送られた指輪があった。（料理をするためネックレスにしている）

いつもはあまり感情を出さないひよりだが、たまに指輪を指にはめてニヤついているのをオーナー、竹宮弓子によく見られている。

加賀美とはケンカをする事もあるが良好な関係も続いていて、（加賀美は未だにキスが出来ていないことを悩んでいる）互いの家族に挨拶も済ましている。

加賀美の父親、加賀美陸や天道の妹、天道樹花には快く受け入れられたが、天道に報告した際、天道が「ひよりと交際したければ俺以上の男でなければならない」ということで、剣の立会による決闘（ケンカ）が行われた。

最初は互いの実力は拮抗していたが後少しの所でダウンしてしまう。

加賀美「ハァッ……ハァッ……クソッ！まだ……まだだ！！」

立ち上がろうとするが足が動かない。

すると天道は……

天道「ハァッ……ハァッ……もう、いい……もういいんだ…加賀美」

その言葉に納得出来ない加賀美

加賀美「いいわけねぇ……いいわけねぇ！！」

天道「もういいんだ……お前達の……交際を……認める」

加賀美「……え？」

想像していなかった言葉に呆ける加賀美

天道曰く、元々交際を認めるつもりだったが最後に加賀美の覚悟が知りたかったということらしい。

加賀美「はっ……はは……何だよもう……イッテェなぁ、たくっ…」

天道「ふん、許してやったんだ、感謝しろ」

加賀美「何だよそ…うお！？つ…剣！？」

剣「加賀美ぃぃぃぃ良かったなぁぁぁぁ」

お互い憎まれ口を叩いていると号泣した剣が加賀美に抱きついていた。

加賀美「分かった……分かったから離れろって」

剣「うおぉぉぉぉぉ」

加賀美「ああ、もう」

剣を落ち着かせた加賀美と天道は家に戻る。

家に帰れば帰れで……

ひより、樹花「天道（お兄ちゃん）！？新（さん）！？」

ボロボロになって帰ってきた二人にひよりと樹花は怒ったような心配したような顔をしていた。

天道「ただいま樹花、ひより」

加賀美「ひより、やったぜ、俺」

ひより「やったぜって……お前、勝ったのか？」

加賀美「いや、勝った訳じゃないんだけど……」

ひより「？……どうゆうことだ？」

加賀美「いやぁ、何というか……」

天道「ま、補欠合格ってところか」

加賀美「うっ…言い返せない……」

樹花「でも、良かったねお姉ちゃん、新さん」

ひより「ありがとう樹花」

そんなこんなで丸く治まった決闘騒動、その後は剣がパーティーを開こうとしたり（流石にパーティーは遠慮した）

主人公なのに全くそんな相手がいなかった左翔太郎（以下翔太郎）や正直どうしようもないカズマや辰巳シンジ（以下シンジ）等の彼女いない組から「「「「リア充爆発しろ」」」」とお決まりなセリフを頂いたり

擬態天道総司や酔っぱらった天道に本当に爆発させられそうになったりと、加賀美は結構理不尽な目に合っていた。

ひよりはオジサン、オジサン組に「やることやったのか？」とか「子供はいつだ？」と茶化されていた。

話は戻って現在

ひよりは最後の皿を棚に戻してエプロンを脱ぎ、弓子に伝える。

ひより「終わりました」

弓子「お疲れさま、もう上がっていいから」

ひより「分かりました」

許可をもらったので支度をして店を出る。

外に出るとすっかり暗くなっていた。するとエンジンを吹かせてバイクが近づいてくる、加賀美だ。

加賀美「スマン、遅くなった！」

ひより「大丈夫だ、今終わったばかりだ」

加賀美「そうか、じゃあ帰るか」

ひより「ああ」

返事をしてガタックエクステンダーにのる。

ひよりは今天道家に住んでいる。加賀美は同棲も考えていたが天道が「結婚するまで」と、それを許さなかった。

～天道家・前～

エクステンダーを止めて降りる。

ひより「じゃあまたな」

ひより「ああ」

加賀美「……」

ひより「……」

お互い別れの言葉を口にしたはずなのに動こうとしない。

加賀美「ど…どうかしたか？」

ひより「いや、別に……お前こそ」

二人共思っていることは一つ、「もっと一緒に居たい」

二人共、色事には奥手なためなかなか言い出せないでいる。

すると腹をくくったのか加賀美がひよりを抱きしめる。

加賀美「ひより！」

ひより「あっ……あら……！？」

加賀美はひよりを抱きしめると言葉を発する前に唇を重ねた。

ひより「ん……ぷは……！～～～！？」

加賀美「ひより……グハ！？」

ひより「フン！！」

赤面したひよりが加賀美を殴っていた。

加賀美「な……何を……」

ひより「こっちのセリフだバカ！！」

意味が分からないといった様子の加賀美にもう一度殴りかかろうとするひより

加賀美「うお！？ちょっと待て！……嫌……だったか？」

ひより「嫌とかじゃなくて……初めてなのにいきなりだからだバカ！！」

かなり怒った様子で家に入ろうとするひより

加賀美「ひより！？ゴメン！！」

ひより「謝らなくていい！」

加賀美「っ……！」

ひより「次は……」

加賀美「？」

ひより「次はもっとタイミング考えろバカ」

加賀美「!?…おっ……おう!」

ひより「またな!」

勢いよく家の中に入る。

何だかよくわからない感情になった加賀美、

加賀美「うおぉぉぉぉぉぉ!!」

叫びながらエクステンダーを走らせた。

〜後日〜

このノロケ話を偶数会ったシンジ、カズマにニヤニヤしながらする

と「「自慢かこのヤロウ！！」」と殴られた。

第四話木場勇治の悩み

スマートブレイン・社長木場勇治（以下木場）

元々社員の一人だった木場、しかし、めきめきと頭角を現し始め、次々にプロジェクトを成功させ、どんどんと昇進していく。

その後は社長相談役に着いていた元社長花形に認められたことによる、花形の後押しや、前社長村上峡児の不信任により、若くしてスマートブレイン社長の地位に着いた。

～スマートブレイン・社長室～

以前の様なだだっ広い部屋ではなく、広すぎず、狭すぎない部屋に移し、いやらしくない程度の装飾をあしらっている。

夕方、大分陽が落ちた頃仕事していると隣の部屋からギャーギャーと騒ぐ声が聞こえてきて木場は頭が痛いと頭を抑える。

声が聞こえたのは木場の着替えや私物が置かれていて、仮眠用のベッド、さらにはシャワールームまで完備されている部屋である。

木場「ハァ……」

木場はため息を吐きながら扉に近づく、近づいたことにより一層騒ぎ声が大きくなる。

少し開けるか開けまいか考え、意を決して扉を開けると……

士「おい！真司！何処にシビレ罠仕掛けてんだ！！」

城戸「士だってさっきから閃光玉ミスってるだろ！！」

海堂直也（以下海堂）「ちょっとケンカしてないで助けてくれ！！死んじまう～！！」

誰が持ち込んだのか絨毯だったはずのへやには畳が敷いてあり、コタツが置かれていた。
士、城戸、海堂の三人はコタツを囲んでゲームをしていた。
ちなみに城戸とは以前イケメン若手社長と取材された以来話が弾んで仲良くしている。

木場はそんな三人を見てとりあえずツッコもうかと思う。

木場「君たち、今さらモ○スターハ○ンター３ｒ…ってポータブル？！？古いよ！！３ｒｄやりなよ！！」

ツッコミが色々と違うような気がする木場

士「木場か、俺たちが３ｒｄやろうとポータブルやろうと構わないだろう」

木場「いや、そうだろうけど……そんなことより海堂！！仕事はどうした！！」

海堂「木場か、俺が仕事をやろうと仕事をサボろうと構わないだ…
「黙れ」……すんません」

よくわからない格好づけで言う海堂を木場が静かに制す。

スマートブレイン社員・海堂直也

そこそこの地位に着いていている海堂、仕事は実は結構出来るらしく部下の面倒見もいいので人望はあるらしい、が、サボり癖が酷く一時間以上机に向かっていることはほとんどない、それでも何とかなっているのは海堂専属の部下、長田結花（以下長田）のサポートのおかげである。

そんな長田も……

長田「はい、海堂さん♪お茶入りました♪」

海堂「おう」

長田「♪」

木場「長田さん……」

スマートブレイン・社長木場勇治２１才、悩み

・部下が働いてくれない

・友人が勝手に会社に入って来る

そんな彼には心の最後の砦、強敵と書いて友と読む親友、乾巧（以下乾）が居た。木場が「乾君、助けてくれ……」等と思っていると……

ガチャ、とシャワールームの扉が開く。

すると……

乾「フゥ…」

ホカホカと頭から湯気を出してバスローブに身を包んだ乾が居た。

乾（ ̄ ー ̄ ）♪（（（

木場（@д@）

乾（ ゜ー゜）ん？

木場（@д@）

乾（ ゜ー゜）

木場（@д@）

乾「あっ、長田さんアイスコーヒーある？」

長田「あ、は～いちょっと待ってください」

木場「乾君!?君まで何してるんだ!?」

木場を無視してコーヒーを頼む乾

木場「乾君……君だけは……君だけは信じていたのに……」

最も信頼していたいた乾に裏切られた木場

部下は仕事サボってイチャつくし、友人は勝手だし、親友には裏切られるはで逃げ出そうとした木場

木場「うわぁぁぁぁぁぁ」

スマートレディ（以下レディ）「社長さ～ん、帰るんだったらちゃんと仕事仕上げてからにして下さ～い」

いつから居たのかレディィが木場に言う。

ピタッ↑立ち止まる

トス↑着席

カタカタ↑キーボード

カタカタ

キョロキョロ↑確認

ウィーン、ゴーゴー↑プリントアウト

キョロキョロ↑確認

パサ↑レディに渡す

レディ「は～い、確かに、お疲れさまで～す」

木場「うわぁぁぁぁぁぁ」

ガチャ、ドタドタ

乾「これでいいのか？」

海堂「ああ、これでしばらくは帰って来ねえ」

ニヤリと笑う海堂

～バー・クローバー～

木場「何なんだよもうアイツら」

特に注文はせずオーナー・バーテンダーの影山冴子（冴子）に愚痴る。

冴子「あらあら、どうしたの？」

木場「皆勝手なんですよ、言うこと聞いてくれないし……」

冴子「上に立つ人はそうゆうものよ」

木場「そうかもしれませんけど……」

冴子「ふふ、今夜家に来ない？私が慰めてあげるわよ」

木場「あ、結構です」

冴子「……そう」

そんなやり取りをした後、店を出る木場、その後はまっすぐマンションに戻る。

木場（どうせ帰ってもあの二人がイチャついてるだけなんだけどなぁ）

未だに独り身な木場だった。

ガチャ、

木場「あれ？開いていない？」

扉を開けようとしたが開いていないことに不信に思う。

木場「おかしいな、いつもならもう帰ってるはずなのに」

「まぁいいか」と深くは考えず鍵を取り出し扉を開けると……

パン！！

「「「「木場（さん、君）社長就任、おめでとう！！！」」」」

木場「うわぁ！？」

突然のクラッカー、木場は驚き糸まみれになっていた。

そこには乾を始め、園田真理（以下真理）、海堂、長田、菊池啓太郎（以下啓太郎）、花形、土、城戸達が居た。

木場「え?.え?.な…何?.」

乾「何って、社長就任パーティーだよ」

パーティーと聞き部屋を見回すと至るところに飾り付けがされていた。

木場「社長就任って、今さら?.」

海堂「ああ、あん時は引き継ぎだとかなんとかでゴタゴタしてたからな」

真理「そうですよ、会社のパーティーはしたらしいけど私達はちゃんとお祝い出来なかったから……」

社長就任時は会社主催のパーティーはしたもののすぐに仕事におわれたため、ろくにお祝い出来なかったのだ。

城戸「今日色々と嫌がらせしたのも気をそらすためだったんだ」

海堂「ああ、俺の指示でな、お前は嫌な事があるとクローバーに愚痴りにいくからな」

木場「城戸君、海堂……」

長田「ほらほら、主役なんですからそんなところに居ないで、はい、飲み物どうぞ」

木場「長田さん……」

海堂「よし！全員グラス持ったな？……では木場の社長就任を祝して、カンパ～イ！！」

「「「「カンパ～イ！！」」」」

木場「皆……ありがとう！！」

こうして夜はふけていく……

～その後～

木場「おい！聞いてんのか海堂！？／／／」

海堂「聞いてるよ、それよりお前飲みすぎだ……」

木場「あ？全然酔ってねぇよ／／／てかお前ちゃんと仕事しろ！！

サボってんじゃねぇ！！あとこれ見よがしに俺の前でイチャつくな！！」

海堂「あ～、スマンスマン」

乾「木場、落ち着けって」

木場「乾君、キミもだよ」

乾「何が？」

木場「いっつも、会う度に園田さんがあーだ、こーだってなぁ！ノロケ話を聞く身にもなれ！！女居ねぇからってバカにすんな！！」

乾「もうコイツ嫌だ」

木場「あ！？」

酒癖が悪い木場であった。

第五話光写真館一行の花見

士「桜の木の下には死体が埋まっているって言うよな」

花見をしていた写真館一行、酒も入り頬を赤くした士が唐突に言う。

ユウスケ「何だ急に？」

夏海「確か誰かの小説でしたっけ？え～と……」

海東「梶井基次郎の『櫻の樹の下には』だね、桜の樹が美しいのは死体が埋まっているからだという空想に駆られた主人公の物語で主人公はそこから死への期待が……」

ユウスケ「海東うるさい」

海東「……」

士「まぁ、海東はほっとけ……よしユウスケ、掘ってみろ」

夏海「ちょっ？怒られちゃいますよ！？」

ユウスケ「え～～？」

と、どこからもってきたのかシャベルを軽く地面に刺しているユウスケ。

夏海「ユウスケ！？」

士達が騒いでいると……

ショウイチ「おい、何してんだお前ら」

制服を着ているショウイチが居た。

士「ショウイチか、見ての通り花見だ、お前こそそんな格好でどうした？」

ショウイチ「こっちは警備だよ、お前らみたいな馬鹿がバカしないようにな」

士「バカとはなんだ、バカなのは海東だけだ」

海東「士！？」

ショウイチ「まぁいい、く・れ・ぐ・れ・も問題おこすなよ？」

そう言い残し去っていくショウイチ

士ユ海「「「……」」」

夏海「どうしたんですか皆？」

士「やるなと言われれば……」

ユウスケ「やりたくなるのが……」

海東「男の性（さが）ってね」

夏海「何言ってるんですか？」

訳の分からないことを言う三人に呆れる夏海

士「よし、ユウスケ、海東やるぞ」↑シャベル装備

ユウスケ「ああ」↑既に装備

海東「もちろんさ」↑シャベル装備

桜の木の下を掘り出す士達

夏海「本当に何やってるんですか」

ついていけないと夏海は離れる。

士「あったーーー！！」

夏海「本当に出た！？」

何かを見つけたらしい士達に驚いた夏海は何がでたのかと覗く。

夏海「……何ですかこれ？」

士が見つけたものは死体……ではなくド派手な柄物パンツだった。

士「パンツ？」

ユウスケ「パンツだ」

海東「パンツだね」

夏海「な…なんでパンツが桜の木の下に」

士「死体が履いてたパンツ？」

夏海「怖いこと言わないでください！！」

ユウスケ「怖いか？」

海東「さあ？」

「でもこれ……」と何故かこのパンツに見覚えのある四人、「うーん」と考えていると……

映司「俺の明日！！」

士ユ夏海「「「「うわぁ！？」」」」

いきなり出てきた映司に驚く四人

映司「良かった～見つかった俺の明日」

ユウスケ「ああ、どうりで見覚えあると思ったら映司のか」

夏海「でも何で映司さんのパンツが桜の木の下に……」

海東「確かに、埋めたの？」

映司「いや違うんだ、この前この辺りの桜の植え替えのバイトしたんだけどその時に落としたみたいで……」

士「そこに偶然俺たちが発掘したと」

映司「そうゆうことみたい、ありがとう！助かったよ」

四人「「「「……」」」」

映司「えっと……どうしたの？」

士「いや……」

ユウスケ「別に……」

夏海「何か……」

海東「ねえ……」

四人「「「「つまんね」」」」

映司「えぇぇぇぇ！？」

理不尽な四人に驚く映司

映司「つまんないってなに！？」

士「いや、特に意味はないんだけどな……」

ユウスケ「何となく？」

映司「何で俺がそんなこと言われなきゃならないの！？」

夏海「あーもういいですよ」

映司「夏海ちゃんまで！？皆酷いよ！！」

と、映司は泣きながら去っていった。

夏海「流石に言い過ぎましたか？」

士「夏みかんやり過ぎだ」

ユウスケ「夏海ちゃん酷い」

海東「夏メロン……」

夏海「私だけ！？」

～広場～

あの後三人と別れた夏海は屋台やステージがある広場にやって来た。

ステージではカラオケ大会が行われているようで参加者は思い思いに歌っている。

視線を移すと天道と津上が料理対決していた、審判は加賀美陸だが至って普通の対決のようだ。

「これで何回目だろう」と思っていると……

「お～い、夏リンゴ」と呼ぶ声

夏海「誰が！？って伊達さん……」

伊達明（以下伊達）「おう、こっちこっち」

声がした方を向くと伊達がソウジがつくるおでんをつついていた。

ソウジ「やあ、デコポンもたべるか？」

夏海「デコポンって何ですか！？柑橘類しか共通点が無いですよ！？……って夏みかんを肯定してしまいました！！」

伊達「楽しそうだねぇ」

夏海「どこが！？」

ソウジ「ははは」

夏海「ソウジさんも笑わないでください！！」

夏海「……で、ソウジさんも屋台だしてるんですか？」

ソウジ「いや、ただの花見だけど」

夏海「ただの花見でおでんを！？」

そう言いながらも皿を受け取る夏海

夏海「モグ……ん、やっぱりおいしいですね」

ソウジ「いやぁ、ありがとう」

伊達「確かにおいしいんだけどねぇ……」

どこか不満そうな伊達

ソウジ「……どうかしたか？」

夏海（あれ？ふ…雰囲気が）

少しピリピリした雰囲気のソウジ

伊達「もっと具増やそ「天堂屋のおでんはこの三種類だけだ」……
…」

有無を言わせないとソウジ

伊達「いや、でもさぁ」

ソウジ「何でもだ」

伊達「……」

ソウジ「……」

睨み合うソウジと伊達、一触即発な空気が漂う。

飛んできたカブトゼクターを構えるソウジ

セルメダルを飛ばし、左手でキャッチする伊達

ソウジ、伊達「「変し……」」

夏海「させません！！」　ズボッ

二人が変身する前に笑いのツボにを指す夏海

ソウジ、伊達「「あはははははは！？」」

笑いが止まらなくなった二人、変身する余裕も無い。

夏海「こんなところでやる気ですか！？」

ソウジ「あははは、ちょ、夏海……君……ぷっ、くく、あはははは！？」

伊達「夏海ちゃんあはは、こりゃない……ぜ…はははは！？」

夏海「もう戦おうとしませんか？」

ソウジ「分かっ……分かったからはははははは！？」

伊達「これ、と…止めてぷっはははははは！？」

夏海「しばらくすれば治まります」

二人「「あはははははははは」」

笑いが止まらない二人をのこして立ち去る夏海

最初の場所に戻った夏海、そこら辺は穴だらけでしかもごちゃごちゃといろんな物が転がっていた。

夏海「ど…どうしたのですか、これ？」

近づいて来た夏海に座り込んでいた士が顔を向ける。

士「夏海……」

士はぐったりとしていた。

夏海「何だか大変なことになってますね」

士「ああ、いくら掘っても死体は出なくて、妙なものばかりでてな

……」

夏海「出ても困りますよ！？」

ユウスケ「また出た！？」

ユウスケが何か掘り出したようだ。

ユウスケ「これは……紫のメダル？」

夏海「ネタばれダメ！！」

といった感じに映してはいけないものだったり、古代の怪人が出たり、オーパーツが出たりと「何で！？」としか言う事がない物ばかり出てきた。

夏海「……もう出たものはいいです……いやよくないですけどいいです、でもこれどうするんですか？」

夏海は周りの惨状をみる。

あたり構わず掘ったためそこら中穴だらけである。

ユウスケ「途中から変なテンションになったからなぁ……」

遠い目のユウスケ

「どうしよう」と思っていると……

四人「「「「！？」」」」ゾクッ

殺気を感じ、振り返ると……

ショウイチ「……」

明らかに雰囲気がおかしいショウイチが居た。

士「げ！？ショウイチ……」

ショウイチ「お前ら……」

四人「「「「ヒィ！？」」」」

さらに増す殺気

ショウイチ「言ったよなぁ……問題起こすなって……なぁ？」

ユウスケ「はっ、はいぃ！？」

夏海「たっ、確かに」

ショウイチ「じゃあ、これはどうゆうことだ……？」

海東（これはマズイね）

危険を感じた海東はコッソリと『インビジブル』を発動させようとするが、それに気づくショウイチ

ショウイチ「逃がさん！！」

海東「ギヤァァァァ！？」

超能力を使い海東を弾き飛ばす。

その光景を見て更に怯える三人

ショウイチ「お前ら分かってるよなぁ？」

三人「「「はいぃ！？」」」

自然と気を付けになる。

ショウイチ「だったら……とっとと元に戻しやがれ！！！」

三人「「「いっ、イエッサー！！」」」

その後、三日三晩、四人は穴埋め作業に駆り出された。

第六話尾上タクミの幸福

～スマートブレインハイスクール～

木場が社長を勤めるスマートブレインが経営しているスマートブレインハイスクール

時間は放課後の様で談笑しながら下校している生徒や部活をしている生徒の姿が見られる。

その中に写真撮影に使われるレフ板を持った少年・タクミとインスタントカメラで花壇を撮影している少女・由里が居た。

由里「タクミ、どう？」

由里は撮れた写真をタクミに見せる。

タクミ「うん、いいと思うよ」

素直に返すタクミ

二人は実に楽しそうにしている。

そんな様子を周りは「「「またやってるな」」」と暖かいというよりも生ぬるい目で見ていた。

その後、何枚か撮影しているとラッキークローバーに絡まれたりもしたが適当にあしらい、由里の公園に移動しようとの意見で公園にやって来た。

～公園～

公園に着くと追いかけっこをしている子供やそれを見守っている母親達が居た。

ふと視線を移すとその光景を撮影しているシンジが居た。

タクミ「シンジさん」

タクミはシンジに近づき話しかける。

シンジ「ん？あ、タクミ」

タクミ「何してるんですか？」

シンジ「何って……これ」

そう言ってカバンから一冊の写真雑誌を取り出し二人に見せる。

その雑誌は写真愛好家に人気のあるものでタクミもよく知っている。

シンジ「この投稿コーナーに送ろうと思ってね」

投稿コーナーのページを開けるとそこには前回の入賞作品や次のテーマ、募集要項等が書いてある。次のテーマは「幸せ」らしい。

由里「プ…プロが投稿していいんですか？」

シンジ「う～ん…まぁあくまで腕試し感覚なんだけどね、それにずっと投稿してるけど入賞したこともそんなにないよ」

「はは……」と笑うシンジ

入賞するだけでもすごいと思うタクミと由里

シンジ「しっかし幸せってのがなかなか難しくてね」

タクミ「幸せですか……」

シンジ「うん、二人は何かある？」

由里「私は……いい写真が撮れたら……かな」

シンジ「写真か…分からないでもないかな、タクミは？」

タクミ「俺ですか？えっと……今が…幸せ…ですね」

由里をチラリと見ながら言うタクミ

シンジ（ああ、なるほど）

察しがついたシンジ

由里「へ～？」

「そうなんだ」としか思っていない由里

シンジ「ありがとう、参考になったよ、じゃあそろそろ移動するか

な」

そう言い残し去っていくシンジ

シンジ（頑張れよ）ボソッ

すれ違いざまに聞こえないようにつぶやく。

タクミ「？」

由里「タクミ私達も行こ」

タクミ「うん」

その後は写真をいくつか撮り、だいぶ陽が落ちてきたのでそろそろ帰宅しようかと考えていると……

由里「ねえタクミ、タクミは今が幸せなの？」

タクミ「え……？」

突然の質問に呆けるタクミ

由里「ほら、シンジさんとの……」

タクミ「ああ……うん……そうだね……幸せだよ」

由里「何が？」

タクミ「へ？」

由里「だから、何が？」

タクミ「な…何がって？」

由里「いやほら、今がって抽象的過ぎるじゃない、だから何かなって」

タクミ「何かって、そんなの……」

「そんなの決まってる」そうはっきり言いたい

「君のそばにいることが幸せなんだ」って伝えたい

でも言えない、君との関係が壊れるのが恐いから

つい思考にふけっていて周りが見えなかったタクミ

すぐ目の前にある由里の顔に気がつくのに少し時間がかかった。

由里「タクミ？」

タクミ「え？……うわぁ！？」

由里「キャ！？」

あまりのことについ手が出てしまい由里を転ばせてしまう。

タクミ「ゴゴゴゴゴメン！」

由里「もう！何するのいきなり！」

タクミ「だっ、だって……」

もちろん彼女に他意はない純粋にタクミを心配したからである。

そうは言いながらも手を差し出すタクミ

由里はその手を掴み立ち上がろうとする。
ここまでは良かったしかし、色々と予想外な事が起こりテンパってしまったタクミ

由里を立ち上がらせようと由里の腕を引っ張ったが力を入れ過ぎてしまい……

タクミ「あ……」

由里「え……」

結果、抱き合う形になった。

由里「ゴ…ゴメンね！」

離れようとする由里

しかし、タクミが由里の肩を抑え離れられない。

由里「タクミ？」

タクミ「由里ちゃん」

今までに無いほど真剣な目付きのタクミに狼狽える由里

由里「なな何？」

タクミ「由里ちゃん……何が幸せなのかって聞いたよね？」

由里「う…うん」

タクミ「これからもっと色んなことがあるかもしれないけど僕は……僕は……！！」

タクミ「『今』が幸せなんだ！！」

由里「タクミ……うん」

タクミのその言葉に何か伝わった様な由里

タクミ「じゃ…じゃあか…帰ろっか」

別にはっきりと告白した訳ではないが気恥ずかしいタクミ、そう言って歩き出す。

タクミの後ろ姿を見ながら由里はつぶやく。

由里「ねえ、その『今』に私はいる?」ボソッ

タクミ「え?な…何か言った?」

由里「んー?何でもなーい♪」

そう言い走り出す由里

タクミ「え？ちょっと待って！」

タクミも走り出す。

二人の顔はとても幸せそうだ。

～数日後・スマートブレインハイスクール～

「おーい、タクミ」

タクミの友人A、（彼もカメラが趣味なのだがが写真部には入って

いない、A曰くあくまで趣味なので部活に入ってまでする気は無いとのこと）Aは雑誌片手に声をかける。

タクミ「ん？何？」

A「ちょっと聞きたいんだけど……」

そう言い雑誌を見せる。それは　シンジが持っていた写真雑誌の最新号だった。

A「えっと……あった、これこれ」

開いたページはこれもシンジが見せたのと同じ投稿コーナーだった。

Aが指差した写真を見る、それは夕日をバックに見つめ合う男女の写真

タクミ「これって……」

A「ああ、タクミと友田さんだよな」

影になっていて分かりにくいが確かにタクミと由里だ。

タクミ「な…何で……！？」

「どうして自分達の写真が？」と思いふと投稿者の名前を見る、そこには……

『投稿者・辰巳シンジ』

タクミ「シンジさぁぁぁぁん！？」

学校中にタクミの絶叫が響き渡る。

その頃シンジは……

シンジ「おーやったー」

掲載された自分の写真を見て喜んでいた。

あの時……

シンジ「うーん…あんまりいいの撮れなかったな……」

シンジもそろそろ帰路に着こうとしていた。

シンジ「あれ？タクミと由里ちゃん、まだやってたのか」

話しかけようかと近づこうとしたが、妙な雰囲気を感じ、様子を見る、すると顔を近づける由里、転んだ由里を引っ張り抱き合うタクミ

シンジ「これは！？」

ピキーンとさらに何かを感じ、見つめ合う二人を撮影する。

シンジ「よし！中々いいかも♪」

いい写真が撮れたと立ち去るシンジ

そして投稿した結果、見事入賞した。

笑顔のシンジ、理由は入賞しただけではない。

しばらく雑誌を読んでいるとシンジのパートナー羽黒レンがやって来た。

レン「おい、シンジ、取材行くぞ」

シンジ「はーい♪」

レン「どうした?やけに嬉しそうだな」

シンジ「んー？何でもなーい♪」

レン「キモい」

シンジ「ヒド？！？」

そんなやり取りをしながらも取材先に向かうシンジも……

シンジ（頑張れよタクミ♪）

と心の中で応援していた。

第七話アンクの家庭事情

～クスクシエ～

普段は店の陽気な雰囲気や知世子の演出で笑顔の絶えないクスクシエだが、今日は異様な雰囲気が流れていた。

映司「……」

アンク「……」

比奈「……」

アンク・ロスト・人間態「……」

テーブルに座り沈黙する四人

その空気を断つようにアンク・ロスト（以下ロスト）が口を開く。

ロスト「……お父さん……？」

映司「やっぱり！！」

比奈「なにしてるのアンク！！」

アンク「違ぇ！！何で俺のガキになってんだ！？」

ロストのお父さん発言に映司は納得、比奈の非難に対し、アンクは否定する。

比奈「じゃあ、何でこの子がお父さんなんて言うの！？」

アンク「知るか！！そもそもこいつはぁ俺の……」

映司「アンク……駄目だよ、自分の子供はちゃんと面倒見なきゃ…

…」

アンク「話を聞けぇ！！」

ロスト「……パパ……？」

どうしてこうなったかというと……

昼のピークも過ぎ、客足も途絶えだした頃、ロストがやって来た。
そしてアンクが「な！？」と反応したと思うといきなりアンクに抱きついたのだ。

アンクの反応とロストの行動を見た映司と比奈は色々と思考を巡らせた結果「この子はアンクの隠し子」という答えに行き着いた。

比奈「そ…そうだ、アンク、相手は？」

映司「あっ、確かに……こうしちゃいられない！菓子折り持って挨拶に行かなきゃ！！」

アンク「お前は俺の何なんだ……」

ロスト「……ダディ……？」

三人が色々と騒いでいると……

カザリ・人間態「アンク！？」

血相を変えたカザリがやって来た。

映司「いらっしゃいカザリ、どうしたの？」

カザリ「映司！ここに無口な子供が……あぁ良かった、いた」

カザリが何かを聞こうとしたかと思うと、ロストを見てほっとしていた。

しかし……

ロスト「あ……カザリお兄ちゃん……」

三人「「「!?」」」

またしてもロストの発言により面倒なことになる。

映司「え!?と…いうことはつまり……」

比奈「カザリもアンクの子供!?」

カザリ「ええ!?何それ!?どういうことアンク!?」

アンク「ハァ……とりあえずカザリ、まずはそいつのことを説明してやれ」

ロスト「……？」

疲れたアンクはカザリに説明を促す。

しばらくして……

映司・比奈「「もう一人のアンク？」」

カザリ「そ、昔色々あってね、アンクっていうグリードは腕と本体に分かれてしまったんだ」

何かとすっ飛ばした説明だが納得する二人

映司「何だ、そうゆうことなら早く言ってくれればいいのに……」

アンク「俺は言おうとした！！」

比奈「そんな事よりどうして急に一人で……えっと、何て呼べば？」

カザリ「ああ、一応名前はアンクだけど……」

比奈「じゃあ、あっくんて呼んでいい？」

ロスト「……」コクッ

比奈の問いにロストは小さくうなずく。

比奈「じゃあ、あっくん、どうして急にアンクに会いに来たの？」

するとロストはアンクをチラリと見て……

ロスト「……会いたかった」

との一言、これに対しカザリが補足する。

カザリ「えっとね、最初はあっくんもアンクを取り込んで一体化しようしたんだけど、その内別の…あっくんとしての自我が生まれたみたいで、アンクを父親みたいな存在って認知したんだ」

カザリもあっくんと呼びだしたがとりあえず置いておく。

つまりロストは寂しかったとのこと。

比奈「そっか、寂しかったんだね」

ロスト「……」コクッ

映司「アンク、知ってたんならちゃんと面倒見なきゃ」

アンク「けっ！何で俺が……って離せ！！」

ロスト「……おとん……？」ギュッ

毒づくアンクの服の裾をロストが掴んでいた。

映司「そういえば、さっきから呼び方が変わってるけど」

カザリ「それ実はウバァ達が面白がって色々教え込んだんだ」

アンク「ったくアイツらは余計な事しかしねぇな……」

カザリ「まぁまぁ」

アンク「ちっ、おい映司！アイス持ってこい！！」

映司「しかたないな、そうだ、あっくんもアイス食べる？」

ロスト「……チョコレート……」

映司「分かった」

映司が持ってきたアイスを並んで食べるアンクとロスト

アンク「……」シャリシャリ

ロスト「……」ペロペロ

その光景を見て……

映司「何だか和むね」

比奈「うん、結構お似合いじゃない？」

カザリ「はは、そうだね」

アンク「ちっ……」

アイスを食べ終えたアンクは外に行こうとする。

映司「どこに行くんだ？」

アンク「知るか」

そう言ってアンクは出て行った。

ロスト「……待って……」

そのすぐ後にアイスを食べ終えたロストがアンクを追いかけて出て行く。

映司「あっ、俺も行った方がいいかな？」

カザリ「待って映司……今は二人っきりにしてあげてくれるかな？」

映司「え、何で？」

カザリ「アンクも大分あっくんを認められるようになってきたみたいなんだ、だから……ね？」

映司「カザリ……うん、分かった」

カザリ「ありがとう、映司……じゃあ、僕は帰るね」

映司「ああ」

クスクシエを出たアンクは特に目的もなく街を歩いていた。

その少し後ろをロストが一生懸命追いかけている。

歩幅が違うためアンクが早歩きになるとロストは注意していなければすぐに離れてしまう。

アンク「ちっ……」

それに気づいたアンクは何を思ったか歩く速度を落とす。

ロスト「……父上……」

アンク「呼び方統一しろ！！」

それからは二人並んで歩く。

ワタル「あれ？アンク」

アスム「その子は？」

しばらく歩いているとワタルとアスムに会う。

アンク「キバのガキに響鬼のガキか…」

ワタル「ガキとは何ですかガキとは！？」

アスム「ワタル、落ち着いて」

と、どこかで見たようなやり取りをする。

ワタル「それでその子は？」

再びロストについて質問するアスム

アンク「あ？ああ、こいつは……」

ロスト「……父様……？」

二人「「えぇ！？」」

アンク「面倒くせぇ！！」

アスム「何か感じが似てるようなと思ったけど！？」

ワタル「まさか本当に！？」

アンク「ああ！！もう行くぞ！！」

説明が嫌になったアンクはロストの腕を掴んでさっさと行くことにした。

それから知り合いに会う度に誤解されるためアンクはクスクシエに戻ることにした。

アンク「ハァ……」

ロスト「……」

ぐったりした様子のアンク

対しロストは少し嬉しそうだったりする。

疲れたアンクはすぐにいつもの寝床に入る。

しばらく目をつむっていたが思うところがあるのか起き上がり傍でうとうとしているロストに声をかける。

アンク「おい」

ロスト「？」

アンク「来い」

ロスト「……」コクッ

アンクはロストが落ちないように壁側に寝かせる。

しばらくすると寝息が聞こえてきた。

ロスト「スゥ……スゥ……」

アンク（何やってんだ俺は）

ロスト「スゥ……スゥ……」

ロストの寝顔を見るアンク

アンク（……けっ）

いつの間にか眠ったアンク

その顔はよーく見なければ分からないがほんの少し笑っていた。

第八話地獄兄弟の転機と受難

この日、街では異様な光景が見られていた。

ショウイチ「おい」

ソウジ「ん？」

ショウイチ「あれは……何だ？」

ソウジ「あれは……」

歳が比較的近い二人は意外と仲が良く、しばしばつるんでいるのが目撃されている。

そんな二人の視線の先には……

矢車想「ふぅ…大体こんなものか……」

壁の落書きを消している矢車と……

影山瞬「兄貴！こっちは終わったよ♪」

ゴミが大量に入ったゴミ袋を担いだ影山がいた。

地獄兄弟で通っているこの二人

格好はいつもの通りなのだがその顔はいつものやさぐれた表情ではなく、あの笑顔で定評のある五代や津上に並ぶ程の爽やかな笑顔をしている。

二人の他には老若男女様々な人がいてどうやら奉仕活動のようである。

ショウイチ「な…何があったんだ一体」

ありえない、といった感じで目を見開くショウイチ

対し冷静なソウジ

ソウジ「ああ、あれか」

何か知っている様な口振りである。

ショウイチ「知ってるのか?」

ソウジ「ああ、天道君から聞いたことがある、何でもミルクディッパーの常連の三浦君がどうゆう経緯か二人に催眠をかけたらしい、それが成功し、結果プロ級の料理を食べると以前の…いやそれ以上に善良な心になるそうだ」

ショウイチ「……」

ハァ？と言いたげな目でソウジを見るショウイチ

ソウジ「事実なんだから仕方がないだろう、」

ショウイチ「訳がわからん」

「妙なことになってんな」とショウイチが思っているとどうやら作業が終わった様で奉仕活動に参加していた人達がゾロゾロと解散していく。

影山「兄貴、俺腹減ったよ」

矢車「そうだな、よし今日は麻婆豆腐だ！」

影山「やった♪」

ショ・ソウ（（本当に良い笑顔だな））

去っていく二人を微笑ましい様な少し引いた様な感情で見送るショウイチとソウジだった。

～数日後～

それからというもの、性格が１８０度変わった矢車と影山は奉仕活動を始め老人の荷物持ちや子供の遊び相手等、絵に書いた様な善行を行なってきた。

人々の印象もガラッと変わり今ではすっかり街の人気者になっていた。

今日も無くし物をしたひとの為に街中を駆け回った二人は帰路に着こうとしていたのだが……

高鳥蓮華「影山さーん、矢車さーん」

影山「やあ、蓮華」

蓮華「お疲れさまです」

矢車「ああ」

ここで蓮華に出会ったのがいけなかった。

蓮華は料理を作ったのだが試食してくれる人を探していたとのことで二人はいい感じに空腹だったので快く引き受けた。

しかし二人は知らなかった、蓮華は戦闘以外は全く駄目だということを……

影山「俺なんて俺なんて俺なんて俺なんて俺なんて俺なんて俺なんて……」

矢車「駄目なんだ俺みたいな奴が光を求めるなんて、それが例え気付かないような刹那の光だろうと、手を伸ばしても届く訳がないんだ、例え世界の全てを知ろうと、どんな行いをしようと俺に輝く光なんてないんだ」

天道・ショ「「ハァ……」」

ソウジ「ハハハ……」

加賀美「あーどうすんだよこれ？」

蓮華「う～すいません」

蓮華の料理を食べた二人は今までの反動かさらにやさぐれていた。

蓮華の…当たりもあるがほとんどハズレの料理を食べた二人は運悪くハズレを引き、黙ったかと思うとこの状況になっていた。

三浦曰く美味い料理を食べて良くなったのに反して不味い料理を食べて悪くなったとのこと。

矢・影「「お前はぁぁぁぁぁ！いいよなぁぁぁぁぁ！！」」

五人「「「めんどくせぇ！！」」」

しばらくして二人はもとのやさぐれに戻ったそうな……

第九話子供の日の騒乱

士「端午の節句を祝いまして……かんぱーい！！」

全員「「「かんぱーい！！」」」

今日はこどもの日、端午の節句である。

大人組は全員酒で乾杯を始めた。

主役の子供組はジュース片手に苦笑いをしている。

士「いやーめでたいめでたい」

タクミ「もう子供の日に祝ってもらう歳じゃないんだけどなぁ……」

ワタル「まったく、何がめでたいですか、飲む言い訳でしょうに……」

士「何だ、ワタル、堅いこと言うな」

ショウイチ「そうだそうだ、たまにはハメ外したっていいだろ」

普段は自分の立場もあり中々はしゃげないショウイチ、今日ばかりは、とのことらしい。

ワタル「ショウイチさんはともかく、その他の人はどうかと……」

津上「まあまあ、はい、柏餅食べる？」

横から出てきた津上、自身が担当した柏餅を差し出す。

アスム「津上さん、ありがとうございます」

ロスト「……ありがとう」

アンク「おい、アイスは無いのか？」

柏餅を受け取るアスムとロストとアイスをねだるアンク

ちなみにロストはアンクの足に座っている、細かく説明するとあぐらをかいたアンクの足にロストが座っているのだ。

はたから見るとまさに親子である。

ワタル「お父さんもたまにはアイス以外のものも食べたらどうなんですか？」

アンク「誰がお父さんだ！？」

ロスト「……お父さん……おいしいよ……」

呼び方はお父さんに統一したらしい。

ワタル「ほら、あっくんもこう言ってるじゃないですか」

アンク「ちっ……」

舌打ちしながらも柏餅を食べるアンク、ロストが絡むと強気に出れないようだ。

全員（（（素直じゃねえなぁ））））

今回用意された料理、津上や天道をはじめとした料理自慢達が調理を担当したためかなり豪勢になっている。

カズマ「この鯛飯ウメー！！」

天道「フッ…当たり前だ、わざわざ俺が釣ってきたのだからな」

翔太郎「こっちのチマキもなかなかだぜ！！」

フィリップ「チマキの作り方は完全に把握したからね」

良太郎「……餃子？」

剣崎「……おでん？」

城戸「と…得意なんだからいいだろ」

ソウジ「ん？」

端午の節句にちなんだ料理が並ぶなか、餃子があったりおでんがあったりカレーがあったりした。

大分酒が廻り盛り上がってきたころで……

ソウジ「おーい、にげろー」

急にソウジが逃げるようにと促してきた。

「何だ?」とざわついていると奥から五月人形と一緒に飾られていた刀を持ってユラリユラリと揺れながらショウイチが歩いて来た。

皆がいるところに来たと思うと近くにいた海東に目をつけた。

ショウイチ「……」

海東「え?.え?.え?.」

ショウイチ「……」シュッ

ガッ

海東「ギヤァァァ!?」

刀を構えたかと思うと肉眼では見えない程の速さで叩き込んだ。

ソウジ「ショウイチは完全に酔っ払っている、何か恨まれてるような奴は逃げた方がいいぞー」

士・ユウ・夏「「「ギクッ!?」」」

思い当たる節がある三人はあからさまに動揺する。

普段は我を失うまで飲むことは無いショウイチなのだがバカ（士）やアホ（海東）関係で色々と鬱憤が溜まっていたのか今日は酒をつぐ手が止まらなくなったらしい。

そして、酔っ払った勢いでのご乱心らしい。

士「に…逃げ…ガハッ」

ショウイチ「……」フッ

逃げようとした士、しかし、酔っ払ったことでリミッターが外れたのかクロックアップ並みの速さで移動し士に刀を叩き込む。

ショウイチ「……」ギロッ

ユウ・夏「「ヒィ！」」

次にユウスケと夏海に目をつけたショウイチ、ゆっくり二人に近づく。

ショウイチ「……」スッ

二人「「イヤー！」」

刀を上段で構え、降り下ろそうとした、が……

ソウジ「ショウイチ、眠ってろ」

降り下ろそうとした瞬間、ショウイチに生身ライダーキックを決めるソウジ

ショウイチ「!?」ドサッ

声も出さずに崩れるショウイチ

ユウスケ「たっ……」

夏海「助かった～」

ソウジ「フム、目が覚めたら元に戻っているだろう」

夏海「ありがとうございますソウジさん！！」

ソウジ「いや、実際ショウイチも結構限界だったからなぁ…」

二人「「うっ…」」

ソウジ「まぁ被害も二人ですんだしいいだろ……さあ皆、飲み直そう」

全員「「「い…イェーイ」」」

ソウジ「ハハハ」

全員顔をひきつらせながらちびちびと飲みはじめた……

～その後・夜～

海東「グー……グー……」

士「……ハックション！ズビッ……？……誰もいねぇ……グー」

解散した後も放置された二人（ショウイチはソウジが送った）は翌朝まで寝てしまい、仲良く風邪をひいたらしい。

第十話鳴海探偵事務所の絆

～鳴海探偵事務所～

ここには様々な悩みを持った人が助けを求めてやってくる。

人々の最後の拠り所――そこでは一人の男がぼやいていた。

翔太郎「あー……暇だ」

椅子にダランと座っている翔太郎、その格好は彼が信条としているハードボイルドとはかけ離れている。

翔太郎の言葉通りやる気が起こらない程依頼が無いのだ。閑古鳥の

鳴き声も聞こえてしまう。

翔太郎は探偵だ。探偵は依頼がなければどうしようもない。

いつ依頼が来るかも分からないので待っているのだが中々依頼もないので呆けてしまう。

翔太郎「ハァ…暇だ……フィリップの奴は何してんだ？」

何となく相棒であるフィリップの事が気になり普段フィリップがいる地下ガレージに向かった。

翔太郎「おーい、フィリップ……フィリップ？あれ、いねぇ」

地下ガレージに入った翔太郎、いつもならここで興味を持ったことについて『地球の本棚』で検索しているのだが今はいない。

翔太郎「あ、そうだそうだ今日は実家に行ってるんだったな」

今日フィリップは実家である園咲家に出向いている。

フィリップ――本名・園咲来人は幼い頃事故に巻き込まれ家族と生き別れてしまった。

その後は先代所長・鳴海荘吉に引き取られた。

荘吉亡き後は翔太郎の相棒として依頼を解決していたが、ある依頼がきっかけで家族と再会したのだ。

それからフィリップは家族との関わり合いを大切にし、度々園咲家におもむいていた。

翔太郎「どうせまた若菜姫とイチャついてんだろうな」

翔太郎の言うようにフィリップと姉である園咲若菜は非常に仲が良い。

それは姉弟と言うよりもむしろ恋人の関係に近い（一線を越えるこ

とは無い）以前翔太郎がフィリップに誘われ園咲家を訪れた時もラブラブっぷりを見せつけられた。

しかし、それはフィリップと若菜だけに限らず園咲一家の仲の良さは並みではない。

まず家長である園咲琉兵衛とその妻シュラウドこと園咲文音、以前関係の不仲により離婚の危機もあったが今ではその面影も無いほど仲が良い。

長女の園咲冴子とその夫園咲霧彦も最初は政略結婚のような感じでギクシャクしていたが、今ではすっかり打ち解けている。

園咲一家の仲のよさを見ていると独り身の翔太郎は自然と目からしょっぱい水が流れしまう。

話は戻り、翔太郎は地下ガレージから事務所に戻る。

翔太郎は改めて事務所を見回してみる。

翔太郎「……なんか広いな……」

どことなく広く感じてしまう探偵事務所、以前は翔太郎、フィリップとさらに荘吉の愛娘、鳴海亜樹子と三人で活動していたが亜樹子が照井と結婚したため事務所を出て照井の家で生活している。たまに事務所には遊びに来る。

三人でいた時は騒がしくも楽しかったため一人でも抜けてしまうと寂しく感じてしまう。

翔太郎「……ハァ、らしくねぇな！おい！！」

何度目かのため息のあと自分を叱咤する。

翔太郎「今日はもう店仕舞いだ、外にでるか……」

気分転換に外に出ることにした。

外に出た翔太郎は特にあてもなく歩いている。

翔太郎「さて、どうするかな……」

空はまだ青い、これからどうしようかと考えていると……

「どいてくださーい！！」

ドン！！

翔太郎「ガハッ！？」

誰かの叫び声のが聞こえたと思うと背中に衝撃が走る。

翔太郎「いってぇ……何なんだって…良太郎じゃねぇか」

ぶつかってきたのは良太郎だった。アルバイトをしているミルクディッパーに向かう途中だった様で側には自転車が転がっている、またブレーキが壊れたらしい。

良太郎「痛たた…あっ翔太郎さん！ごっごめんなさい！！」

翔太郎「あ…ああ、気にすんな」

良太郎の体質は周知のことのため翔太郎も承知している。

良太郎「で…でも……」

翔太郎「だから気にすんな、怪我はしてねぇから、ほら立てよ」

そう言い手を差し出す。

良太郎「は…はい……痛！？」

翔太郎の手を掴み立ち上がろうとした良太郎、しかし苦痛の表情を浮かばせる。

翔太郎「おいおい、大丈夫か？」

良太郎「ごめんなさい、足が……」

どうやら転び方が悪かったらしく足を捻ったらしい。

翔太郎「足をやったのか？……歩けるか？」

良太郎「……つっ！？…駄目みたいです……」

翔太郎「仕方ねぇな」

そう言うと翔太郎は良太郎を背負う――所謂おんぶの状態で送ることにした。

良太郎「ごめんなさい……」

ぶつかった上にさらに送ってもらうことになってしまい申し訳なく思い落ち込んでしまう。

翔太郎「だから気にすんなって」

良太郎「はい……」

しばらくして二人はミルクディッパーに着いた。

翔太郎「邪魔するぜ」

愛理「いらっしゃいませ～あら翔太郎さん……って良ちゃん!?」

翔太郎に背負われた良太郎を見て驚く愛理

翔太郎「どうも…良太郎、自転車で転んじまって足をやったみたいなんだ」

愛理「そんな……ありがとうございます翔太郎さん」

翔太郎「いいから、ちょっと救急箱借りるぜ」

愛理「は…はい！」

処置を終えた翔太郎、愛理からお礼としてコーヒーをご馳走になっていた。

翔太郎「ふぅ…流石愛理さん、いい腕してるぜ」

愛理「いえいえ、コーヒー達がいい仕事してますから」

翔太郎「違いねぇ」

翔太郎「ここは賑やかだな……」

常連客達の賑わいをみてつぶやく翔太郎

良太郎「？」

愛理「どうかしました？」

少し暗い表情を浮かべる翔太郎が気になる良太郎と愛理

翔太郎「ああ、ちょっとな…話…聞いてくれるか？」

翔太郎の問いに了承する二人

翔太郎は自分の思いを打ち明ける。

良太郎「なるほど」

愛理「わかりました……翔太郎さんは本当にお二人のことが大好き

なんですね」

翔太郎「なっ！？いや、確かに信頼はしてるけど……」

大好きという言葉が妙に引っかかる翔太郎

愛理「本当に大好きじゃなかったらそんな風に思ったりしませんよ」

翔太郎「……」

翔太郎は考える、フィリップと亜樹子のことを、供に数々の依頼をこなしてきた相棒、恩師鳴海荘吉の愛娘

最初は胡散臭いやつだと思っていた、面倒なやつだと感じた。

しかし供に過ごす内に大切なものになった。

相棒は俺達を家族だと言ってくれた。

かけがえのない、代わりはない大切な……大切な人達

愛理「それと、樹花ちゃんが言っていました『そばにいない時はもっとそばにいてくれる』って」

翔太郎「そうっすね……なんかわかりました、コーヒーごちそうさまでした、また来ます！」

愛理「はい、ありがとうございました♪」

店をでる翔太郎を愛理が笑顔で見送る。

ミルクディッパーを後にした翔太郎は真っ直ぐ事務所に戻った。

事務所に入るとフィリップと亜樹子がいた。

太郎「あれ？なんでいるんだ？」

フィリップ「なんでじゃないよ翔太郎、今日は三人で夕食を食べようって約束したじゃないか」

亜樹子「そうだよ、せっかく私がお好み焼き焼いてあげるんだから、準備手伝ってよね？」

翔太郎「……」

フィ・亜「「翔太郎（くん）？」」

黙っている翔太郎を二人はどうしたのかと思う。

翔太郎「……いやっ、何でもねぇ！よし！亜樹子！どうせ作るんだったらスゲーの作るぞ！！」

亜樹子「う…うん…」

フィリップ「どうしんだい翔太郎？何だかいつも以上に元気だね」

翔太郎「そうか？俺はいつも通りだぜ？」

フィリップ「ならいいけど」

亜樹子「変な翔太郎くん」

翔太郎「ははは♪」

例え離れていても信じ合える仲間、途切れることの無い強い絆

大切なものを再確認出来た翔太郎であった。

第十一話グリード一家の引越し

～クスクシエ～

映司「引越し？」

メズール「ええ」

この日、クスクシエにやって来ていたのはグリードの一人メズール、映司は注文された紅茶を置きながらメズールの言葉を繰り返す。

映司「引越しって……どこに行くの？」

メズール「真木博士のところにお世話になることになったわ」

話を聞くと以前までいた廃屋で生活していたところ、ショウイチがやってきて住居侵入罪やらなんやらに引っかかるので色々とマズイということらしく鴻上達に相談した結果、真木家に住むことになっ

たらしい。

映司「へぇ、そうなんだ」

メズール「それでお願いがあるんだけど……」

映司「あぁ、引越しの手伝い？もちろん良いよ、人数も人数だから荷物が多いのかな？」

メズール「ありがとう助かるわ、でも荷物はいいのよ、元々さほどなかったから、それよりも問題は掃除なのよ……」

そう、問題は掃除なのだ、ただでさえ広い真木家、真木も自分が使うスペースしか手入れをしていないので他の場所は掃除をしなければならない。

だというのに掃除をしなければならないウヴァ、カザリはあまり働こうとしない、ガメルは一応働くのだがミスも多く中々はかどらないのだ。

映司「た…大変そうだね……分かった、次の休みでよければ手伝い

に行くよ」

メズール「ごめんなさい、じゃあお願いするわね」

その後メズールは雑談をしながら紅茶を飲み終えクスクシエを後にする。

～数日後・真木家～

映司は約束通り真木家にやって来ていた、さらには話を聞いた比奈とアンクにロストもいた。（アンクは映司が無理矢理連れて来た）

映司「お邪魔しまーす」

比奈「こんにちはー」

アンク「チッ…何で俺まで……」

ロスト「……お掃除♪」

時間は午前１０頃、真木は仕事があるのですでに家を出ている。

メズール「いらっしゃい映司、皆もありがとう」

ガメル「みんな…ありがとう」

ウヴァ・カザリ「「今日は来てくださってありがとうございます……」」

映司達を出迎えるメズール達、何故かウヴァとカザリはボロボロであった。

映司「えっと……二人はどうしたの？」

メズール「あの二人？……言うこと聞かないからちょっとね」

「フフ」と黒い笑顔でウヴァとカザリを見るメズール

二人はビクッと震えていた、映司と比奈は何があったのかと不思議に思うがアンクは大体予想がついていた。

映司・比奈「「一体何が？」」

アンク「気にするな」

映司「え？」

比奈「でも……」

アンク「気にするな」

映比「「うん……」」

アンクの妙な気迫に押されとりあえず納得する二人。

映司「じゃ…じゃあ始めよっか」

ようやく掃除を始めた映司達だった。

～広間～

映司「とりあえず此処からかな」

カザリ「そうだね、まずは床を掃こうかな」

広間担当になった映司とカザリは床を掃き始める。

カザリ「掃き終えたらモップかけなきゃね」

映司「そうだね、大分使ってないみたいだからホコリが溜まってるよ」

と、他愛のない話をしながら掃除をする二人、不意に映司がカザリに質問する。

映司「……そういえばカザリ」

カザリ「何？」

映司「カザリ達がいる時にかかってるあの布って何なの？」

映司は二階の手すりにかかっている黄色い布を見ながら言う。

カザリ「ああ、あれ？えっとね……何かね……カッコイイから……？」

映司「カッコイイから？」

カザリ「うん……」

映司「……」

カザリ「……」

妙な空気になり互いに黙っていると布がパサッと落ちてきた。

映司「おっと」

近くにいた映司が布を取る。

映司「！？」

何かに気付いた映司、そこには……

『室内用』と刺繍されていた。

映司「室内用!?」

カザリ「うん、そうだけど、どうかした?」

当たり前のように答えるカザリ。

映司「え!?室内用ってことは他にもあるの!?」

カザリ「うん、えっと……自室用、室内用、屋外用の晴天用、雨天用、外出用、あと式典用があるよ」

映司「……結婚式とか行くの?」

色々考えた結果、出てきたのが結婚式であった。

カザリ「いや、行かないけど」

映司「……まぁ、いいや、それにしても豆だね、他の皆もそのくらい持ってるの？」

カザリ「いや、そうでもないかな、アンクは二枚くらいだし、ウヴァやガメルも僕よりかは少ないね、でもメズールは僕の倍はあるかな」

映司「まぁ、メズールも女の子だしね」

カザリ「女の子？メズールが？……プッ……ないない！メズールが女の子なんて！」

映司「え、そうかな」

カザリ「そうだよ！見た目あんなんだけど中身は結構年いっ！？ギャァァァァ！？」

カザリが何か言いかけたと思うと突然水流に襲われる。

メズール「カァァザァァリィィ？掃除は終わったの？」

水流の発生源を見ると明らかに怒りを露にしたメズールがいた。

カザリ「メ…メズール！？」

メズール「掃除は終わったの？」

カザリ「ま…まだです！！」

メズール「そう、じゃあさっさと終わらせなさい」

次にメズールは映司の方を向く。

メズール「あぁ、そうそう映司」

映司「は、はい!?な…何かな?」

メズール「さっきの事だけど……気にしちゃダメよ?」

映司「はいぃ!!」

メズール「ふふふ」

そい言いメズールは広間を出て行った。

後に残った映司はメズールを始め女性を怒らせてはいけないと誓ったのであった。

その後は順調……とは行かず色々とハプニングがあった。

例えば、比奈がネズミに驚いて暴れたり、ガメルがそのネズミを捕まえる際に物を壊したり、サボっていたアンクとウヴァをメズールが水流で流したり、と色々とあったが大体掃除は終了した。

メズール「もうこんな時間、食事の用意しなくちゃ」

日も大分落ちた頃、メズールは夕食の用意をするため台所に向かう。
しかし、何故か良い匂いが漂う。

メズール「あら？良い匂い……誰が？……って、伊達……」

伊達「よう、飯出来てるぜ」

何故かそこにはおでんを作っている伊達がいた。

メズール「何故あなたが此処にいるの？」

伊達「いやさぁ、何かドクターん家を大掃除するって聞いたからよ、普段世話になってから手伝いに来たんだよ」

メズール「それでおでんを？こんな時期に？」

今は六月、大分暖かい、むしろ天気の良い日は暑い位だ。

伊達「おう、来るのが遅くなっちまってほとんど何もしてねぇから飯を…と思ってな」

メズール「まぁいいけど……でもおでんだけじゃねぇ、サラダでも作ろうかしら」

伊達「おう、頼むわ」

メズールはサラダを作り始め、伊達はおでんの様子を見始めた。

伊達「あれ?そういやメズールって料理できたのか?何かイメージないけど」

メズール「失礼ね、あの子達の食事を作ってるのは私っ、イタッ!?」

会話をしながら包丁を使ったためか指を切ってしまった。

伊達「言わんこっちゃない、見せてみろ」

伊達はメズールの手をとる。

メズール（あれ？これって……）

この時、メズールの脳裏にはあることが浮かんでいた、それは最近はまっている少女マンガのワンシーンだった。

ドジな主人公が指を切って恋人が指をくわえるというものだ。

それを思い出したメズールは顔を赤くして「はわわ／／／」となっていた。しかし、気付いた頃には伊達が処置を終えていた。

伊達「これで…よしっと」

メズール「……」

なんとまぁ完璧な処置であった。流石は伊達である。

メズール「うう……何を期待していたの私は……」

伊達「なんか言ったか？」

メズール「何でもないわ、そろそろ運びましょ」

伊達「そうだな」

そう言い、伊達は鍋を持って出ていった。

メズール「はぁ、私も変わったわね」

メズールも食事ということで賑やかになっている食堂に向かっう。

その後、ガメルに指摘されまだ顔が赤くなっているのに気づくのはもう少し後のことだった。

～同時刻・鴻上ファウンデーション～

映司達が食事をしている頃。

鴻上「ハッピー！！バースデー！！メズール思春期！！」

と、妙なことを祝ってケーキを作っている鴻上がいたとかいなかったとか。

第十二話門矢士の破壊

～光写真館～

定休日の今日、写真館には士の姿があった。

士「ふぁぁ……暇だ……」

あくびをしながらカメラの手入れをする士、手入れと言っても小一時間はしている。

この日写真館のほとんどのメンバーは出かけている。

ユウスケはバイト、海東はまたどこかでしょうもないことをしているだろう、栄次郎とキバーラは流兵衛にお茶会に誘われている。

残っているのは士と夏海の二人だった。

夏海「士君、コーヒー入れましたよ」

士「ああ」

士は短く返しカメラを脇に置く。

夏海「どうですか？大分上手に入れられるようになったと思うんですけど……」

士「ん～…じいさんに比べるとまだまだだな」

夏海「うっ……そうですか……」

士の言葉に軽く落ち込む夏海

士「……だが、俺は好きだぞ、この味」

夏海「本当ですか！？」

士「ああ」

夏海「えへへ♪」

士の言動で一喜一憂する夏海、やはり彼女も女の子である。

士「しっかし、暇だな」

夏海「そうですね、トランプでもしますか？」

士「トランプか……二人じゃなあ……」

夏海「確かにそうですね……あ、そうだ、タロット占いしてみませんか？最近はまってて」

士「占いか……じゃあ俺の運勢でも見てもらおうか……ま、どうせ最高の運勢だろうがな」

と、鼻で笑う士

夏海「はいはい、じゃあ始めますね」

夏海は占いを始める。

夏海「……士君、女難が出ました」

士「ふ～ん、女難ねぇ……女の事で不幸になるなんて、モテる男はつらいな」

夏海「……」ムッ

士の発言に少しムッとする夏海、ふとタロットを教えてもらった友人の言葉を思い出す。

夏海「あ、そうだ」

そう言い再度占う夏海

士「今度は何を占ってるんだ？」

夏海「えっと……秘密です」

彼女が何の占いをしているかというとそれは『恋愛』についてだった。

夏海「！？…も…もう一回……」

さらにもう一度占いを始める夏海

夏海「そんな……」

士「さっきからどうしたんだ夏みかん？」

明らかに今までの度を超える落ち込み方に流石に心配になる士

夏海「だ…だって…失恋って……！？」

士「失恋？」

ついこぼしてしまった夏海、はっとなって口を押さえるが既に遅く士にしっかりと聞こえてしまった。そう、占いの結果は失恋であった。

士「何だ、恋占いか」

夏海「……はい」

士「で、失恋の結果が出たと」

夏海「……はい」

ますます落ち込む夏海、士は夏海が持っていたカードをとる。

士「おい、夏みかん」

夏海「……何ですか」

士「俺は世界の破壊者だ」

夏海「？」

士「世界を破壊するというのにこんな運命程度破壊できないのか？
いや、できる」

士はそう言うとカードを破った。

夏海「士…君」

士「フッ……」

夏海「士君……ありがとう……ございます」
涙ぐむ夏海

士「気にするな……で、相手は誰なんだ？」

夏海「……へ？」

士「いやぁ、夏みかんにもそんな相手ができるとは思わなかったからな、気になってな……で、誰なんだ？」

夏海「……カ」

士「？」

夏海「士君の！バカァァァァ！！」

士「ガハッ！？」

怒りのあまり、笑いのツボではなく顔面ストレートを極める夏海

夏海「士君なんて知りません！！」

そう言い、夏海は部屋を出て行った。

後に残された士はというと……

士「い…一体……俺が何を……」

ガクッと士は倒れる。

とりあえず士に分かったのは夏海の占いが当たったということだけだった。

ライダー学園物語～登校～（前書き）

～設定～

校長―オーナー

国語―天堂ソウジ

数学―芦河ショウイチ

英語―五代雄介

理科―フィリップ

社会―天道総司

体育―ヒビキ

生徒―城戸真司

乾巧

剣崎一真

野上良太郎

紅渡

門矢士

左翔太郎
火野映司
小野寺ユウスケ
辰巳シンジ
尾上タクミ
剣立カズマ
食堂―津上翔一
その他―追々登場

ちなみにライダー学園物語に関してはアスムとワタルはほぼクビです。

ワタル・アスム「「ええ！？」」

ライダー学園物語～登校～

私立ライダー学園

ここには普通の生徒が通っていれば、普通じゃない生徒もいて、人外もいたりする。

唯一つ言えるのは、ライダー学園はとてつもなく騒がしい生徒ばかりというところ……

～予鈴三分前～

カズマ「うおぉぉぉぉ！ま～に～あ～え～！！」

高校の恒例行事――登校

行事というほどでもないがある意味重要だったりする、ほとんどの生徒が余裕を持って登校するのだが、中にはやはり遅刻ギリギリに登校する者もいるのは全国の学校共通だろう。

カズマもその一人で、遅刻ギリギリと分かっていても限界まで家に

居てしまうのだ。

カズマ「やっべ！あと一分切ってる！！」

カズマから数百メートルさきではショウイチが門を閉める用意をしている。

ショウイチ「ほら、走れ走れバカ共遅刻するぞ～」

ショウイチはのんきに声をかけている。

カズマ「くそ！人事だと思って！！」

毒づくカズマの横を自転車に乗ったシンジが通り抜ける。

シンジ「遅れるぞ～カズマ～」

カズマ「なっ！くそ！！」

体力に自信があるカズマでも流石に自転車には勝てない、シンジが閉まりかかっている校門を抜けようとしたところ……

ドン！！

シンジ「ガハッ！？」

何かがぶつかった音がしたかと思うとシンジは吹き飛ばされていた。

シンジに駆け寄るカズマ

カズマ「死ぬなシンジ！！」

シンジ「勝手に……殺すな……そんなことより時間は？」

カズマ「あ……」

キーンコーンカーンコーン

無情にも鳴り響く予鈴のチャイム

二人「「ｏｒｚ」」

崩れるカズマとシンジ

ショウイチ「おら、うなだれてねぇで立て、あとカズマ、お前は二日連続だから反省文十枚な、シンジは三枚だ」

二人「「ｏｒｚ」」

再度崩れる二人

カズマ「最悪だ……」

シンジ「そういえばさっきのは何だったんだ？」

カズマ「さっきの？……ああ、何かシンジが吹っ飛んだやつか」

ショウイチ「あれなら乾だな」

二人「「乾？……アクセルフォームか！！」」

シンジ「せこすぎるぜ乾さん！！」

ショウイチ「まあ、危険行為じゃなければ特に規制は無いしなぁ」

シンジ「ちょっ！？俺被害くらいましたよ！？」

ショウイチの発言に抗議するシンジ

ショウイチ「相手がお前だしなぁ～」

シンジ「俺の扱いひどくない！？」

ショウイチ「それはそうと……お前も遅刻だ剣崎！！」

ショウイチが上を見るのにつられ二人も見上げると……剣崎ブレイドジャックフォームが墜落していた。

剣ブレイドＪＦ「ウェェェェェイ！？」ドンッ！！

シンジ「うぉ！？」

カズマ「ブレイド！？ってことは剣崎さん！？」

変身が解け、ピクピクと動いている剣崎

どうやらブレイドＪＦで空から校門を越えようとしたところ、ショウイチおなじみの超能力で叩き落とされたらしい。

ショウイチ「ったく、大人しく反省文を書けばいいものを……剣

崎、お前は反省文三十枚だ！！」

剣崎「ウェ……ウェイ……」

こうして朝の登校時間は過ぎていった。

ライダー学園物語～ＳＨＲから授業～

～ライダー学園三年一組～

カズマやシンジも所属する三年一組、担任はソウジ、生徒十二人という明らかにおかしいクラスなのだがとりあえず置いておく。

剣・シン・カズ「「「おはよーございまーす」」」

三人がショウイチの説教から解放されて教室に着いた頃に既にソウジもいて、三人以外全員そろっていた。

ソウジ「おはよう……遅刻か…気を付けないとダメだぞ」

Ｗカズマ「「ウェーイ」」

シンジ「そもそも俺は乾さんのせいで……」

乾「……」ニヤ

シンジ「確信犯かこのやろう！！」

ソウジ「はいはい、シンジも座れ」

シンジ「……はい」

いつの間にか座っている剣崎とカズマに続いてシンジも席に座った。

ソウジ「さて、全員そろったな、とりあえず委員長」

渡「はい、起立、礼」

全員「「「おはようございまーす」」」

委員長である渡の合図で挨拶をする。

ソウジ「はい、おはよう、今日も皆元気そうだな、特に連絡は無いが……もうすぐ試験だが、皆調子はどうだ？」

ソウジの「ん？」という問いかけに反応は様々、余裕な者もいれば、普通の者、苦笑いの者、真っ青な者もいる。

それぞれ分けると

余裕組―渡、士

普通組―城戸、良太郎、シンジ、タクミ

苦笑組―剣崎、乾、映司

真っ青組―翔太郎、ユウスケ、カズマ

ソウジ「……ま、頑張れ」

ちょうどSHRの時間も終わったのでそう言い残しソウジは教室を出て行った。

ユウスケ「だぁぁぁ！やばい忘れてた！！」

カズマ「シンジ！助けて！！」

翔太郎「落ち着け俺、こんな時こそハーフボイルドを忘れちゃいけねぇ」

士「バカめ」

シンジ「すまんカズマ、俺も自分の分で手一杯だから」

フィリップ「翔太郎、テンパり過ぎて自分でハーフボイルドと言ってるよ」

仲のいい者が答える中、たまたま通りかかった理科の教師らしく白衣を着たフィリップが冷静に突っ込む。

翔太郎「フィリップ！？」

フィリップ「翔太郎、学園では先生と呼んでくれと言ったじゃないか」

フィリップを先生と呼ぶのに多少抵抗がある翔太郎は少しどもる。

翔太郎「ぐっ！……先生助けてくれ、卒業出来なきゃおやっさん（健在）に追い出されちまう！」

鳴海探偵事務所に居候中の翔太郎とフィリップ、翔太郎は荘吉の元で探偵としての修行をしている。

荘吉から最低でも高校は卒業しておくように言われていて、さもなければ追い出すと言われている（本気か冗談かは定かではない）。

フィリップ「今回ばかりは自業自得だよ」

翔太郎「そこをなんとか！」

フィリップ「ダメだよ……おっと、授業が始まる、じゃあね翔太郎」

フィリップはそう言い残し担当クラスに向かう。

その横ではユウスケが士に勉強を教えてくれるようすがり付いていた。

ユウスケ「つ～か～さ～！」

士「ええい！離せ！こんなことする暇があるなら単語の一つでも覚えろ！！」

ユウスケ「うぅ……」

キーンコーンカーンコーン

と、ここで一時限目のチャイムが鳴る。

五代「授業始めるぞー……ってどうしたの？」

入ってきた五代は明らかに沈んでいる三人を不思議に思う。

タクミ「実は……」

一番前に座っているタクミが答える。

五代「なるほど……確かにフィリップ先生や士のいう通りだね」

ユウスケ「た…確かにそうなんですけど……」

五代「うん、まず勉強しなかった三人まず悪い、士や渡だってちゃんと勉強しなければすぐに成績が悪くなる、当たり前のことだろうけど努力をしなければ何も向上しないんだ、

それなのに君たちは状況が悪くなったらすぐに他人に頼る、自分では何もしようとせずにね」

意外と辛辣な五代

三人「「「……」」」

五代の言葉に落ち込む三人

五代「まぁ、時には助け合いも必要だよ」

三人「「「結局どっち!?」」」

五代「助け合いって言ったんだよ、頼りきるのはダメ」

三人「「「……は～い」」」

「でも……」と繋げる五代

五代「俺達は教師だから、分からないことがあればちゃんと教えてあげるからね、さて、授業始めようか」

こうして授業は進んでいく。

つづく

ライダー学園物語〜テスト〜

〜テスト中〜

士（┐▽┐）〜♪

城戸（。＿。）

乾（┐—┐）

剣崎丶（´ー`）ノ

良太郎？（┐□┐；）！！

渡（＾—＾）

翔太郎（；┐▽┐）

映司（┐□┐）

ユウスケ（—＿—；

シンジ（┐＾┐）

カズマ（´Д`）

タクミ（- -）

～テスト後～

映司「終わった～」

城戸「あ～最後の問題ミスった～」

テストも無事終了し、とりあえずほっとする面々……と言っても約数名は魂が抜かれたように沈んでいた。

ユウスケ「……」

カズマ「……」

翔太郎「……」

例の三人は五代に言われてから必死に勉強したのだが、やはり不安になってしまう。

しかし、なぜかその中に良太郎の姿があった。

良太郎「……」

乾「おい、どうした？」

士「あの三人は分かるが何でお前まで」

士の言う通り、実際良太郎は頭が悪い訳ではない、むしろ良い部類に入るのだが……

良太郎「シャープペンの芯が途中で切れました……」

全員「「「……」」」

どうやらシャープペンの芯が切れて、代えの芯も用意していなかったらしく、途中から解答が出来なくなったらしい。

カズマ「えっと……」

ユウスケ「まぁ……」

翔太郎「ドンマイ……」

良太郎「はい……」

慰めにもならない三人であった。

～テスト返却～

テストは全て返却され、ようやく結果が出た。

一位―士

二位―渡

三位―城戸

四位―シンジ
五位―映司
六位―タクミ
七位―剣崎
八位―乾
九位―良太郎
十位―ユウスケ
十一位―翔太郎
十二位―カズマ

士、渡が上位なのはいつも通り、中間は入れ替わりが多く、似たようなものだったのだが上位の良太郎が不幸（と言うよりも不注意）により下位に下がったため全体的に上がった。

と言ってもユウスケ、カズマ、翔太郎の三人は変わらず下位独占である、しかし、五代の説教から行なった必死の勉強は成果が出た様で、問題になる程の酷い結果ではなかった。

カズマ「あ～よかったよかった」

ユウスケ「やっと一息つけるな」

翔太郎「これならおやっさんからもお咎めなしだろ」

それぞれ結果が出るまで気が気でなかった三人、なんとかそれなりの結果を出せたのでようやく安心出来たのだが……

五代「あ、小野寺君、カズマ君、翔太郎君ちょっといいかい？」

三人「「「はい？」」」

五代に呼ばれた三人、どうしたのかと思うと……

五代「今回のテストなんだけど……」ユウスケ「テストですか？」

五代「うん」

カズマ「俺達あれからスッゴい頑張りましたからね！」

翔太郎「おう！」

五代「それは分かってるよ、よく頑張ったね」

三人「「「はい！！」」」

五代「うん、じゃあこれからしばらくの間は補修だからね」

三人「「「え？」」」

五代の言葉に固まる三人

五代「今回はよかったけど三日坊主で終わったら困るからね」

ユウスケ「はい！？」

五代「ソウジ先生にはもう言ってあるから」

カズマ「ちょっ！？」

翔太郎「な！？」

五代「じゃあね」

三人「「「そんなぁぁぁぁぁ！！」」」

こうして無事テストは終わった。

ライダー学園物語～小ネタ集～

～頑張れたくまくん！～

ライダー学園三年二組

士達が所属する一組の隣のクラスには非常に可哀想な人がいた。

琢磨「……」

大体教室の真ん中辺りに座っている琢磨、これならごく普通の事だ、しかし、問題はその周囲である。

北崎「ねぇ、たくまくん」

琢磨「は、はい！？」

琢磨がおどおどしながら返事をしたまだ幼さが残る少年、彼の名は北崎、琢磨をいじめる事が趣味の北崎は隣の席である琢磨をほぼ毎日無茶振りをしている、そして今日も……

北崎「ヒモ無し逆バンジーってどう思う？」

琢磨「ヒモ無し……逆バンジーですか？唯のバンジーじゃなくて？」

北崎「うん」

琢磨「い、いや、逆バンジーでヒモ無しだなんて、どうしようも無いんじゃ……」

北崎「だーいじょーぶ、僕が打ち上げてあげるから♪」

琢磨「はいぃぃぃぃぃぃ！？」

なんとも理不尽な提案である、さらに逆隣の席から……

アンク「たくまくーん、アイス買ってこい」
すでに命令である。

琢磨「なんで僕が！？」

アンク「あ？お前が隣にいるからだろうが、あ、金はもちろんお前持ちだからな」

琢磨「えぇぇぇぇぇ！？」

すると後ろの席から……

浅倉威「さっきからガタガタうるせぇぞ！！」

琢磨「ヒィィ！？」

ガタッ！！っと琢磨が座っている席を蹴りあげる浅倉

浅倉「静かしてろよ？じゃねぇとてめえの顔、潰しちまうかもしん

ねぇからなぁ」

琢磨「はっ、はいぃ！！」

そして極めつけは……

ン・ダグバ・ゼバ（人間態）「……」

琢磨「な、何か？」

琢磨の前方の席に座っているダグバ、ダグバは振り返り琢磨を見つめている。

ダグバ「……ねぇ」

琢磨「？」

ダグバ「ムカデって……よく燃えるかなぁ？」

琢磨「！？」

ダグバ「ねぇ……どう思う？」

いじめられる琢磨、他の生徒からすればいつものことだったり、そして……

琢磨「もういやぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

今日も琢磨の悲鳴は響く。

～体育だよ名護さん！～

名護「さあ！始めようか！！」

士「……説明を要求する」

場所は体育館、全員体操服である、今は体育の授業だ。

名護「ああそうだな、本来体育の担当はヒビキ先生だが、先生は出張のため今日は私が代役を努める事になった！」

シンジ「他に誰かいただろ！！」

名護「では行くぞ！イクサッサァァァイズ！！」

渡「はい！！」

シンジの言葉を無視して進める名護、そして渡

士「しまった！信者が一人いた！！」

襟立「俺もいるで！！」

剣崎「コイツどこから！？」

いきなり出てきた襟立、そして……

名護「よし、ついて来なさい！！」

渡・襟「「はい！！」」

乾「やってられるか」

乾を筆頭に三人を残しそれぞれサボり始めた。

～お弁当だよショウイチさん！～

四時限目終了のチャイムも鳴り、生徒はそれぞれ机を合わせ弁当を出すなり、食堂に向かうなりしている。

その中職員室では……

ショウイチ「さてと……」

弁当を持ちそそくさとどこかに行こうとするショウイチ

ソウジ「待てショウイチ」

それを止めるソウジ

ショウイチ「……なんだ？」

ソウジ「最近付き合い悪いぞ、久しぶりに一緒に昼飯食べないか？」

ショウイチ「あ…ああ……」

歯切れの悪いショウイチ、ソウジの言葉通り以前はよく一緒に昼食を食べていたのだが、最近は別の場所で一人食べることが多かった、それはコンビニ弁当だったのが手作り弁当になってからだった。

二人は職員室にある応接用の机（と言ってもほとんど職員の休憩用）に着く。

ついでに五代も「お昼御一緒してもいいですか?」とのことで一緒に座っている。

ソウジ「ん?」

五代「あれ?ショウイチ先生食べないんですか?」

早々と弁当を開き食事を始めた五代とソウジ、中々弁当を開けないショウイチを不思議に思う。

ちなみに五代、ソウジもそれぞれ自作の弁当だ。

ショウイチ「ああ……そうだな」

何かを諦めた様なショウイチ、ゆっくりとフタを開ける、すると……

……

五代「これは……」

ソウジ「そぼろの……ハートマーク？」

ショウイチ「くっ……」

ショウイチの弁当、そこには白ご飯の上にピンクと黄色のそぼろで、でかでかと『ＬＯＶＥ』と描かれていた。

ソウジ「ああ……淘子さんか」

五代「なるほど～ラブラブですね♪」

このベタベタな弁当の犯人はショウイチの恋人、淘子であった。
以前までは淘子は弁当を作ることもなかったのだが、ある日のこと、
ショウイチが……

ショウイチ「タクミのやつが由里君に弁当をもらったみたいで、バカ共が騒いでいたよ」

淘子「ふ～ん」

バカ共とはつまり恋人いない組のことである。

ショウイチ「年甲斐もなくああいうのは羨ましいものだな」

淘子「……」

「ははは」とショウイチが笑っていると

淘子「ねぇ」

ショウイチ「どうした？」

淘子「お弁当、作ってあげようか？」

ショウイチ「うん？作ってくれるならありがたいが……いいのか？」

淘子「大丈夫、大丈夫♪」

淘子も働いているため、負担を軽くしようとショウイチは弁当を頼んでいなかったのだが、やはり恋人の弁当を食べたいという願望はショウイチにもある。

「淘子が構わないというのなら」ということで弁当を頼んだのだが、それからというものそぼろのハートマークという三十を過ぎた男にはキツイ弁当が用意されるようになった。

ソウジ「それで最近は一人で食べていたのか」

話を聞くうちに食べ終わり、お茶を飲みながら結論を言うソウジ

ショウイチ「ああ淘子もイタズラのつもりだろうが、どこからこのことが知れてバカ共に伝わるか分からないからな」

ソウジ（淘子さんも本気で作ったろうに、コイツは……）

心中でため息つくソウジ

ちなみにこの場合のバカ共は数名を除いた三年一組の生徒である。

あのメンバーのことである、ショウイチの弱みを握ったなら何かしら仕掛けてくるだろうと踏んでのことだった。

五代「ん？…あ……」

何かに気付いた様な五代

ソウジ「しかしだなショウイチ」

ショウイチ「どうかしたのか？」

ソウジ「もう手遅れみたいだぞ」

そう言ってショウイチの後ろを見るソウジ

ショウイチ「うん？……げっ！？」

そこには……

士「……」
シンジ「……」
カズマ「……」

ショウイチ「な、なななななな……」

三人「「「……」」」ニヤリッ

士、シンジ、カズマがいた、しかもシンジの手にはボイスレコーダーがある。どうやら先程の会話を録音したようだ。

士「行くぜ！シンジ！カズマ！」

カズマ「おう！」

シンジ「次の校内新聞のネタはこれだな！」

※シンジは新聞部である。

ショウイチ「待ちやがれバカ共！！」

逃げる三人をショウイチが追いかける。

五代「あはははは……」

ソウジ「ふぅ…お茶が美味いな」

後には苦笑いの五代といたってマイペースなソウジが残された。

その後、生活指導の一条薫に校内を走り回っていた四人は正座で説

教されていた。

第十三話伊達明の夢

～病院・手術室前～

手術室の前にあるベンチには映司をはじめ比奈、後藤、アンクが座っていた、映司、比奈、後藤が沈痛な表情を浮かべているのに対しアンクはいつも通りアイスを食べている。

手術室の『手術中』と書かれたランプが赤く光っている、今は手術中だ、伊達明の……

今回の手術はとても急なものだった、脳の中に残った銃弾による痛みに遂に耐えきれなくなった伊達は病院に運ばれた、この病院には優秀な医者が多い

それなのにこの国、この街で手術を受けなかったのは脳から銃弾を取り出す難しい手術が原因だ。

紛争地域に医者の養成学校を創るという欲望――【夢】を持つ伊達、元々死ぬ気も無いがもしもということもある、仲間、知り合いを人殺しにしたくないという伊達の不安から銃弾のことは一部の者を除

いて秘密にしていて闇医者に手術を依頼する予定だったが、今回のことで皆に知られ急遽名のある医師が集められ手術が行われた。

『手術中』のランプが消え扉が開く。

出てきたのは木野薫、椿秀一、そして井坂深紅郎

映司「木野さん！」

後藤「伊達さんは……」

木野に詰め寄る映司と後藤、木野は冷静に返す。

木野「落ち着きなさい映司君、後藤君、手術は無事……成功しました」

映司「よっ……」

比奈「よかった……」

後藤「……」

ほっと息をつく映司と比奈、後藤は安堵のあまり声が出ないようだ。

椿「こりゃ頑張ったかいがあったかな」

井坂「全く、私はドーパント専門の医者だというのに……」

映司達の様子を見て、笑顔になる椿、そう言う井坂も医者の端くれか、少し口元が緩んでいる。

木野「手術も成功したのでもう心配はない、目が覚めたらしばらくは大人しくしていてほしいが……」

よく言えば活動的、悪く言えばじっとしていられない伊達を懸念して言う木野

何はともあれ手術は成功した、これで一件落着というものだ……ただ一人、廊下の角の陰にいた暗い表情の藤田を残して……

～数日後・病室～

手術後、数日してすっかり元気になった伊達、しかし安静を言い渡されているのだが病院を普通に歩き回るのでよく看護師に注意を受けているのが見受けられる。

伊達の病室なのだが、個室をいいことに見舞いの品が大量に置かれていた、普通に花や果物があるのだがその中に何故か鍋があったりする、中身は具が三つだけのおでん、これはもちろんソウジだ、よくおでんのことでケンカする伊達とソウジだがおでんを愛する?者どうし意外と仲がよかったりする。

伊達「ハフハフ」

アンク「いや、ダメだろ」

先程のソウジの見舞いのおでんを食べている伊達、ガスコンロまで持ち込む始末、あのアンクが我慢しきれずツッコむほどだ。

伊達「モグ……堅いこと言うなよアンコ」

アンク「アンクだ!!」

映司「まぁまぁ」

アンク「チッ……」

後藤「でも、本当によかった」

伊達「後藤ちゃん……あ、そうそう後藤ちゃんに渡すもんが……」

伊達は棚からあるものを出す――バースドライバーだ。

後藤「伊達さん!?」

伊達「後藤ちゃん、俺、退院したらすぐに日本を出る」

後藤「っ!?……」

伊達の言葉に後藤は黙り、うつ向く。

伊達「手術の費用にと貯めた一億も浮いたし、向こうで仲間も待ってからさ」

後藤「……」

伊達「ドクターの相手頼むな」

後藤「……」

伊達「後藤ちゃん」

後藤「……」

伊達「後藤!!」

後藤「!?」

伊達「シケてんじゃねぇぞ!てめえは親鳥のあとついてくヒナ鳥か!?前に誰か居ねぇと何もできねぇのか!?男だったら……迷ってんじゃねぇ」

後藤「……はい」

伊達「声が小っせぇ！！」

後藤「はい！！」

伊達「よし！それでい……」

看護師「うるさいですよ！！」

全員「「「！？」」」

突然の乱入に全員が驚く、どうやら伊達の声が廊下まで届いていたらしく看護師が注意に来たようだ。

看護師「伊達さん！病院なんですから静かにしてください！！……って何やってるんですか！？ここは火気厳禁ですよ！！」

伊達「分かった分かったってそんな怒んなよ」

看護師「次に何かあったら面会謝絶にしますからね！！」

看護師はそう言うと病室を出て行った。

伊達「……まぁ、そうゆうこった」

後藤「何がですか！？」

思わずツッコム後藤

伊達「後は頼むってことだよ」

後藤「……はい！！」

伊達の言葉にもう一度決心するように黙り答える。その目には全く

迷いが無い。

アンク「今回俺達空気だな」

映司「たまにはいいんじゃない？」

そうぼやく映司達はすっかり蚊帳の外となっていた。

～夜～

映司達が帰った後は特に見舞い客もなく、伊達は暇な時間を過ごし、気づけば夜になっていた。

伊達「つまんねぇな……」

テレビを見ていた伊達だが今日は面白い番組がないらしく、見る前より余計に暇になっていた。

伊達「そろそろ寝るか……誰だ」

時間も時間なので寝ようかと考えていたところ、不意に扉の側に気配を感じた。

伊達が声をかけてから少し経ってから扉が開く。

伊達「……藤田？」

藤田「……ああ」

そこには伊達が紛争地域で活動していた同じ医療チームにいた藤田がいた。

伊達「どうした、こんな時間に」

藤田「……」

伊達の問いかけに黙ったままの藤田

ばつの悪い表情の藤田様子を見守る伊達

藤田「すまん！！」

突然藤田は土下座で謝罪する。

伊達「お…おいおいどうしたんだよ」

藤田の行動に戸惑う伊達

藤田「俺は……俺は……臆病者だ」

伊達「……何でだ？」

藤田の言葉が理解出来ない伊達、藤田は臆病者ではない、むしろ勇気がある奴だと伊達は思っている。

でなければ危険な紛争地域の医療支援活動に参加するはずもない。

藤田「俺はお前が危険な状態にあるのに何も出来なかった、今回も他の人達が頑張っていたのに隠れていた」

伊達「……」

藤田「俺はお前の夢を知っていた、本当は一緒にやりたかった、でも、怖くてもうあそこに戻ることもできないんだ」

伊達「藤田、それが普通だ、ドンパチやってるところに行きたいやつなんていねぇよ」

藤田「……お前が羨ましいよ伊達、俺が足踏みしている間にお前はどんどん前に進んでいく」

伊達「藤田、いい加減に……」

藤田「だから頼む！！」

藤田が己を卑下することに苛立ち始めた伊達、しかし藤田は真剣な表情で伊達を見据える。

藤田「自分勝手な頼みかもしんねぇ、他力本願かもしんねぇ……頼む、俺の夢、お前の夢を叶えてくれ！！」

伊達「藤田……分かった」

藤田「伊達……」

伊達「但し！……俺は向こうで人を守る、お前はこっちで人を守れ」

藤田「ああ！」

伊達「おう！」

そう言うと二人は握手はする、お互いの夢、友情を確かめるように……

～数ヶ月後・空港～

この日、伊達は日本を発つため空港に来ていた、見送りには多く者が希望したが大勢だと周りに迷惑がかかるため、いつものメンバーと藤田だけが見送りに来ていた。

映司「伊達さんお元気で！またどこかで会いましょう！」

伊達「ああ火野もな、さっさと親父さんらと仲直りしろよ」

映司「ははは……」

家族の話題に乾いた笑いをこぼす映司

後藤「伊達さん……」

伊達「何だその顔は？元気だせよ！」

後藤「はい！！」

アンク「ま、せいぜい死なねえようにな」

伊達「アンコは相変わらずだねぇ」

アンク「アンクだ！！」

比奈「伊達さんお元気で」

伊達「おう、比奈ちゃんもさっさと火野とよろしくやれよ」ボソッ

比奈にだけ聞こえるように呟く伊達

比奈「な！？伊達さん！！」ブン！！

照れ隠しについ伊達を殴る比奈。

伊達「ゴハッ！？……きょ……強烈……だぜ」

比奈「す…すいません！！」

伊達「さて……藤田」

藤田「ああ」

最後に藤田に向き合う。

伊達「こっちはまかせるぜ」

藤田「ああ、お前がいなくてもしっかり守ってやるさ……あと、俺の力がいるならいつでも呼べ、すぐに飛んでってやる」

伊達「おう、そんときは頼むな」

全員と言葉を交わした伊達は時計をみる。

伊達「お、そろそろ時間だな」

時間を確認した伊達は荷物を担ぐ。

伊達「じゃあな」

それだけ言うと伊達は搭乗ロビーに向かうエスカレーターに乗り徐々に姿がみえなくなった。

こうして伊達の【夢】を叶えるための【旅】が始まった。

第十四話西洋洗濯舗菊池の初夏

～西洋洗濯舗菊池～

タクミ「ただいまです」

夕方、菊池（西洋洗濯舗菊池）に帰宅したタクミ、今タクミは菊池に居候中である。

啓太郎「おかえり、タクミ君」

クリーニング作業をしていた啓太郎は顔を出してタクミを迎える。

啓太郎「ごめんタクミ君、たっくんと真理ちゃん配達に行ってくれたんだけど一つ忘れちゃったみたいなんだ、すまないけど代わりに行ってくれない？」

タクミ「はい、じゃあ行ってきますね」

啓太郎「ありがとう、行ってらっしゃい」

啓太郎の頼みに二つ返事で承諾するタクミ、ヘルメットを用意して早速出発する。

――――――――

タクミが宅配を終え、菊池に帰った頃には巧と真理も帰っていた。

真理「おかえり、タクミ君、ごめんね今日は当番じゃなかったのに」

巧「すまねえな尾上」

宅配は全員でのローテーションのため自分達のせいで迷惑をかけたことを謝罪する二人

タクミ「いやそんな……気にするほどのことじゃないですよ」

そんな二人に対してタクミは「問題ない」といった様子

巧「いや……」

真理「ホントごめんね」

巧・真理「「これも真理（巧）のせいだから……」」

タクミ「……」

啓太郎「……」

巧「……何だよ」

真理「……何よ」

巧「準備したのは真理だろ！」

真理「最後に確認したのは巧でしょ！」

巧・真理「「何だよ（よ）！」」

啓太郎「二人とも！ケンカはダメだよ！」

二人「「あぁ！？」」

啓太郎「ご…ごめんなさい」

ケンカを止めよう仲裁に入る啓太郎に睨みを効かせる巧と真理、啓太郎は二人の迫力に何故か謝ってしまう。

タクミ「啓太郎さんなんで謝ってるんですか……」

啓太郎「だって……つい……」

タクミ「……二人とも、落ち着いてください」

普段は由里の後をついていく大人しい奴だと思われているタクミだが、その実肝が据わっているため二人の迫力にも全く動じていない。

巧「……ああ」

真理「……そうね」

流石に年下に咎められては面目が無いと二人はケンカを止めた。

木場「まったく、何をやってるんだ君達は」

突然現れた木場

巧「うお？どっから湧いた木場」

木場「失礼だな虫じゃないんだから、それよりも園田さん、そんなに怒ったりしたらお腹の子に悪いよ」

啓・タ「「え゛」」

真理「やだ木場さん／／／」

木場の突然の真理の妊娠発言に固まる啓太郎とタクミに顔を赤くす

る真理

巧「木場、お前いつからそんな冗談言うようになった、真理も乗るんじゃねぇよ」

それに対し巧は冷静に返す。

木場「俺だってたまには冗談くらい言うさ」

タクミ「な、なんだ……」

啓太郎「うそか……」

巧「……まぁいい、で、今日は何の用だ？」

木場「何の用って、一緒に食事をしようって言ったじゃないか」

巧「ああ、忘れてた」

木場「忘れてたって……まったく、久しぶりに休暇が取れたから楽しみにしてるんだからね」

社長業の為か木場は中々休みが取れないので巧達と遊ぶ機会もなかった、今回久しぶりに固まった休みが取れたため、巧達と食事をすることになったのだ。

真理「じゃあご飯食べましょう」

啓太郎「そうだね」

タクミ「今日は何ですか？」

真理「今日は流し素麺だよ、巧と啓太郎が準備してくれてるから」

巧「よし！さっさと行こうぜ！！」

真理「はいはい」

流し素麺ということで異様にテンションが上がった巧であった。

そんなこんなでワイワイと騒ぎながら夜は更けていった。

～オマケ？～

巧「～～～♪」ズルッ

猫舌の巧、熱いものは食べられないのでひんやりとした素麺を食べてご機嫌である。

真理「あ、巧、じっとして」

巧「？」

そう言うと真理は巧の顔についていた薬味のネギをつまんで自分の口に含む。

真理「ほら、もっと落ち着いて食べなさい」

巧「お…おう」

真理の行為に少し顔を赤くする巧

木場（ネギって……雰囲気無いな）

啓太郎（何だか分からないけど羨ましい！）

タクミ（あ、由里ちゃんも誘えばよかったな……）

と、男三人はそれぞれ思うところがあるのであった。ちなみにタクミは素であり、下心はない。

第十五話ダグバのよりどころ

～ポレポレ～

気温３０度を超える真夏日の今日、士とユウスケは買い出しに出ていたが暑さに負け、ポレポレに避難していた。

ユウスケ「なあ……」

士「どうした？」

ユウスケ「あれ……なんだ？」

士「あれ？」

士達の視線の先には……

ダグバ「雄介、どう？」

五代「…うん、美味い！」

ダグバ「よかった♪」

と、仲良くキッチンでカレーを作っている五代とダグバがいた。

ユウスケ「え？あの二人ってあんな仲良かったけ？」

士「ああ、なんかいつの間にかな……」

ユウスケの言葉通り、五代とダグバの関係は有るようで無いようなもので、特に仲が良いわけでも悪いわけでもないというのが周囲のイメージであった。

しかし、ある出来事により二人の関係は良好なものになったのだ。

ユウスケ「ある出来事？」

士「まぁ、そんな大したことじゃ無いんだけどな……なんでもダグバが五代のカレーを気に入ったらしい」

ユウスケ「それだけ？」

士「ああ」

ユウスケ「まぁ仲が良いにこしたことはないか」

士「それだけならいいんだがな……」

士の意味深な言葉に「まだ何かあるのか？」とユウスケが聞き返そうとしたところ

女性「こんにちは～♪」

女性2「お邪魔しま～す♪」

女性客二人がポレポレにやって来た。

五代「いらっしゃいませ♪」

いつもの笑顔で迎える五代

女性「アイスコーヒー二つください♪」

五代「はい、ありがとうございます」

慣れた手付きでコーヒーを入れる五代、それを見詰める女性客、その光景から分かる通りこの二人は五代目当てでやって来ている。

甘いマスクに爽やかな笑顔、そして人の良さで惹かれる女性も多い。

ユウスケ「さすが五代さん、モテてるな～……羨ましい」

士「あれさえ無ければな」

そう言い目配せする士、そこには……

五代・女性達「「「あはは♪」」」

ダグバ「……」

楽しそうに世間話をする五代達を光の無い目で睨んでいるダグバ

ユウスケ「なにあれ怖いんだけど！？」

士「あれだあれ、大好きな兄貴を取られた気分なんだろ、ああ見えて中身はガキっぽいからな」

そこまで言って頼んでいたアイスコーヒーを飲もうとしたが……

士「熱ぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！！？」

ユウスケ「ど…どうした士！？」

五代・女性達「「「！？」」」

いきなり大声を出す士に全員が目を向ける。

士「こ…コーヒーが……」

ユウスケ「コーヒー？……？うわ！？沸騰してる！！」

士「ダグバめ……あの一瞬でやったのか……」

ユウスケ「超能力すげぇ……」

どうやら士達の会話を聞いていたらしいダグバは士がコーヒーに口に付けた瞬間に沸騰させたらしい。

女性「え…え…？」

女性2「な…なに？」

状況を理解出来ていない女性達は突然のことに怯えていた。

ダグバ「ねぇ君達」

女性達「「！？」」

ダグバ「あんまり雄介に色目使わないでね……うっかり燃やしちゃいそうだから」

女性「ひっ……！？」

女性2「失礼します！！」

軽く殺気を混ぜて脅すダグバ、女性達はお金を置いて逃げる様に店を出て行った。

五代「あっ！お客さん！……こら！ダメじゃないか！！」

ダグバ「むぅ……」

叱りつける五代、しかしダグバは気に入らないのかむくれていた。

五代「ダグバ？」

ダグバ「……ごめんなさい」

静かに諭す五代にしぶしぶだが謝るダグバ

五代「ダグバ……人に意地悪しちゃいけないよ」

ダグバ「はぁい……」

五代「ほら、士にも」

ダグバ「うん……ごめんなさい」

士「ふっ、まぁいいさ」

ユウスケ「態度でか」

士「さて…そろそろいい時間だな」

そう言うと氷を入れてなんとか冷ましたコーヒーを飲みきる。

士「よし、帰るぞユウスケ」

ユウスケ「わかった……じゃあ失礼します五代さん」

五代「うん、またきてね」

士「ああ」

士達は店を出て行った。

五代「さてと……今の内に明日の仕込みしよっと」

ダグバ「僕も手伝うよ」

五代「うん、じゃあよろしく」

そうして仕込みを始めた五代とダグバ、作業をする姿は仲の良い兄弟そのものであった。

小ネタ・宇宙とライダー

加賀美「宇宙か……」

天道「どうした？間抜けな顔して」

加賀美「お前な……まあいい、今度の仮面ライダーのテーマって宇宙だろ」

天道「そうだな」

加賀美「俺達ってさ、行こうと思えば行けるんだよなぁ、宇宙」（劇場版）

天道「ハイパーゼクターか」

加賀美「でさ、思ったんだけど、他のライダーも宇宙行けんのかな？」

天道「ふむ、おもしろそうだな……呼んでみるか」

加賀美「へ？」

天道「呼んでみた」

ライダー一同「「「呼ばれた」」」

加賀美「いきなりだなおい！！」

天道「では見ていくか」

※ここからは自分の偏見、イメージです。

天道「まずはクウガからだな」

加賀美「ちなみにクウガは作者が最も敬愛するライダーでランキングでいえば殿堂入りだそうだ」

天道「その情報いるのか？」

加賀美「どうしても言いたいらしい」

天道「まあいい、クウガはそうだな……無理だな」

クウガ「バッサリ！？」

天道「あくまでクウガは身体変化だからな、宇宙空間で活動できるとは思えん、アギトも同じ理由なので割愛する」

アギト「ひど！？」

天道「次に龍騎だが……多分無理だな」

龍騎「多分て……」

天道「宇宙という空間において龍騎はとても微妙だ、ドラグレッタ

ーを呼べばあるいは……」

加賀美「はいつぎー」

天道「ファイズか、こいつは行けるだろう」

加賀美「確かに、特にブラスターフォームなら……ちなみにファイズは作者がクウガの次に好きなライダーだ」

クア龍「「「いーなー」」」

ファイズ「こっちを見るな！」

天道「似た理由でブレイドも行けそうだな」

ブレイド「なんかテキトー」

天道「響鬼だが……これもクウガと同じ理由で無理だ」

響鬼「んーもっと鍛えれば……」

加賀美「鍛えても無理だと思います」

天道「カブトは既に行ってるから次だな」

加賀美「電王は……行ける……か？」

天道「最悪デンライナー……」

加賀美「主旨が変わってるぞ」

天道「まあ行けるだろう」

電王「おい！さっきから特に思い入れが無いやつ適当すぎるぞ！！」

天道「はは、何を言っている」虚ろな目

加賀美「おい天道、お～い？大丈夫か？」

天道「……は！？俺は……いや大丈夫だ、次」

加賀美「お…おう、次はキバか……」

天道「こいつも微妙だな」

加賀美「バッシャーフォーム……飛翔態……行けそうな気もするけど」

天道「行けないに一票」

加賀美「行けるに一票」

天加「「……」」

キバ（ドキドキ）

天加「「保留」」

キバ「ええ？！？」

加賀美「次、ディケイド」

天道「勝手にカブトになっていろ、次」

ディケイド「おい！？」

加賀美「ダブルは……」

天道「特に問題も見当たらんが」

加賀美「じゃあ行けるで？」

天道「ああ」

ダブル「……うん？」

加賀美「オーズ……」

天道「行けそうで行けない、行けなさそうで行ける」

オーズ「へ？」

加賀美「ええと」

天道「行けるでいいだろ」

オーズ「なんか腑に落ちない……」

天道「こうやって見ると科学系が多いな」

加賀美「そんなもんか」

電王「お前等な！」

天道「なんだ？」

電王「最後の方適当過ぎだろせめて答え出してやれよ！可哀想だろほら！！」

キバ「どうせぼくなんて……」体育座り

天道「男ならその程度で落ち込むな」

電王「ぐっ…確かに……」

天道「ふむ、では終わりにするか」

加賀美「そうだな、んじゃお疲れー」

全員「「「お疲れー」」」

天道「しかしフォーゼか……どうなることやら」

加賀美「期待はしているってよ」

天道「作者が？」

加賀美「ああ、とりあえず実際に見るまでは答えは出さないって」

天道「そうか、まあ結果がどうあれ仮面ライダーという英雄〈ヒーロー〉の存在に揺るぎはないのは確かだ」

加賀美「だな」

～終わり～

第十六話八代淘子の不安

とある教会、そこには大勢の人が集まっていた。

全員スーツやドレスを着ている。

ユウスケ「しっかし、スッゴい集まったなぁ」

集まった人々を見渡し呟くユウスケ

五代「みんなお祭り事が好きだからね」

と五代

二人が話しているとそこに士がやって来た。

士「ユウスケ、ここに居たか」

ユウスケ「お、士」

士「いつかは…と思っていたがやっとだな」

五代「あれ？士なんだか大人しいね」

士「俺だって場所はわきまえるさ」

いつも悪のりばかりする士、そんな士が大人しいのを五代が不思議がる。

それに「なんでもない」といったように返す士

ユウスケ「そりゃそうだ、今日はなんたって、ショウイチさんの結婚式だからな」

結婚式――男と女が夫婦の契りを交わす厳粛な儀式

そう……今日はショウイチと淘子の結婚式が行われるのだ。

教会では新郎新婦の登場を今か今かと待ちわびていた。

シンジ「……遅いな、ショウイチさんに淘子さん」

撮影係のシンジがカメラの調整をして待っていたが中々来ない主役に痺れを切らしていた。

しかしそれはシンジだけでなく……

名護「遅い！！」

神父服に身を包んだ名護が声を荒げていた。

翔太郎「なんであんたが神父なんだよ」

静かにツッコむ翔太郎

夏海「確かに遅いですねぇ」

ソウジ「……仕方ない、少し様子を見てくる」

代表してソウジが様子を見に行くことになり、それを見送る。

～控室～

ソウジが控室に行くと何故か落ち込んでいるショウイチがいた。

ソウジ「おい、ショウイチ」

ショウイチ「……お前か」

ソウジ「何があった？こんなめでたい日に」

ショウイチ「……実は……淘子が部屋から出てこないんだ」

ソウジ「淘子さんが？」

ショウイチ「ああ……」

ショウイチの話しによると着付けも終え、そろそろ時間だと思い、教会に行こうとしたら淘子に付き添っていた小沢がやって来た。

小沢「ショウイチ君！」

ショウイチ「小沢さん？どうかしたのか？」

小沢「大変よ！淘子が！」

ショウイチ「！？」

淘子の名前を聞いた途端顔色を変え、部屋を飛び出したショウイチ

ショウイチ「おい！淘ゴガッ！？」

淘子の控室に入った瞬間、飛んできたカバンがショウイチの顔にぶつかった。

ショウイチ「～～～！？……おい！何するダバッ！？」

痛みに耐え、向き直ろうとするが淘子の顔を見る前にどつかれ、追い出されてしまった。

ショウイチ「淘子！！」

淘子「来ないで！！」

ショウイチ「っ！？」

再び部屋に入ろうとするが鍵をかけたらしく扉は開かない。

しばらく声をかけたが反応も無く、小沢に勧められ一旦控室に戻って来たのだ。

今は部屋に入れた小沢が淘子を説得している。

話しを聞いたソウジはしばらく考え、一つの答えを出す。

ソウジ「それは……マリッジブルーだな」

ショウイチ「マリッジ……ブルー……？」

そういう単語には疎いのかショウイチは聞き返す。

ソウジ「ああ、マリッジブルーというのは結婚直前になった時、何かしらのことが不安になり、結婚を躊躇してしまうことだ」

ショウイチ「そんな……」

ソウジ「そんなに気にするな、別にお前との結婚が嫌になった訳じゃないんだ……不安なんだ、淘子さんは」

ショウイチ「……ああ」

ソウジ「……よし、もう一度様子を見に行こう」

ショウイチ「ああ！」

自分が落ち込んでいては仕方がないと考え、気持ちを切り替えることにしたショウイチはもう一度淘子の控室に向かう。

ソウジ「いきなり入るのもあれだから、とりあえず様子だけみてみよう」

ショウイチ「ああ」

士「そうだな」

ソウジ「」

ショウイチ「」

士「どうした？」

ショウイチ「お前、いつの間に！……」

ソウジ「ショウイチ、あまり大きな声を出すな」

ショウイチ「お…おお」

ソウジ「士もどうした？」

士「いや、なかなか来ないからさすがにな……と思っていたが何だかおもしろそうな事になってるな」

やはり悪のりしかしない士であった。

ソウジ「士……」

ソウジも士の行動は目に余ると静かに諭す。

士「まてまて、これでも心配はしているんだぞ」

ショウイチ「……まぁいい、それよりも問題は淘子だ」

そう言うとショウイチはドアノブに手をかける。

幸い鍵はかかってなく、扉を少し開け中を除く。

そこで見えたものは……

ショウイチ（って、Ｇ４ォォォォ！！？）

機械的な黒のボディに青い目、さらに肩にはギガントを構えたＧ４がいた。

ショウイチ（何でＧ４がいるんだ！？）

士（？うお！？）

ソウジ（おお…本当だ）

ショウイチの下から除きこんだ士とソウジもＧ４を見て驚く。

するとＧ４はショウイチ達に気付いたのかこちらを見て一瞬固まった。

三人が「ばれた!?」と身構えるが、Ｇ４は小沢に何か話しかけ、こちらに近づいてきた。

ショウイチ（やばい!?）

士（逃げろ!!）

ソウジ（ああ……っ!?）

Ｇ４が近づいて来たのでショウイチ達は逃げようとするが大人三人が小さく固まっていたのでもたつき、転んでしまった。

小沢「どうかした?」

Ｇ４「い…いえ!何でもありません」

転んだ際に音が出たので小沢が不振がるがＧ４はそれを誤魔化した。

ショウイチはその声に聞き覚えがあった。

ショウイチ（この声は……！？）

出てきたＧ４は誰も見ていないのを確認してヘルメットを外した。

氷川「ど…どうも、芦河さん」

ショウイチ「氷川……お前だったか」

氷川はどことなくばつが悪そうだった。

その後ソウジが「ここだと見つかるかもしれない」と言うので四人はショウイチの控室に移動した。

ショウイチ「しかし、なんでまたお前が？」

氷川「えっと…淘子さんに牽制に、と呼ばれまして」

士「ショウイチに近づかせないためにか？」

氷川「はい……」

ソウジ「何故Ｇ４を？大丈夫なのか？」

氷川「どうせなら威圧感があるのを、と自衛隊から無理矢理……あと装着に関しては小沢さんが調整して、そんなに長くは無理ですが大丈夫です」

氷川に質問していく内にショウイチはまた落ち込んでしまった。

ショウイチ「Ｇ４を持ち出すとは……そんなに嫌なのか？」

ソウジ「ショウイチ……仕方がない、ちょっと行ってくる」

ショウイチの落ち込む姿が居たたまれないのかソウジは淘子と話し合うために控室に向かう。

ソウジ「淘子さん、俺だ、ソウジだ、話しがしたい、入ってもいいか？」

しばらくしてから反応がきた。

淘子『……どうぞ』

了解を得たのでソウジは部屋に入る。

ソウジ「淘子さん……」

淘子「ソウジさん……ご迷惑おかけします」

ソウジ「いや、気にしなくてもいい、座らせてもらうよ」

淘子は静かに頷く。

小沢はソウジが来たときに退室したのでこの部屋にはソウジと淘子の二人きりだ。

ソウジ「ショウイチは……」

淘子「!?」ビクッ

ショウイチの名前に過剰に反応する淘子、だがソウジは構わず話しを続ける。

ソウジ「あいつはいい奴だ」

淘子「……はい」

ソウジ「たまに馬鹿したり、短気な所もあるが」

淘子「……はい」

ソウジ「正直言えば悪い所ももっとある」

淘子「……はい」

ソウジ「でも一つだけ……一つだけ確実言えることがある」

淘子「……何ですか？」

ソウジ「あいつは……ショウイチは絶対に君を裏切ったりしない」

淘子「……っ！？」

淘子には拭いきれない不安があった。

以前、ショウイチは不完全な『アギトの力』に目覚めた際、エクシードギルスに変身してしまった。

ショウイチはその姿が淘子に見られることを恐れ、淘子の前から姿を消してしまった。

その後淘子は必死にショウイチを探すが一向に見つからなかった。

淘子はもう二度と会えないのかと絶望さえもした。

当時から親交のあったソウジは憎んだ。

大切な人を泣かせてしまう男を……

それからソウジがショウイチを見つけ、出会い頭に顔面にストレートを決めたのは二人の苦い思い出だ。

それからはソウジはショウイチと拳を交えながらも説得し淘子のもとに連れ戻した。

ショウイチは淘子と再会した際、ビンタをくらうが、それも苦い思い出でである。

そして今回の結婚にあたり、何が原因かショウイチが自分の前から消えたことを思い出しマリッジブルーになったようだ。

淘子「私…ショウイチを信じて無かった」

ソウジ「ああ……」

淘子「また……また私の前から消えちゃうかもって」

ソウジ「大丈夫、そんなことはない」

淘子「私…ショウイチを傷つけて…我が侭言って！」

ソウジ「あいつはそんな柔なやつじゃ無い」

涙を流す淘子をソウジは抱きしめ、頭を撫でながら優しく、そして力強く、自信にあふれた声で言う。

ソウジ「あいつは……絶対に君を裏切らない」

淘子「はい！！」

淘子もソウジの言葉に吹っ切れたように力強く返す。

その時突然扉が開く。

ショウイチ「淘子！俺は！！……って、何やってんだお前等」

何かを言いながら入って来たショウイチ、しかし言い終わる前に抱き合っているソウジと淘子を見てドスの効いた声に変わる。

ソウジ「待てショウイチ、お前は勘違いしている」

ショウイチ「勘違いだと?てめぇ…ふざけ「ショウイチ!結婚するわよ!!」んな……って、え?」

先程までマリッジブルーだと思っていた淘子が割り込んできたに目を白黒させるショウイチ、淘子は強引に続ける。

淘子「ほらぐずぐずしない!ただでさえ遅れてんだから!!」

ショウイチ「いや、遅れてるのはお前が……って、それよりお前、ソウジと……」

淘子「口答えしない!行くわよ!!」

ショウイチ「お…おう」

淘子の迫力におされ、なにも出来ずにショウイチは引きずられて行く。

そんな二人の後ろ姿を見つめながらソウジは小さく呟く。

ソウジ「結婚……おめでとう」

第十七話海とスクープと

ユウスケ「夏だ！」

シンジ「海だ！」

カズマ「水着だ！」

三人「「「イヤッホー！！」」」

それぞれ浮き輪や浮き輪マットを持って海に走っていく。

と、そこに……

『スチーム！』

アクセル「ハァァ！！」

三人「「「ギャァァァ！？」」」

突如現れたアクセルにより加減された蒸気を浴びせられる三人、加減されているとはいえ、蒸気を浴びせられてはたまらない。

この日、ユウスケ達は夏を満喫しようと海に来ていた。

シンジ「熱づづづづ!?」

カズマ「何すんだ照井!?」

ユウスケ「って言うよりなんでいんの!?」

せっかく海に来たのにさらに暑くなったためお怒りである。

照井「警備だ、それよりもお前達、看板は見たのか?」

照井は変身を解き（ジャケット半袖バージョン）三人に向き直る。

ユウスケ「看板?」

照井「やはり見ていないか……仕方ない、説明してやる、最近、近海で謎の大型生命体が確認され、何が起こるか分からないので遊泳

禁止だ」

ユウスケ「大型生命体？」

照井「ああ、そのせいで警備に回されたんだ」

シンジ「謎の大型生命体ってマジなのか？」

照井「いや、目撃者がいるのはいるんだが、皆大きな影を見たくらいでしっかりと見た者はいない」

シンジ「大型生命体……目撃者多数……未確認……よし！ユウスケ、カズマ！その大型生命体見つけるぞ！！」

ユウカズ「「えぇぇ」」

シンジ「ほら！行くぞ！」

記者魂もといカメラマン魂が疼くのか、えらい乗り気なシンジ

面倒くさそうなユウスケとカズマを引っ張って行く。

照井「おい、怪我するなよ」

シンジ「なんだ?心配してくれんのか?」

照井「始末書書くの面倒だからな」

カズマ「おい警察!?」

――――――――――――

カズマ「しかし、どうする?」

シンジ「水中だからな……よし、ユウスケ、青になれ」

ユウスケ「別に青のクウガは水中特化じゃないからな!?」

照井と別れた後、謎の大型生命体を見つけるために作戦会議をするが中々進まないでいた。

シンジ「とりあえずカズマはジャックフォームで、ユウスケはゴウ

ラムを呼んでくれ」

ユウスケ「ごめん、ゴウラムは呼べない、って言うより呼んでも来てくれない」

カズマ「なんで？」

ユウスケ「この前、体洗うの忘れたら、ゴウラムが怒っちゃって……」

カズマ「なにやってんだよユウスケ……」

シンジ「仕方ない、俺とユウスケはボートで行くぞ」

ユウスケ「おう」

カズマ「んじゃ、俺は先に行ってるから」

シンジ「ああ」

カズマ「変身！」

ブレイドに変身したカズマはそのままジャックフォームになり、海に向かった。

シンジ「俺達も行くか」

ユウスケ「おう」

――――――――――――

映司「あれ？ユウスケにシンジ？」

ユウスケ「映司？何してんだ？」

ユウスケとシンジは貸しボートを置いてある海の家にやって来たのだが、そこで焼きそばを焼いている映司がいた。
よく見ると比奈や後藤、アンクをはじめにグリード一行もいる。

映司「俺はバイト、ここ知世子さんの知り合いの店なんだけど元々

のバイトの人が急に来れなくなって、代わりに来たんだ」

ユウスケ「そうなのか、俺達は…あとカズマもいるんだけど普通に遊びに来たけど、何か謎の大型生命体がいるって聞いたらシンジが見つけるって言い出してさ」

映司「大型生命体か、うちにも照井さんが来たから聞いてるよ、おかげで見物人で繁盛してる」

映司の言葉通り、海の家はほぼ満員である。
理由には大型生命体の見物と言うのもあるが、映司や後藤、比奈という客寄せもあり、さらには何事にも真面目な映司や料理が上手い比奈、妥協を許さない後藤が料理を作るため、そこらへんの海の海よりもレベルの高い料理が評判になっている。

シンジ「ああ…なんか腹減ってきた」

ユウスケ「確かに美味そうだな」

ユウスケ「どうする？」

映司「もう少しで出来るけど、食べてく？」

シンジ「どうせだから食べようぜ、映司、二つくｒ……」

カズマ「なにやってんのお前等!?」

ユウスケ「あ、カズマ」

シンジ「どうした?」

カズマ「どうした?じゃねぇよ!お前が見つけるって言うから探してやってんのに、気づいたら焼きそば食おうとしてんじゃねえか!!」

シンジ「いいじゃん、美味そうなんだから」

カズマ「知るか!!」

映司「カズマは食べないの?」

カズマ「食う!!」

結局焼きそばを食べたいだけであった。

ユウスケ「じゃあ、焼きそば三つ」

映司「ありがとうございます♪」

こうして焼きそばを食べたり、談笑したり、まったりしたりするうちに謎の大型生命体のことはすっかり忘れてしまい海の家を出た後は普通に遊んだりして、気づけば空が赤みかかっていた。

シンジ「……あ」

カズマ「どうしたシンジ？」

そろそろ帰ろうと支度をしている時にシンジが何かを思い出した様に声を上げる。

シンジ「いや、忘れてたなぁって」

ユウスケ「何が？」

シンジ「謎の大型生命体……」

ユウカズ「「あ…」」

シンジ「どうする？」

ユウスケ「どうするって……」

カズマ「もういいだろ、疲れたから帰ろうぜ」

シンジ「でもなぁ……」

シンジが渋っていると……

メズール「ふぅ……」

ガメル「楽しかったぁ」

海からメズールとガメルが上がって来た。

ユウスケ「メズールにガメル」

メズール「あら？帰るの？」

ユウスケ「ああ、もう日が落ちるからな」

カズマ「二人は泳いでたのか？」

メズール「ええ、ガメルは泳げないから力を貸してあげたの」

シンジ「……まさか……もしかしてさ、その時融合してたりした？」

メズール「ええ」

三人「「「……」」」

メズール「どうかしたの？」

ガメル「？」

ユウスケ「まさか……」

カズマ「そんなぁ……」

シンジ「一応聞くけどさ、噂の謎の大型生命体って……」

メズール「ああ、あれ？それは私とガメルね」

二人「「「やっぱり！？」」」

ユウスケ「なんで！？」

メズール「なんで、と言われても」

シンジ「噂を知っててやっていたのか？」

メズール「ええ、最初はガメルが泳ぎたいって言うからやってたんだけど、そのうち噂になって、そうしたら見物人が増えて映司達のバイトの売上も上がったからついでにね」

カズマ「なんだよそりゃ……」

ユウスケ「なぁ」

シンジ「どうした？」

ユウスケ「これはスクープになるのか？」

シンジ「無理だろ」

ユウスケ「だよなぁ……」

シンジ「……」

カズマ「……」

ユウスケ「……」

三人「「「帰るか……」」」

メズール「そう、じゃあね」

ガメル「バイバイ」

ユウスケ「バイバイ」

シンジ「またな」

カズマ「んじゃ」

こうして三人は大人しく帰って行った。
それからも、この海には謎の大型生命体を見つけるために多くの見物人で賑わい、照井は無駄に警備に回されたと言う。

ライダー学園物語～台風～

士「クソっ」

ユウスケ「あ～びしょびしょだ……」

朝、ライダー学園に登校した士とユウスケ、大雨強風の中歩いた為、びしょ濡れである。

ショウイチ「おう、来たか馬鹿共」

ユウスケ「いきなり！？」

士「まだ何もしてないぞ！？」

教室に向かって歩いていると、出会い頭にショウイチにいきなり馬鹿と呼ばれた。

ショウイチ「いや、お前等だけじゃない、今日学園にいるやつ全員

馬鹿だ」

士ユウ「「？」」

言葉の意味が分からない二人は首を傾げる。

ショウイチ「今日は学園休みだぞ」

士ユウ「「は……？」」

ショウイチ「今日は休みだ」

二人「「はぁぁぁ！？」」

ショウイチ「いやほら、キンタロスが飛ぶ程の風だぞ、むしろどうやって来たお前等」

遠くで「泣けるでぇぇぇぇ！！」と小さく聞こえてくる。

士「うお？」

ユウスケ「気合い？」

ショウイチ「……まぁいい、とりあえず教室に行け、ソウジと他の奴らもいるから」

士「休みだと言うなら帰るぞ？」

ショウイチ「一遍学園に来たらな、警報が解けるまで生徒は帰らしちゃいけねぇんだよ」

ユウスケ「えぇぇ」

士「面倒くさいな」

ショウイチ「おら、ぐだぐだ言ってねぇで、とっとと行け」

「しっしっ」と催促されるので大人しく教室に行くことにした。

士ユウ「「おはようございまーす」」

ソウジ「おはよう」

教室に着いた二人をソウジが迎える。
教室を見回たすとほぼ全員が来ていた。

ユウスケ（あぁ……やっぱ俺ら馬鹿か……）

などどユウスケが思っていると勢いよく扉が開かれた。

シンジ「セェェフ！！」

カズマ「間に合ったぁぁ！！」

やって来たのは遅刻常習犯のシンジとカズマであった。

ソウジ「……おはよう…二人共」

シンカズ「「おはようございます！！」」

全員（（（うん、やっぱ馬鹿だ俺達））））

この時全員の思いが一致した。

シンジ「あれ？どうしたんだ皆」

妙な空気を感じたのかシンジは不思議がる。

ユウスケ「シンジ、あのな……」

ユウスケが二人に説明する。
そして説明された二人は……

カズマ「そんなぁ……」

シンジ「この天気の中必死に走ったのに……」

と、項垂れていた。

ソウジ「しかし、おかしいな」

翔太郎「どうかしたんですか？」

ソウジ「いや、連絡網を回したはずなんだが……」

映司「連絡網？」

ソウジ「ああ、最初に渡に連絡して、番号順に回す予定だ」

剣崎「俺のとこには来てないですよ」

城戸「うちも」

と、次々に「回っていない」と言う。

ソウジ「おかしいな……来ていないのは乾に渡に尾上……この順番で言うと次は……ユウスケ……」

ソウジがユウスケの名を口にした瞬間全員がユウスケを見る。

全員に見つめられたユウスケはダラダラと汗をかいていた。

士「どうした?凄い汗だぞ」

ユウスケ「あ…あ…暑いからな……」

翔太郎「ほら、使えよ……雨で濡れたのを拭いたタオルを」

ユウスケ「じ…自分のがあるから……」

カズマ「んじゃ、扇いでやるよ」

ユウスケ「だだだ大丈夫だ……」

ジリジリと詰め寄られ、さらに汗が流れる。

「「「お前かぁぁぁぁぁぁ!!」」」

ユウスケ「ごめんなさぁぁぁぁい！！」

全員に袋叩きにユウスケであった。

ユウスケ「……」

ピクピクと動いているユウスケは無視して全員はこれからどうするか話していた。

士「やばいな……風がさっきより強くなってるぞ」

剣崎「帰れんのかこれ？」

ソウジは職員会議のため職員室に戻ったため教室には士達だけになった。

外の様子を見ていると風がさらに強くなり……

シンジ「おいおい……カードが飛んでるよ」

士「あれは……海東のだな」

シンジ「じゃいいか」

翔太郎「扱い酷いな」

城戸「あの赤いのは何だ？」

映司「赤いの？……って、アンクゥゥゥゥゥ！？」

カズマ「うお？あぶないな、セルメダルが飛んでる」

と、色々な物が飛ばされていた。

暫くするとソウジが帰って来た。

良太郎「あ…先生」

ソウジ「皆、いい知らせだ、校長が特別にデンライナーを動かしてくれるそうだ」

「「「よっしゃぁぁぁぁ！！」」」

ソウジの報告に全員が歓喜した。

ソウジ「じゃあ、皆準備したら玄関に集合だ」

「「「はーい」」」

指示に従い、帰る支度をし、玄関に集合した全員は校長運転によるデンライナーで無事帰宅できたのであった。

唯一人を除いて……

ユウスケ「うーん……ってあれ？」

目を覚ましたユウスケ、しかし、教室には誰もいない。

ふと黒板に何か書いてあるのに気づく。

ユウスケ「えーと…『俺達はデンライナーで帰るから、お前は頑張って自力で帰れ』ってなにぃぃぃぃ！？」

メッセージを見たユウスケは窓の外を見る。
外の様子は朝登校したときよりも遥かに酷くなっていた。

ユウスケ「どうやって帰るんだこれぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

と言う、ユウスケの叫びは風に掻き消され、誰にも聞こえなかったとか。

第十八話バイクと三バカと（前書き）

なんとなく思いついたネタ

オチも無ければヤマも無い……いやホントに

浅倉「お前…土を食ったことがあるか？」

天道「ふっ…知っているか？土は…食材になるんだぞ」

津上「土は然るべき調理をすれば食べれるんだよ☆」

第十八話バイクと三バカと

城戸「～♪」

花鶏にて城戸バイト中

剣崎「なんか機嫌いいな、城戸」

渡「そうですね…何かあったんですか？」

たまたま来ていた剣崎と渡が妙に機嫌のいい城戸に尋ねる。

城戸「うん？ああ…実はアメリカの友達にさ、普段から乗れる専用バイクが無いって言ったら、俺にバイクくれるって言ってくれたんだ！」

剣崎「へぇぇ」

渡「そうなんですか」

城戸「おう！それで昨日バイクが届いたんだ！」

この時二人は思った（（バイク貰うって、それでいいのか？））しかし口には出さない、無駄な問題は起こしたくないから。

城戸「早く走りたいな♪」
そんな二人の間に妙な空気が流れている頃花鶏の外では――――

ユウスケ「……」

シンジ「……」

カズマ「……」

表情がまるで『ムンクの叫び』の様になっている三人と

倒れて側面がへこんでいるドラゴンサイクルがあった。

カズマ「どうすんだこれ！つか誰のバイクだ！？」

ユウスケ「こんなところでボールけるカズマが悪いんだろ！！」

シンジ「まずいよ、これ城戸さんのだ……」

暑い日差しもものともせず元気な三人、公園でサッカーをした帰り、
調子にのったカズマはネットに入れていたボールを蹴った際に手が
滑り、たまたま止められていたドラゴンサイクルに当たってしまっ
たのだ。

ユウスケ「城戸さんの？」

シンジ「ああ…城戸さんアメリカの友達から貰うってすっごい喜んでた……しかも確か、昨日届いたばかりのはず……」

カズマ「やばい…あの人怒らせたらドラグレッダーが飛んで来るぞ」

顔が青ざめる三人、どうにかするためドラゴンサイクルを引っ張って行く。三人が最初に向かったのは芦原涼の行きつけ『都洋自動車』

しかし、掛けられている札には『定休日』と書かれていた。

カズマ「Ｎｏｏｏｏｏｏ！！」

ユウスケ「つっ、次！！」

次に向かったのは警視庁『ＳＡＵＬ』

ショウイチ「バイクの修理？」

どうやら休憩中だったらしいショウイチ、お茶を飲んでくつろいでいた。

ショウイチ「ふざけんな、警察は便利屋じゃねぇんだよ」

と、一言も返す暇も無いまま追い出された。

三度目の正直で向かったのは鳴海探偵事務所

フィリップを頼ってきたのだが……

フィリップ「君たちは知っているかい？真島成樹という人物を！！」

と、また微妙な所を検索していて相手にされなかった。

とりあえず

シンジ「せめて徳川吉宗にしとけよ」

とだけツッコミはいれておいた。

その後、色々な場所を回ったのだがタイミングが悪かったり相手にされなかったりと修理が出来ないでいた。

ユウスケ「やばいやばいやばい……」

カズマ「どうすれば……」

シンジ「そもそも悪いのはカズマだけなんだから、カズマを差し出せば……」

カズマ「ちょっと待て！？」

ユウスケ「ここまで来たんだから、いまさら」

シンジ「だよなぁ」

「「「うーん」」」

頭を抱え、唸っていると背後から声をかけられる。

「おい」

「「「え？…げ！？」」」

三人が振り返るとそこにはオーラでドラグレッダーが見える程キレている城戸がいた。

カズマ「きき城戸さん！？」

城戸「蓮からお前らがいるって聞いて来てみれば……これは一体どうゆうことだ？」

へこんでいるドラゴンサイクルを見てさらにオーラを出す城戸

ユウスケ「き…城戸さん、そんな映司がキレた時みたいなオーラ出さなくても……」

城戸「ああ？」

ユウスケ「ごめんなさい！！」

城戸「さぁて、お前ら頭出せ」

何故か変身してもいないのにドラグクローを装着する城戸

カズマ「あれぇぇぇ！？何で！？」

城戸「気にするな、歯ぁ食いしばれ！！」

「「「ギャァァァァァ！？」」」

それぞれ拳骨をお見舞いした城戸は悶えている三人にため息を吐き

城戸「ったく、正直に謝ればいいのに」

「「「ご…ごめんなさい」」」

後日修理も終え、この騒動は無事纏まったのであった。

第十九話バイクと海東と

～光写真館～

海東「うっ…うっ…」

土「いい加減にしろ！気持ち悪い！！」

写真館にはハンカチを噛み、泣いている海東とそれにキレる土がいた。

海東「だって土！僕だってバイクが欲しいんだ！！」

海東が泣いている理由それは自分のバイクが無いことだった。

海東「城戸くんなんてちゃんとバイクあるのにもう一台も！！」

土（まぁ、城戸も市販のやつで、サバイブにならないと専用バイクも無いしな……でも今度のはお下がりみたいなもんだよなぁ）

海東「土ぁぁ」

土「引っ付くな！キモい！！」

まとわり付く海東を引き剥がす。

海東「僕はどうすれば……」

土「バイクくらいでクダグタ言うな……ほら、これ貸してやる」

そう言って出すのは『アタックライド　オートバジン』のカード

海東「これバイクある前提だよね！？」

土「……ちっ」

海東「土！？」

土「あ～……鴻上の所にでも行けばいいんじゃねぇのか？」

海東「鴻上？」

土「ああ、あいつはお前みたいな奴が好きそうだからな」

海東「なるほど……早速行ってくる！」

海東はそう言い残し写真館を出ていった。

土「はぁ…やっと行ったか…」

と、深いため息を吐く土であった。

～鴻上ファウンデーション～

鴻上ファウンデーションにやって来た海東
事のあらましを鴻上に話すと元々海東に対しては

鴻上「怪盗…まさに欲望そのもの！素晴らしい！！」

と気に入っていたので快く面会が許された。

鴻上「なるほど…バイクか」

海東「ああ、何かいい考えは無いかい？」

鴻上「いいだろう！君のことは前々から気に入っていた！特別に専用バイクを用意してあげよう！」

海東「本当かい！？」

鴻上「ああ！後日また来なさい」

海東「ありがとう！感謝するよ！！」

鴻上と約束を交わした海東は満面の笑みで帰って行った。

――――――――――

数日後、鴻上ファウンデーションを訪れた海東
駐車場に向かうと鴻上と里中と幕を被せられたバイクらしきものがあった。

海東「鴻上社長！」

鴻上「喜びたまえ海東君！君のために用意したバイクだ！…里中君！」

里中「はい、社長」

鴻上に合図され里中は幕を引く。

そこにはディエンドのイメージカラーであるシアンで塗装された

ライドベンダーがあった。

海東「……ん？」

鴻上「さあ、これも受け取りたまえ！」

そう言って鴻上が出したのはこちらもシアンのバイクスーツであった。
しかし、よく見てみるとそれはライドベンダー隊のユニフォームだった。

海東「……え？」

よく分からないままにユニフォームを着せられた海東

鴻上「ハッピーバースデー！！海東大樹ライドベンダー隊隊長！！……いや何、後藤君が抜けてライドベンダー隊の隊長席が空いていて困っていたんだ！これからよろしく頼むよ海東君！！」

里中「おめでとうございます」

ハイテンションな鴻上とクールな里中と呆然とする海東でこの空間には妙な空気が流れていた。

海東「……

……

……

……あれ？」

≫海東がライドベンダー隊に入りました。

海東「あれえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！？」

小ネタ

～モノマネ～

五代「いきます！マス○ング大佐！」指パッチン

翔太郎「変身せずに発火！？」

～モノマネその２～

カズマ「いっきまーす、剣崎さん！
オンドゥルルラギッタンデスカー！？」

剣崎「まて剣立！ディスカーの発音が違う！！」

ユウスケ「本人認めてる！？」

～モノマネその３～

ワタル「始さんいきます……！」

アスム「ワタル!?小説で顔真似は御法度ですよ!!」

～剣崎にホストっぽい格好させてみた～

士「なんかスッゴいいらつく」

剣崎「なんでだよ!?」

～映司ＶＳ浅倉～

王蛇「ふん……」

『アドベント』

ベノスネーカー『シャー!』

オーズ「きゅー」↑卒倒

城戸「気絶した!?」

～もし映司にセルメダル入れようとしたら～

カザリ「その欲望、解放しろ」↑セルメダル投げ

映司「痛！？」↑投入口開かずに当たる

カザリ「あ…ごめん」

～二匹が遭遇したら～

オリジキバット「渡～」

リイマジキバット「ワタル～」

Wキバット「「……」」

Wキバット「「誰だお前！？」」

違いってありましたっけ？

～もし天道の性格が『ＭＲ．ＢＲＡＩＮ』の人になったら～

天道「ど…どうも天道総司と申します」

ひより（ぞくっ！？

樹花「お…お兄ちゃん？」

天道「どうかした樹花？」

加賀美「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！キモい！気の小さい天道キモい！！」

天道「えぇぇぇ！？」

～剣崎が変身一発を飲んでデルタに変身しようとしたら～

剣崎「ゴク…ゴク…プハッ……よし！ヘシン！！」

『Ｅｒｒｏｒ』

剣崎「え？あれ！？も…もう一度、ヘシン！！」

『Ｅｒｒｏｒ』

剣崎「えぇぇぇ！？何で！？」

橘（かつぜつだろ）

始（かつぜつだな）

睦月（かつぜつですね）

剣崎「ナンディダァァァァァァァ！？」

第二十話遊びと本気と

場所は公園、広場の中心に立つのは城戸
傍にはカズマとソウジ

感じるのは視線、周囲一帯から姿無き何者かのいくつかの視線が突き刺さる。

城戸はその視線の正体を見つけようと目をこらす。

汗を流し、喉を鳴らす。

ガサッと生垣が揺れる。

城戸「!?」

意識を生垣の方に向けたその時、一陣の風が吹く。

かこーん!

気付いた時には小気味良い音が響いていた。

城戸が振り返るとそこには嫌味たらしく鼻で笑うファイズＡＦ

遠くで空き缶が落ちる。

瞬間、城戸以外の全員が走り出す。

呆然とする城戸、やっと状況を理解したのか口を開く。

城戸「……アクセルフォームとか反則だろぉぉぉぉぉ！！」

彼らが行なっているもの、それは缶けりだった。

城戸「集合集合！集まれバカ野郎！！」

罵倒しながら参加者を集める。

出てきた者――乾、ユウスケ、シンジ、カズマ、ソウジは文句を口にしながらやって来る。

乾「どうした城戸？」

城戸「どうした?じゃねぇよ!お前だ巧!……何だその顔!は?じゃねぇ!」

やって来た乾に集中して罵倒を浴びせる城戸

何故缶けりかと言うと、偶々集まった城戸、乾、ソウジの三人

乾が飲み終わったジュースの空き缶を持て余していたら城戸が缶けりでもするか、と提案、偶然通りかかったユウスケ、シンジ、カズマの三人も誘い缶けりをすることになった。

始まってしばらくして、城戸が鬼の番、ソウジ、カズマを捕まえ良い調子の時に乾がファイズに変身して缶をけり、今に至る。

城戸「明らかに反則だろ!!」

乾「反則もなにも、そんなルール無いだろ?」

「「「確かに」」」

乾の言い分を聞いて納得する城戸と乾以外の面々

ユウスケ(青になって上空から……)

シンジ（ミラーワールドから……）

カズマ（タイムで……）

乾の行動を見てそれぞれ考える三人

城戸「おいお前等、それやったらドラグレッダーの餌にすんぞ」と心を読んで脅す城戸

三人「「「は……はい」」」

城戸「ったく……うん？」

ふと視界の隅を赤い物体が過る。
それを追うとソウジがその赤い物体を隠す。

ソウジ（。＿。）↑明後日の方向

城戸「クロックアップが一番質悪い！！」

ソウジ「いや、クロックアップする前にキャストオフの破片で倒れるかなと……」

城戸「死ぬわ！！あれ噂じゃ秒速２０００ｍって聞いたぞ！」

ユウスケ「へぇ」

シンジ「そうなんだ」

カズマ「ガッテン！ガッテン！」

城戸「ここはＮ○Ｋじゃねぇ！！」

ソウジ「まぁまぁ」

城戸「くっ……変身すんの禁止！！」

全員「「「はーい」」」

城戸「よし続き！」

城戸のは言葉に乾達は散開する。

城戸「…１８…１９…２０！！」

二十秒数え終えた城戸は早速探そうと周囲を見回す。

カコーン！

城戸「……へ？」

缶から目を離した瞬間先程のように缶が飛ぶ。
そこには、ウルフオルフェノク――乾がいた。

城戸「またお前かぁぁぁぁ！！」

ウルフオルフェノク　「ふっ」

城戸「オルフェノクになんのも禁止！」

乾「まあいいけど」↑戻った

ソウジ「なあ」

城戸「なんですか？」

いつの間にか傍にきていたソウジ

ソウジ「そろそろ終わりにしないか？その、流石にしんどい……」
この日差しのなか三十路のソウジにはこれ以上はキツイらしい。

城戸「うっ……そうですね……花鶏にでもいきますか」

ソウジ「ああ」

乾「おごりか？」

城戸「ああ、熱々のコーヒーおごってやるよ」

乾「な？！？　」

ソウジ「ははは」

とまあ、最後はうやむやになるも缶けりは楽しく終わった。

～その頃三バカは～

ユウスケ「なあ」

シンジ「なんだ？」

ユウスケ「城戸さん……いないよな」

シンジ「……そうだな」

ユウスケ「……乾さんとソウジさんもいない気がするんだけど」

シンジ「……そうだな」

カズマ「……さっき城戸さん達がどっかいってんの見たんだけど」

ユウスケ「……」

シンジ「……」

カズマ「……」

完全に忘れられた三バカであった。

ライダー学園物語～映司の夏休み～

アンク「おい映司、これの四巻取れ」

ベッドに寝転がってマンガを読んでいるアンクがこちらも本棚の近くで寝転んでマンガを読んでいた映司に言う。

映司「あ、ごめん今読んでる」

アンク「ちっ、さっさと読め」

映司「分かった分かった、もう終わるから」

ノブナガ「お前等くつろぎ過ぎだろ」

映司達がそんなやりとりをしていると部屋にノブナガが入って来た。

映司達がいるのはノブナガの部屋だった。

映司「あ、ノブくん、お邪魔してるよ」

ノブナガ「映司、お邪魔してるよじゃない、何勝手に入ってるんだ」

映司「いやぁ、遊びに来たらおばさんが上がっていいって言ったから」

ノブナガ「はぁ…お袋め……まぁいい」

アンク「そんなことよりアイス無いのか」

ノブナガ「お前は少しくらい遠慮しろ！」

アンク「ちっ」

ノブナガ「で、何しに来たんだ？」

映司「特に用は無いんだけど……」

ノブナガ「……お前のことだ、家にいたくないんだろ」

映司「うっ……よく分かったね」

ノブナガ「俺を誰だと思ってる、それにお前等とはガキのころからの付き合いだからな」

この性格がバラバラの三人は何故か小さい頃からウマが合い、いつも三人でつるんでいた。

話は戻り、映司はこの夏休み殆ど家にはいなかった。

映司の父親は政治家で、息子の映司にも政治家の道を歩むことを望んでいた。

しかし、映司は友人で仲間である伊達共に海外での支援活動をする

ことが目標で、父親とはそのことで反発しあっていた。
逃げてばかりではいけないと思っていながらもずっと父親を避けているのだ。

ノブナガ「とやかく言う気はないが……宿題とかは大丈夫なのか？」

映司「うん、もう終わらせてるから」

ノブナガ「そうか……まぁ好きなだけいても構わん」

映司「ありがとう……ノブくん」

ノブナガ「ふん」

アンク「おい、話は終わったか？コンビニ行くぞ」

映司「アンク……」

ノブナガ「少しは空気を読め」

アンク「はっ、こいつがそんなことでくたばるたまか？親なんて無視しとけばいいんだよ、おら、そんなことよりも、コンビニ行くぞ」

映司「あはは♪やっぱりアンクはアンクだ」

ノブナガ「では行くか」

三人は部屋を出て外に向かう、途中でノブナガの母親に会う。

「どこか行くの？」

ノブナガ「ああ、少し出てくる、あとこいつら今日泊まっていくから」

映司「えっ！？」

アンク「はぁ！？」

ノブナガ「どうせ家に帰ってもあれだろ？アンクもついでに泊まっていけ」

「いいわよ♪そうだ、どうせだからバーベキューにしましょう♪」

ノブナガ「ああ、いいな」

「ついでに食材も買ってきて、あとよしのちゃんも誘って来なさい」

明智よしの、ノブナガの幼馴染みで恋人、隣に住んでいる。

ノブナガ「分かった、じゃあ出てくる」

お金を受け取り外に出る。

映司「いいの？」

ノブナガ「気にするな、お袋もお前等のことは気に入っている、問題はない」

映司「うん……ありがとう」

ノブナガ「ああ」

アンク「ったく、勝手に決めやがって」

映司「はは……じゃあよしのちゃん誘いに行こうか」

ノブナガ「ああ……そうだ、泉兄妹も呼べ、人数は多い方がいい」

アンク「怪力女も呼ぶのか？」

映司「アンク、女の子をそんな風に言っちゃいけないよ」

アンク「はっ」

ノブナガ「さっさと行くぞ、バーベキューと言えば肉だな肉、信吾さんも来るから鶏肉多めに買うか」

アンク「……それは嫌がらせか？」

ノブナガ「何でだ?美味いじゃないか、鶏肉」

アンク「この野郎!!」

ノブナガ「はっはっはっ」

映司「二人共、遊んでないで行くよ」

ノブナガ「ああ」

アンク「ちっ」

その後、じゃれ合いながらも買い物を済まし、時間は飛んで夜

比奈「お兄ちゃん、お肉ばかり食べないで野菜も食べてよ」

信吾「いいじゃないかいっぱい持って来たんだから」

自身でも肉を持参したので遠慮なく食べる信吾に注意する比奈

ノブナガ「映司、遠慮はいらんもっと食え」

映司「ノ…ノブくん」

焼けた肉をどんどん映司の皿に乗せるノブナガ

ノブナガも気遣いからだろうが流石に映司も困惑していた。

よしの「こらノブ、映司くんが困ってるでしょ」

ノブナガ「よしの、お前も食え、お前は痩せすぎだ、もう少し太った方がいい」

よしの「な!?」

女心が分からないノブナガであった。

ノブナガ「?……おっと肉が……ほらアンクも食べろ」

アンクの皿に肉を移すノブナガ

アンク「……おい」

ノブナガ「どうした?」

アンク「これはなんだ?」

ノブナガ「何だと言われても、肉だが?」

アンク「肉だが?じゃない!なんで鶏肉なんだ!?」

アンクの目の前の皿には山盛りの鶏肉があった。

アンク「ノブナガぁぁぁぁぁ！！」

ノブナガ「近所迷惑だ、静かにしろ」

殴りかかるアンク（ｎｏｔ本気）　力にはノブナガに分があるのか直ぐに捕り抑えられた。

アンク「くっ！」

ノブナガ「ん？箸が止まってるぞ映司、肉はまだまだあるんだ、どんどん食え」

映司「あ…あはは……」

苦笑いな映司、それでも賑やかなアンクとノブナガという友達の存在をありがたく思うのであった。

バーベキューもお開きになって深夜

映司「た…食べ過ぎてお腹が……うっ！？」

トイレに籠り痛むお腹を擦りながらこの時ばかりはノブナガを恨む映司であった。

第二十一話氷川誠の不器用克服

氷川「不器用を治したいです」

某バスケマンガを彷彿させる悲痛な表情の氷川

津上「あの、氷川さん……仕事中なんで厨房に入らないでくれません？」

それに答える津上は迷惑そうにしていた。
場所はレストランアギト、ディナーのピークは過ぎたがお客はまだいる、だというのに従業員が忙しなく動いている厨房に氷川は入り込んでいた。

氷川「うっ！……すみません」

津上「コーヒーおごりますから向こうで待ってて下さい、氷川さん不器用なんだからお皿割らない内に……」

氷川「なっ？！？またあなたはそうやって……」

ガッシャーン！！

氷川「しまっ……！？」

津上の言葉に腕を振り上げて抗議しようとした氷川

しかし、勢い余って皿洗いの係が洗って積んでいた皿を落としてしまった。

津上「氷川さん……可奈さんも最近は少なくなったのに……」

津上にそう言われ、ソースを作っていた可奈の肩が跳ねる。

可奈「す…すみませんシェフ」

津上「怒ってません、怒ってませんから！…ってソース焦げてる！！」

可奈「え？ああ！？」

可奈は急いで鍋を火から離すがすでに遅かった。

可奈「すみません……」

見るからに落ち込んでいる可奈

津上「大丈夫ですよ、急いで作り直しましょう！」

可奈「はっ、はい！」

何故か青春のワンシーンのようになった二人の空気に氷川はおろか他の従業員も口を挟めないでいた。

氷川「……失礼します」

いつの間にか割れた皿を片付けた氷川は皿の代金を従業員に渡してレストランアギトを出た。

――――――――――

一夜明けて次の日、氷川はどうにかして自分の不器用を治す方法は無いかと考えながら街を歩いていた。

しばらく歩いていると道の向こうからボウルを持った天道がやって来た。

氷川「こんにちは」

天道「おお、氷川か、どうした、浮かない顔をして」

氷川「ええ、少し……」

天道「ふむ、今は気分がいい、悩みがあるなら聞いてやろう」

氷川「気分がいいって何かあったのですか？」

天道「ああ、豆腐屋の親父殿が今までで最高の豆腐を作り、それを手に入れたんだ」

氷川「それは凄いですね」

正直豆腐の善し悪しは分からないがあの天道がそれほど言うのだから間違いないのだろうと納得する。

天道「では歩きながら聞こう」

天道に促され氷川はこれまでのことを打ち明けた。

天道「なるほど、不器用を治したいか」

氷川「はい」

天道「ふむ、ならば料理をしろ、そうすれば幾分かは良くなるだろう」

氷川「料理、ですか」

天道「ああ……よし着いてこい、今からこの豆腐を使って何か作ろうかと考えていたところだ、これを使わせる訳にはいかんが、手本程度なら見せてやろう」

氷川「いいんですか？ありがとうございます！あ、その豆腐僕が持ちます！」

天道「いや、これは大切なものだ俺が自分で持つ」

氷川「これから教えてもらうんですから何かしなくては気が済みません！」

天道「豆腐は繊細なものだ！不器用なお前が持ったら……っ！？」

氷川「豆腐を運ぶくらい僕にも出来ます！……ああ！？」

豆腐を取り合う天道と氷川、水に入った豆腐を取り合えば大体予想はつくもので……

天道「……」

氷川「と…豆腐が…」

豆腐はボウルから飛び出し地面に落ちた。

天道「……おばちゃんが言っていた……男にはしてはいけないことが二つある……女の子を泣かせることと、食べ物を粗末にすることだ！！ましてや親父殿が丹精込めて作った至上の豆腐を……貴様は……！！」

氷川「すすすすみません！！」

天道「許さん！その身をもって償え！！」

氷川「ぎゃあああああああ！！？」

生身ライダーキックを決める天道、変身していないとはいえそれは絶大で、さらには豆腐を台無しにされたことによる怒りも上乗せされ、その威力は計り知れないものになった。

倒れ伏せる氷川を天道は一度思い切り踏んづけてから去っていった。

氷川「……」

氷川が不器用を治せるのはいつの日になるだろうか……

第二十一話氷川誠の不器用克服（後書き）

～オマケ～

涼「……」

ベッドに横になってテレビを見ていた涼、ふとチャンネルを変えようと思いリモコンを探すがリモコンは手の届かないところにあった。

涼「ふん……」

触手を伸ばしてリモコンを取り、チャンネルを変える。

涼「……」

触手を器用に使いこなしている自分をなんだかなぁ、と思う涼であった。

第二十二話世界の終末の一歩手前（前書き）

グリードは味覚やらその他の感覚はあります。

アンクの体はセルメダルです、信吾さんは元気です。

そして比較的丸いです。

第二十二話世界の終末の一歩手前

『本庁より各局、本庁より各局、標的は未だ行方不明、繰り返す、標的は未だ行方不明細心の注意をはらい捜索されたし』

一条「くっ！どこにいるんだ！」

ダグバ「雄介！ダメ、見つからない……」

五代「そうか……ごめん、グロンギの皆には悪いけどもう少し頑張って」

加賀美「矢車さん！？」

矢車「今回ばかり傍観は出来ない……シャドウの指揮は俺がとる！総員パーフェクトハーモニーだ！！」

カズマ「城戸さん！どうですか？うちも社員総出で捜してるけど駄目みたいです……」

城戸「ああ、こっちも神崎がミラーモンスターも呼んでくれてるけど、あまり長くはこっちには居られないなから中々進まないんだ……」

海東「全員死にものぐるいで捜すんだ！」

ライドベンダー隊「「「はい！！」」」

士「海東！」

海東「士……」

士「どうだ見つかったか？」

海東「ダメだよ……カードも全部使ったけど見つからない」

士「そうか……」

人と怪人、警察と一般人、あらゆる組織が垣根を越えてあるものを捜していた。

ドオォォォン！！

「「「！？」」」

街のどこかで爆音が起こる。

爆音の発生地、そこには巻き起こる粉塵に、肩で息をするオーズプトティラコンボとアンクがいた。

オーズＰＫ「ハァッ…ハァッ…ハァッ…」

アンク「映司！しっかりしろ！！」

オーズＰＫ「アンク！逃げろ！！」

アンク「はっ！お前に死なれて比奈に絞められるのは嫌だからな」

オーズＰＫ「アンク……よし！」

アンク「映司……来るぞ！！」

オーズＰＫ「ああ！！」

粉塵が晴れてきた。

ザッ、ザッ、と足音が聴こえる。

「キィィィィヨォォォォォちゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！！！」

現れたのは紫色の体に独特なフォルム、恐竜グリードギル――真木

であった。

事のはじまりは時間をさかのぼり今朝のことだった。

カザリ「ふわぁ……ミルクミルク」

目を覚ましたカザリ、好物である牛乳を飲もうとキッチンに向かう。

カザリが手に取ったのは特別な牧場から直接取り寄せた高級牛乳
牛乳を飲んでいると突然屋敷の家主である真木の叫び声が聴こえた。

カザリ「ブフっ！？」

驚いたカザリは牛乳を吹き出してしまう。

そして運悪くキッチンに入って来たメズールに浴びせてしまった。

カザリ「メっ…メズール！？」

メズール「カァァザァァリィィ？」

カザリ「ごごごごごめんなさい！！」

メズール「……説教は後でするわ、とりあえず先にドクターの坊

や様子を見て来なさい」

カザリ「はっ…はい！！」

真木の寝室に来たカザリ、未だに真木の叫び声が聴こえるため扉を開けるのをためらっていたが、意を決して部屋に入る。

真木「無い！無い！無いいいいいいいいい！！」

カザリ「うわ？！？」

引き出しやらタンスやらがひっくり返されゴッチャゴッチャの室内、真木は「無い無い」と言い何かを捜していた。

真木が慌てる原因と言えば唯一つ、いつも彼が腕に乗せている人形のキヨちゃんがなくなった時だ。

ウヴァ「おいおい、何の騒ぎだ？」

カザリ「あ、ウヴァ」

騒ぎを聞きつけウヴァがやって来た。

ウヴァ「人形なくしたのか？」

カザリ「みたい、さっさと捜そう」

そう言い部屋に入る二人、しかし部屋に踏み入れた瞬間真木が放つ

波動により吹き飛ばされる。

真木「無いいいいいいいい！！！」

二人「「うわあああああ！？」」

そのままギルになった真木は部屋の壁を壊し外に飛び出した。

カザリ「ま…まずい、映司とアンクに連絡しなきゃ！！」

ウヴァ「世界が……終わる」

蒼白になるカザリとウヴァ、急いで映司に連絡した後はあらゆる知り合いに話が広がり街全体でキヨちゃん捜索が始まった。

～真木邸～

氷川「どうですか？真魚さん」

警察は一刻も早く事件を収拾させるため、本来は禁止されている超能力者の協力を扇いだ。

真魚「ごめんなさい、夏バテで、疲れててあまり……」

氷川「そうですか……」

真魚「あ、でも紫色の何かは見えました！」

氷川「紫色？」

ショウイチ「真木じゃないのか？」

氷川「芦河さん」

真魚「いえ、真木さんではありませんでした」

ショウイチ「そうか……」

メズール「どう？何か分かった？」

ショウイチ「メズール……お前避難しておけと言っただろ、お前らは真木相手にしたらマジで死ぬんだぞ」

メズール「うっ……分かったわ」

ショウイチ「さて……」

ドオォォォン！！

再びなる爆音

ショウイチ「ちっ、マズイな」

氷川「映司さんが対応していますが大丈夫でしょうか」

ショウイチ「とりあえず剣崎にも応援を頼んだが……いつまでもつか」

オーズＰＫ「ぐっ！」

吹き飛ばされ変身が溶けるオーズ

ギル「キョキョキョキョキョキョキョキョキョォォォォォ！！」

ブレイド「怖ぇよ？！！」

場所は変わり映司達の戦闘現場、剣崎も加わわるがほぼ暴走状態の真木に押されていた。

アンク「映司！！」

アンクは火炎弾で牽制しながら映司にかけより起き上がらせる。

ブレイド「まだ見つからねぇのか！！」

アンク「っ！？逃げろ！でかいのが来るぞ！！」

ギル「キョォォォォォ！！」

力を溜め込むようにうねるギル、映司達は逃げようとするが間に合わない、そして波動が放たる、しかしそこに……

キィィィ！！

ブレーキの摩擦音を立てながらデンライナーが映司達とギルの間に割り込んできた。

映司「デンライナー！？」

良太郎「映司君！！」

モモタロス「映司！！」

出てきた良太郎とモモタロス、良太郎の手にはキヨちゃんが握られていた。

良太郎「ま…ままま真木さん！！キヨちゃん見つけてきました！！」

ギルの迫力に怯えながらもキヨちゃんを差し出す良太郎

それを見たギルは人間態に戻りキヨちゃんを受け取り、いつものように腕に乗せる。

真木「野上君、ありがとうございます」

あれだけ暴れたというのに真木はいたって冷静に対応した。

真木「火野君、迷惑をかけました」

映司「あ、いえいえ」

良太郎「映司君、真木さん、ごめんなさい！」

映司「え？なんで良太郎君が謝るの？」

モモタロス「すまねぇ、全部うちの小僧が悪いんだ」

剣崎「小僧って…リュウタロスのことか？」

良太郎「うん、実は……」

良太郎によると今回の事件の発端はリュウタロスのイタズラらしい。
以前真木がキヨちゃんを落とした時の慌てぶりを見たリュウタロスは面白がってキヨちゃんを盗んだのだ。

ウラタロス「ほら、ちゃんと謝りなさい」

リュウタロス「ごめんなさい……」

アンク「こんのガキが……！」

映司「アンク落ち着いて」

真木「……今回は不問としましょう」

リュウタロ「ありがとう！」

真木「しかし、迷惑をかけた皆さんには共に謝罪に行きましょう」

リュウタロス「は～い」

剣崎「めでたし……でいいのか？」

映司「いいんじゃないですか？」

アンク「疲れた！真木のツケでサー○ィワン行くぞ！」

映司「ちょ？ダメだよ！」

真木「構いません、今回最も迷惑をかけたのは火野君とアンク君ですからね、好きなだけ食べてください」

アンク「言質は取った！さっさと行くぞ」

映司「アンク！アイスは逃げないよ！」

剣崎「う～ん……終わり！」

今回の騒動は被害者カザリとウヴァの二人だけで無事？解決した。

第二十三話ＢＢＱと炭酸と超能力

ユウスケ「おー着いた着いた」

城戸「さっさと荷物下ろせユウスケ」

カズマ「危ねっ！ここ滑る！」

五代「カズマ、気をつけなよ」

ダグバ「あはは♪」

シンジ「ダグバさーん！？荷物運んで！！」

場所は山中の河原、今日はこの六人でバーベキューに来たのだ。

カズマ「あれ？火点かないな……」

火の用意をしていたカズマ、慣れていない為かうまく火が点かない。

五代「うん？点かない？」

カズマ「ええ、なんか……」

五代「ちょっと見せて……んっ」

炭に手をかざしたと思うと次の瞬間には炭から火が起こった。

カズマ「発火？！？」

五代「点いた点いた」

カズマ「ちょっ！どうなってるんですか！？」

五代「うん？ああ、前にアルティメットになったらそれ以来なんか生身でも使えるようになった」

カズマ「どこのデルタですか！……てか何でアルティメットに？」

五代「いやダグバとケンカしちゃって、つい……」

ダグバ「……ごめんなさい」

五代「いいよ、俺も悪かったし」

ダグバ「うん♪」

しゅんとなるダグバの頭をなでるとすぐに笑顔になった。

カズマ「ついでなるもんですか……」

五代「そういえば、最近ではスプーンも曲げれるようになったよ」

カズマ「だからどこのショウイチさんですか……」

そうしていると城戸がやって来た。

城戸「火いける？」

五代「ん…もう少し」

ユウスケ「じゃあ肉用意しときますね」

五代「頼むね」

城戸「あ～ビールでもあればなぁ……」

五代「ダメだよ、日帰りなんだから」

城戸「でもさぁ、やっぱバーベキューと言えば冷えたビールだろ？」

五代「運転しないといけないから一人飲めないのはかわいそうだよ」

城戸「へいへい……火もういいんじゃないか？」

五代「そうだね、小野寺くん」

ユウスケ「はーい」

火もいい感じなのでようやく肉を焼き始めた。

シンジ「うめー！流石天道さんオススメの牛肉」

五代「うん、美味しい♪」

城戸「カズマ、コーラ取って」

カズマ「あ、はい」

城戸「サンキュ……ぶっ？！？」

ダグバ「わっ！？」

ペットボトルのコーラのキャップを開けた瞬間中身が城戸の顔めがけて噴射した。

城戸「……なんでだよ」

シンジ「城戸さん……タオル」

城戸「……おう」

五代「あちゃー……大分揺れたからね」

ユウスケ「炭酸は全部危険……か」

城戸「うあ……服も濡れたしべとべとする……ちょっと川で洗って

くる」

そう言い、服を脱ぎながら川に向かった。
体を拭い服を洗って戻って来た。

他の面々は待っていても仕方がないので食べ始めている。

城戸「なあ、着替えとかないよな」

カズマ「あー……ないですね」

五代「真司、貸して」

城戸「ん？ああ」

濡れている服を受け取った五代、すると服から湯気が出て来た。

五代「はい、乾いたよ」

城戸「いや便利過ぎだろ！！」

ユウスケ「えぇぇ！？そんなん出来るの！？」

シンジ「すげぇ！！」

カズマ「超能力……でいいのか？」

五代「さ、食べようか」

城戸「お…おう」

乾いた服を着た城戸、バーベキューを再開する。

シンジ「サイダー……いけるか？」

カズマ「ちょっとずつ炭酸を抜けば……」

ユウスケ「おお……よっ…ん」

城戸の二の舞にならないように慎重に開けるユウスケ

カズマ「おっ」

ユウスケ「よし！開いた」

無事サイダーが開いた。

城戸「……ちっ」

シンジ「城戸さん！？なんか黒いよ！？」

城戸「あはは♪なんのことだ？」

ダグバ「キモーい」

城戸「うっせ」

五代「ん？ダグバ、ちゃんと野菜も食べなよ」

ダグバ「えー？ピーマン嫌い」

五代「ダメだよ、津上君が育てたピーマンなんだから」

ダグバ「……はーい」

五代「よろしい♪」

城戸「親子かよ」

シンジ「ん？」

ユウスケ「どうした？」

シンジ「いや、なんか気配が」

シンジが気配を感じた方を向くとガサガサと茂みが揺れた。
全員が身構える。
すると……

ダグバ「あ、ガミオだ」

ガミオ「ん？騒がしいと思ったらお前たちか」

茂みから出てきたのはグロンギの王、ン・ガミオ・ゼダだった。

五代「なんだガミオか、びっくりした」

ガミオ「おお、すまんな、ゲゲルの途中でな」

ユウスケ「そうなのか、今回はなんだ?」

ガミオ「うむ、今回はクロスカントリーとやらをしておる」

シンジ「へぇ」

ゲゲル、五代雄介の世界ならば人を殺すグロンギの悪しきゲームなのだが、この世界ではどちらかと言えばレクリエーションのようなもので、大体野球やサッカーといったスポーツをしている。たまに五代や他の人間も参加している。

ユウスケ「だったらぐずぐずしててていいのか?」

ガミオ「ん? おお、確かに、ではさらばだ」

そう言いガミオは去っていった。

城戸「ん? 肉切れたな」

五代「野菜も無いな」

城戸「んじゃ暗くなる前にそろそろ帰るか」

「「「はーい」」」

日が暮れる前に帰ることになり、各自片付けを始めた。

城戸「よし、行くか」

城戸の運転で五代達は街に帰っていた。

第二十四話新ライダーと菓子と思い出

剣崎「あれ？」

渡「どうかした？」

ある日街中を歩いていた剣崎と渡、剣崎は反対の歩道を歩いている男を見て首を傾げる。

剣崎「いや、あいつ誰だたっけ」

剣崎が見ていた男は短ラン、リーゼントといったいささか時代錯誤？な姿

剣崎「話したこともあるはずなんだけど……」

渡「何言ってるの？彼は如月弦太郎君だよ」

剣崎「ああ、そうだそうだ、フォーゼの……なんで急に忘れたんだろ？」

渡「暑さで頭やられた？」

剣崎「最近は涼しいけどな……てかお前たまにキツイこと言うよな」

渡「？」

剣崎「天然…か？……まぁいい、それより今日はどうする？」

渡「そうだね」

二人は特にすることがなく暇なので外に出たのだが、面白いこともないので退屈していた。

剣崎「ん？トルコアイスか」

剣崎が見つけたのはトルコアイスの屋台だった。

渡「そういえばアンクがトルコアイス食べて、こんなものアイスじゃない！って怒ってたね」

剣崎「へぇ、俺は好きだけどな」

渡「僕は微妙かな」

剣崎「ふぅん……コンビニでも行くか」

渡「うん」

アイスの話をしていたらアイスが食べたくなったのでコンビニに行くことにした。

剣崎「やっぱアイスって言ったらガリガリ君だな」

渡「最近はアイスＢＯＸがお気に入りかな」
アイスを買った二人は近くの公園に来ていた。

剣崎「アイスＢＯＸか、レモン味がうまかったな」

渡「あ、ピノも美味しいよね」

剣崎「クーリッシュとか考えた奴スゲェよな」

渡「そう？シェイクのパクリかと思ったけど」

剣崎「……あれ？何が違うんだ？」

渡「うーん……味が違う位しか浮かばない」

剣崎「まぁいいか……ん、ハズレか」

渡「当たったことある？」

剣崎「ん～…二、三回、渡は？」

渡「僕も一回位かな」

剣崎「意外と当たらないよな」

渡「うん」

剣崎「……何か駄菓子食いたくなったな、適当に菓子買ってワタルのとこでも行くか」

渡「そうだね、じゃあ行こうか」

剣崎「おう」

二人は駄菓子を買うため、剣崎が子供の頃通っていた駄菓子屋に向かう。

剣崎「あれ？おかしいな、ここら辺のはず」

駄菓子屋の近くに来たのだがそれらしき店が見当たらない。

渡「どうしたの？」

剣崎「いや、店が……ここだ」

剣崎が立ち止まったのは駐車場だった。

渡「え？ここって……」

剣崎「たぶん潰れたんだろな、結構ばあちゃんだったし」

遠い目の剣崎、渡も切ない気持ちになる。

剣崎「もっぺんコンビニ行くか」

渡「……うん」

足取り重そうに歩く剣崎、渡も後を着いていく。

セミの鳴き声が聴こえる昼下がりだった。

その後、カズマにＢＯＡＲＤの食堂に駄菓子コーナーを作らせた剣崎、社員には意外と好評だったそうな。

第二十四話新ライダーと菓子と思い出（後書き）

弦太朗は今後出しやすくするためだけに出しました。

名前だけね

あと剣崎は一応カズマの方のＢＯＡＲＤ所属ってことで

第二十五話小野寺ユウスケの休日

早朝、あるマンションの一室、ベッドでは二人の男女が寝ていた。

ユウスケ「…ん、ふぁ…朝か……」

男の方、ユウスケが目を覚ました。

藍「……すぅ……すぅ……」

女の方、藍は未だ寝ていた。

ユウスケ「あねさんまだ寝てるか……飯作ろ」

そう言ってベッドを降りる。

先に言っておくが男性諸君が思い浮かべるような情事が行われたわけでは無い。ユウスケはたまに部屋を訪れ、晩酌の相手をしたりする、その際にユウスケも酔い一晩明かすことが多い。
ベッドも一つしか無いのだが藍はユウスケを弟のように扱うので特に抵抗はない。
そこがユウスケの悲しい所ではあるが。

藍「おはよ……」

ユウスケ「おはよう、あねさん」

朝食を作っていると藍が起きて来た。

ユウスケ「…ってあねさん！服はだけてるから！」

藍は寝間着代わりにＹシャツをきていたのだが、寝ている間に着崩れたようでえらく扇情的だった。

藍「ん～？」

ユウスケ「ほら！顔洗って来て」

未だ寝惚け眼な藍の背中を押すユウスケ

普段は姉御肌できっちりしている藍なのだが、朝が弱いのが短所だった。

藍が戻って来た頃には朝食も出来ていて一緒に食べる。

ユウスケ「今日はどこ行く？」

藍「そうね……海に行きましょうか」

休日の今日、二人はツーリングを計画していた。

どちらも体を動かすのが好きなため、休日の度に色んな所へ出かけているのだ。

ユウスケ「ん、分かった」

しばらくして朝食を食べ終えた二人は出かける用意をする。
用意をした二人はマンションの駐車場に向かう。
駐車場にはトライチェイサーとビートチェイサーがあった。
ユウスケはビートチェイサーに、藍はトライチェイサーに乗る。

ユウスケ「うし」

藍「じゃあ行きましょうか」

ユウスケ「おう」

エンジンをふかし駐車場を出る。

しばらく走っていると信号に引っかかる。
その時ハードボイルダーに乗った翔太郎が隣に並ぶ。

翔太郎「よう」

ユウスケ「翔太郎さん！」

藍「あら、おはよう」

翔太郎「あ、どうもおはようございます……二人が一緒ってことはデートすか？」

藍「まあそんな所ね」

翔太郎「羨ましいねぇ」

ユウスケ「あはは……翔太郎さんは？」

翔太郎「俺は依頼でね、まぁ詳しいことは話せねぇけどな……おっと、んじゃ、また今度」

信号が青に変わったので三人はバイクを走らせる。

ユウスケ達は街を出ると山道を走る。

ユウスケ「あれ？」

途中お腹が空いたので、店を探していた所、寂れたうどん屋で見慣れた赤いバイクを見つけた。

藍と話しその店に入る。

天道「ん？ユウスケか」

ユウスケ「天道さん、なんでこんな所に？」

店にいたのは天道だった。

天道「いや何、ここで絶品のうどんが食べれると風の噂で聞いてな」

店の奥では少々白髪が目立つ男性がうどんを作っていた。

ユウスケ「じゃあここで食べます？」

藍「そうね」

ユウスケ「おじさん、俺冷やしうどん」

藍「私はざるうどん」

「あいよ！」

店長は気のいい返事で返す。

「はいお兄さんお待ち！」

しばらくして天道が頼んでいたらしいかけうどんが来た。

天道「……頂きます」

天道は静かに食べ出す。
ユウスケと藍はそれを見守る。

天道「……うむ」

黙って食べていた天道、何か理解したように頷く。

ユウスケ「……どうですか？」

味の感想を尋ねる。

天道「……だ」

藍「え？」

天道「……普通だ」

どうやら噂ほどの味ではなかったらしい。

さっさとうどんを食べ終える天道

天道「ごちそうさま」
代金を払い天道は店を出ていった。

ユ藍「「……」」

その後出てきたうどんを食べるユウスケと藍、正直美味しいと思えるほどだったので安心した。
やはり天道の料理に対する理想が高いようだ。

店を出た二人は再びバイクを走らせる。

しばらく走ると海沿いの道へ出た。

さらに走っていると砂浜に降りられる所を見つけたのでバイク止めて砂浜に降りる。

ユウスケ「おおーキレイだな～」

キラキラと光る海を見てこぼす。

藍は近くあった流木に腰かけ海に向かって石を投げているユウスケを、子供を見守るような目で見ていた。
石を投げるのに満足したのかユウスケは藍の隣に座る。

ユウスケ「ふぅ……」

藍「ふふ♪お疲れ？」

ユウスケ「あっはは……いやぁ」

一人ではしゃいでいたのが恥ずかしいのか照れ隠しに笑う。

藍「たまにはこうゆっくりするのもいいわね」

ユウスケ「うん」

ここのところ仕事が立て込んでいて今日も久しぶりの休みであった。

ユウスケ「……」

藍「……」

二人は何も話さず海を眺める。

ユウスケ「……っ」

藍「……」

ふと手が触れる、少しためらうが思い切って手を重ねてみる。

ユウスケ「……っ…あねさん」

藍「ユウスケ……」

見つめ合う二人、ユウスケの顔が藍に近づく。

ユウスケ「……って！？」

しかしそれは藍のデコピンで阻まれる。

ユウスケ「つ～～！？」

藍「まだまだだね」

立ち上がり、バイクの方へ歩き出した藍

ユウスケ「あ、あねさん……」

怒らせたのかと顔色を伺う。

藍「もっと男らしくなりなさい、ユウスケ」

しかし、藍は振り返り、艶っぽく笑う。

ユウスケ「え、あ、うん……」

その笑顔に鼓動が早くなる。

藍「さ、帰るわよ」

ユウスケ「お…おう」

バイクに戻り走りだす二人

帰り道、ユウスケはずっと顔を紅くしていた。

ライダー学園物語～夏の終わり～（前書き）

～小ネタ～

映司「アンクゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！！」↑泣きながらアンクに抱きつき

アンク「離れろ！！」

後藤「何だ…あれは」

比奈「何でもアンクが死んじゃう夢を見たらしいです」

後藤「……そうか」

映司「お前は俺が守るからなぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

アンク「キモい！！」

比後「「」」↑引き

映司「アンクゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！！」

アンク「いい加減に、しろぉぉぉぉぉ！！」

ライダー学園物語～夏の終わり～

カズマ「えっと…ここがｘで……ここにｙ＝４×ａを代入して……あぁぁぁ終わんねぇぇぇ！！」

今日は八月三十一日、夏休み最後の日だ。

そしてカズマは未だに夏休みの宿題が終わっていなかった。

カズマ「やばいやばいやばい、今は１５：００時、学校は９：００から、登校に２０分かかるから、飯抜きでやっても残りは１７時間４０分、やらなきゃいけないのは数学と国語の問題集に社会の新聞の切り抜き、答えは無いから写す訳にもいかないし適当にやったらソウジ先生はまだましだけど天道先生とショウイチ先生には殺される……」

時間が無いはずなのにえらく冷静な思考のカズマだった。

カズマ「写させてもらおうにも皆貸してくんないし……まぁ、あんな風に言われたらなぁ」

それは夏休みが始まる前のこと

天道「お前ら、もし宿題を写し合ったりしたらケツライダーキックだからな、ちなみにするのは響鬼先生だ」

筋トレバカで有名な響鬼のキックである、生徒は皆青ざめる。

それでも何とか交渉するが……

「やだ、死にたくない」

「今夏海と遊園地にいるから無理だ」

「はっ…」ガチャ…プー…プー…

「ごめんなさい」

「スマン、あねさんに怒られる」

「すみません」

「うーん、ごめん、貸せないや」

「カ～ズ～マ？去年もそうだったよな？あ？」

「今立て込んでんだ！うお！？……か…かけてくんな！！」↑銃声らしき音

カズマ「……あいつは……何をやってんだ？」

とりあえず最後の会話が気になるカズマであった。

カズマ「って考えてる場合じゃねぇ！早くやらないと！！」

再び宿題に向き直る。

しばらくしてカズマは国語の宿題に移った。

カズマ「何なんだよ……作者の気持ちとか知るかよ」と愚痴をこぼす。

カズマ「古典とか訳わかんねぇよ!!」

頭抱えていると携帯電話が鳴った。

カズマ「……はい、もしもし?」

シンジ「おっ?カズマ?明日だけどさー……」

カズマ「うっせー!!お前なんか知るか!!」

楽しそうな声のシンジにキレるカズマであった。

シンジ「うお?!?何だ?」

何故怒鳴られたのか分からないのでシンジは首を傾げる。

カズマ「くそぉぉ……楽しそうにしやがって、くっ！もう２０時か、急がねぇと」

せめて２時までには寝たい、そう思いながら宿題を進める。

そして気づけば２：３０

ようやく宿題も終え、やっと寝られる、そう思いながら登校の準備をする。

そして一ヶ月強振りにカバンを開ける、するとカバンの中に一冊の冊子を見つける。

カズマ「ん？何だこれ」

その冊子を手に取るカズマ、そして思い出す、終業式の日のソウジの言葉を

ソウジ「いいか、皆にこれを配るぞ」

そう言って全員に冊子を配る。

士「なんだこれ？」

ソウジ「皆には日々の記録、つまり日記をかいてもらう」

「「「えぇぇぇ？」」」

ソウジ「はいはい、夏休みになるとダラダラした生活を送りがちだからな、記録することを前提にしたら充実した生活が出来るだろ」

「「「はーい」」」

ソウジ「始業式には提出だからな」

ということで配られた冊子をカズマはすっかり忘れていたのだ。

カズマ（@д@）

登校まで約七時間、カズマは虚ろな目で机に向かった。

日記を書き上げたのは七時過ぎ、寝坊するかもしれないので寝るわけにはいかない。

そして眠い目を擦りながら登校する。

カズマ「あ～今日は遅刻しないな」

そんな事を言っていると学園に着いた。
早めに出たためか周りには人はいなかった。

カズマ「あ…おはよーございます」

五代「うん、おはよう」

教室に向かう途中五代にすれ違ったので挨拶をする。

五代「あれ？カズマって部活入ってた？」

カズマ「え？入ってないですけど」
五代「じゃあ何で学校に？」

カズマ「何でって、始業式だし……」

五代「カズマ……今日はまだ夏休みだよ」

カズマ「……え？」

五代「終業式の日に言われたはずだよ、一学期の授業の繰り返え休日で、夏休み一日延びるって」

カズマ「……あ」

五代の言葉にフラッとするカズマ

五代「大丈夫？隈すごいよ」

カズマ「はい……じゃあ…帰ります」

五代「う…うん、気をつけて」

そのまま家に帰るカズマ、叫ぶ気力もなく、家に着くと一日中寝てしまい、夜には寝付けず、結局次の日には遅刻してしまうのだった。

カズマが家で寝ている頃

シンジ「ん～…出ないなカズマ」

カズマに電話をかけるシンジ

渡「どう？」

シンジ「ダメだ、あいつ出ない」

城戸「そっか、残念だな、せっかく皆で集まったのに」

本当の夏休み最後の今日、一組の全員は最後の日を楽しもうと集ま

っていた。

昨日のシンジの電話はこの集まりの誘いだったのだ。

士「おい、行くぞお前ら」

城戸「ああ」

渡「仕方ない、行こうか」

シンジ「そうだな、まったく、カズマめ」

こうして夏休みは終わった。

第二十六話如月弦太朗の初登場（仮）

弦太朗「俺が如月弦太朗だ！！」

賢吾「……知っているが？」

ユウキ「どうしたの？急に」

ここは天ノ川学園高等学校にあるとあるロッカーから空間の捻れにより繋がっている月面基地――『ラビットハッチ』、弦太朗達はラビットハッチで雑談していた。

弦太朗「いやぁ、なーんか急に言わなきゃいけない気がして」

賢吾「変な奴め」

弦太朗「うっせ、モヤシ」

賢吾「……時代遅れめ」ボソッ

弦太朗「んだと！？お前に分かんねえのか、このクールさが！」

賢吾「……はっ」

弦太朗「この野郎！！」

ユウキ「もう！いい加減にしなよ！怒るよ！！」

賢吾「むっ……」

弦太朗「ユウキ……」

ケンカする弦太朗と賢吾に仲裁に入るユウキ、流石の二人もユウキには逆らえずケンカを止める。

ユウキ「まったくもう、弦ちゃんもすぐケンカになったら友達作れないよ」

弦太朗「うっ？てかその言い方止めてくれ、それだと俺、友達いねぇ奴みたいだからよ」

ユウキ「え？違うの？この学校だと私と賢吾君くらいしか……」

弦太朗「それは現時点でだから！そのうち増えるから！あと俺友達千人いるから！」

賢吾「あれ本気だったのか？」

ユウキ「冗談かと思ってた」

弦太朗「お前らな……ったく、ツッコんでたら腹減ったぜ、何か食いもん無いのか」

ユウキ「んー？お菓子でもあったかな？」

弦太朗「おっ、ハンバーガーあるじゃねえか、いっただきー♪…あーん……」

賢吾「って、バガミール!?までそれはフードロイドだあああ!!」
弦太朗「ぐが!?硬っ!!」
賢吾「ヒビ入ったあああ!?どれだけ強いんだお前のアゴは!!」
弦太朗「紛らわしいもん置いとくなよな」
賢吾「見て分かれえええええええ!!…っ!?ゴホッゴホッ」
虚弱体質であるのに、大声でさけんだためかむせる賢吾
ユウキ「大丈夫!?」
賢吾「俺は大丈夫だ……それより、あのバカをどうにかしてくれ」
ユウキ「弦ちゃんは昔からああだからね～」
弦太朗「どうゆう意味だよ……」
ユウキ「どんなってそんな」
弦太朗「訳わかんねえよ、それより賢吾、お前ホント体弱えな」
賢吾「……サラッと傷をえぐるな、お前は」
弦太朗「よしっ!相棒がそんなんだとキマらねえからな!体鍛えてやるよ」
賢吾「誰がお前の相棒だ、キマらないってなんだ、そして何故体を鍛えなければならない」

弦太朗「よし行くぜ！」

賢吾「ホント話を聞かないなお前は！！」

ユウキ「待ってよ二人ともー！」

弦太朗はッコミを無視して賢吾を引っ張りラビットハッチを出ていき、ユウキは二人を追いかける。

しばらくして、三人はジャージに着替えて天ノ川学園のグラウンドに集合していた。

隼「邪魔なんだが……」

すぐ傍ではアメフト部が練習していて、部長の隼は顔を曇らせる。

弦太朗「大丈夫大丈夫、邪魔にならねえようにすっからよ」

隼「……頼むよ」

そう言って隼は練習に戻って行った。

弦太朗「よおし、まずは腹筋だ！」

賢吾「わざわざ外でやらなくても」

文句を言いながらもとりあえずはやるようだ。

弦太朗「せっかく天気がいいんだ！外に出なきゃもったいないだろ！」

確かに空は雲一つなく、透き通るようで太陽が眩しい。

ユウキ「じゃあ、私が足押さえるね」

弦太朗「んじゃ、いーち」

賢吾「はぁ……ふん！」

弦太朗に促され腹筋を始める賢吾

弦太朗「お、結構いけんじゃねえか、よし、にー……」

賢吾「ふんっ……はっ、これ…くらい……ふん！」

ユウキ「頑張って！」

弦太朗「おし！さーん……」

賢吾「ふん！……ぐっ、ぐぬぬぬ！！…っぷは！はぁ…はぁ…」

弦太朗「おいおい、もう終わりかよ？」

三回目で力尽きた賢吾に呆れる弦太朗

賢吾「そんなに…言うなら……お前がやって……みろ」

弦太朗「はん、やってやろうじゃねえか、ユウキ、足押さえてくれ」

ユウキ「うん」

弦太朗「うし、行くぜ！うおおおおおおお！！」

賢吾「な！？」

ユウキ「すごーい！」

勢いよく腹筋する弦太朗に絶句する賢吾に感嘆するユウキ

弦太朗「どーよ！」

賢吾「ふ…ふん！脳筋には簡単だろうな！」

弦太朗「てめえまた！……今は我慢してやる、次はマラソンだ！」

賢吾「まだやるのか……」

さらに続けようとする弦太朗に賢吾はうなだれる。と言っても腹筋三回しただけなのだが。

弦太朗「おら座ってねえで立て！」

座り込む賢吾を無理矢理立たせる弦太朗、そのまま三人で天ノ川学園の外に出る。

賢吾「ゼハッ……ブハッ……」

弦太朗「軽く１０～２０ｋｍ走っただけだぜ？」

死に体な賢吾に再度呆れる弦太朗

ユウキ「もう、あんまり無茶させちゃダメだよ」

弦太朗「ユウキは元気だな」

ユウキ「まあね」

賢吾「ユウキちゃんにすら負けるのか……」

弦太朗「き…気にすんなって」

ユウキに負け、落ち込む賢吾に同情する弦太朗であった。

ユウキ「そうだよ、腹筋三回しか出来なくて、持久力もなくて、無愛想で実際私と弦ちゃんくらいしかちゃんとお話しできるような友達がいないコミュニケーション能力破綻者でも、授業サボり過ぎて先生に睨まれてても、酷い振り方して女子達から陰口叩かれても、それでも結構モテるから男子からも目の敵にされても賢吾君は大丈

夫だよ！……ってあれ？」

賢吾「……」

ユウキに散々に言われ、いわゆる「もうライフはゼロよ！！」状態の賢吾であった。

そしてその様子を見て弦太朗は……

弦太朗「ユウキ……お前が悪魔か……」

と呟くのであった。

第二十六話如月弦太朗の初登場（仮）（後書き）

とりあえず一話放送から一週間以内に書けました。

賢吾は虚弱にし過ぎましたかね？ただ体力ないみたいな感じになりましたが。

あと何故かユウキちゃんは天然毒舌になってしまいました。

友人とフォーゼについて話していたのですが、その友人はＣＧの乱用は嫌いなようで、ＣＧが多くなりそうなフォーゼはちょっと……って感じですね。

まあ面白いから見るとは言っていました。

もちろん自分も続きが楽しみです。

評判はイマイチですが今後に期待です。

第二十七話フリーターと人生設計的な

カズマ「あーもうこんな季節か」

光写真館に遊びに来ていたカズマとシンジ、不意にカズマが呟く。

ユウスケ「何が？」

カズマ「就職」

シンジ「あぁ、高校生の」

ユウスケ「？」

カズマ「九月から高校生の就活が始まるんだ、うちも募集してるからな」

シンジ「こっちも来週面接に来るよ」

ユウスケ「へぇ」

カズマ「でさ、ユウスケ」

ユウスケ「何？」

カズマ「お前、仕事ってどうしてんの？」

ユウスケ「仕事？バイトしてるけど」

シンジ「お前なぁ、バイトじゃマズイだろ」

ユウスケ「いや、でも……」

シンジ「でも、じゃないだろ」

カズマ「うんうん」

社会人、片や社長である二人はユウスケを心配する。

士「ま、ユウスケはヒモだしな」

夏海「ヒモって……最低です、ユウスケ」

別の机で作業していた士と夏海、一段落したようで会話に入る。

ユウスケ「俺、ヒモ！？」

士「いや、そうだろ、何かあれば八代藍を頼るし、泊まりにいっても飯代も光熱費も出さねえし」

ユウスケ「うっ……そ…そう言う士だって居候のバイトじゃないか」

士「……待ってろ」

そう言って部屋を出る士、しばらくすると何かを持って戻って来た。

士「ほら」

持って来たものをユウスケに見せる。

ユウスケ「通帳？……！？ゼロが七個！？」

通帳の金額を見て驚愕するユウスケ

シンジ「スゲェ！！」

カズマ「いつの間に」

士「爺さんに現像代つけるのもあれだからな、しばらく前に株をやってみたら上手くいった、もちろん生活費諸々も出してる」

カズマ「株かぁ、株は慣れてないとな……流石はチーズか」

最近始めたと聞いて株に詳しいカズマは関心する。

夏海「それでこの前ネックレスプレゼントされちゃいました♪」

士「たまにはな」

「えへへ♪」と笑う夏海、他の三人からすればノロケでしか無いが。

シンジ「……株じゃないけど天道さんもＦＸで稼いでんだっけ？」

カズマ「あれ?会社立ち上げたって聞いたけど、ソフトかなんか作る」

士「他の奴はいいだろ、それよりも今はユウスケだ、八代はユウスケに甘いんだか厳しいんだか……結局は甘やかすんだが……何とかした方がいいんじゃないか」

夏海「そうです、ヒモは駄目ですよ」

ユウスケ「そう言われても……」

二人にそう言われカズマをチラ見するユウスケ

カズマ「……言っとくけど身内だからって雇わないからな、雇って欲しかったら入社試験受けろ」

ユウスケ「うぇーい……」

シンジ「しかし、ユウスケの仕事か……」

「「「うーん」」」

全員唸って考える辺りやはり仲間想いの面子である。

シンジ「ユウスケなら自衛官とかどうだ?」

夏海「だったらいっそのこと警察になれば」

ユウスケ「警察かぁ……」

士「なるにしても養成学校に入らねぇとな」

シンジ「そう言えばユウスケって成績はどんな感じなんだ？」

ユウスケ「高校の時は真ん中よりちょい上くらい」

シンジ「成績は普通、身体能力は申し分ない……ガテン系？」

ユウスケ「いや、流石に」

シンジ「だよなぁ」

ユウスケ「……皆一緒に考えてくれてありがとう……やっぱさ、自分のことだから、時間かかるかもしれないけど、しっかり考えたいんだ……だから」

シンジ「……ん」

カズマ「だな」

士「ふん」

夏海「ですね」

ユウスケの言葉にそれぞれ頷く四人。

その日は解散になり、後日ユウスケは警察官養成学校のパンフレットを取り寄せ、士をはじめとした秀才組や一条達に頭を下げ、しごかれるのであった。

第二十八話泥棒と暴走と涙

翔太朗「Ｚｚｚ……」

鳴海探偵事務所、翔太朗は椅子で居眠りをしていた。

とそこに

天道「左いいいい！！」

ドアを蹴破って天道が入り込んできた。

翔太朗「あで！な…何だ！？……って天道？」

驚いた翔太朗は椅子から落ち、辺りを見渡す。

天道「左！貴様は探偵だったな！？」

翔太朗「お…おう」

詰めよる天道に翔太朗は後退りする。

照井「左、いるか？」

城戸「よう」

侑斗「……」

そうしていると照井、城戸、侑斗がやって来た。

翔太朗「照井……城戸に桜井も、珍しいな」

翔太朗の言う通りこの三人の組み合わせはとても珍しい。

天道「そんな事よりも左！力を貸せ！！」

翔太朗「だ…だから何なんだよ！」

城戸「天道、落ち着けって、照井頼む」

天道「むう……」

照井「ああ」

翔太朗「で、何なんだ」

照井「左、最近窃盗事件が起こっているのは知っているか」

翔太朗「窃盗？……ああ、聞いたぜ、下着泥棒が出たってな」

ここ数日街では下着泥棒が多発していて、翔太朗もウォッチャマンから話は聞いていた。

照井「それで、お前の方で何か掴んでいるか？」

翔太朗「いや何も、そもそも俺は…」

天道「探偵だったら情報くらい掴んでおけ！！」

翔太朗「……探偵だから依頼がなけりゃ何も出来ねぇって言おうとしたんだよ……で、照井は分かるがお前らは何のようだ？」

興奮している天道は適当に流す翔太朗、事件が起きた際に協力することがあるので照井が訪れたのは分かるが他の連中は理由がよく分からないので尋ねる。

城戸「俺は…まあその何だ、美穂が被害にあってな」

照井「今日来たのも所長もやられて怒り心頭なもので」

天道「……」イライラ

翔太朗「そっちのイライラしてんのは？」

城戸「樹花ちゃんとひよりちゃんが……な」

侑斗「……」ギリギリ

翔太朗「んでそっちのギリギリしてんのは？」

照井「愛理さんが」

翔太朗「……よし、じゃあ依頼ってことでいいんだな？」

城戸「ああ、今回は俺達四人の依頼だ」

照井「では早速フィリップに……」

翔太朗「フィリップならいないぜ」

照井「何？いないのか？」

翔太朗「ああ、何か宇宙がどうとか言って出ていった」

城戸「宇宙って……それ二～三日じゃおわらねえよな」

照井「仕方ない、地道に捜査するしかないな」

ため息を吐く照井

翔太朗「それが探偵ってもんだ」

帽子を被り、翔太朗は外に出る用意をする。

照井「ふむ、警官も同じだ」

翔太朗「よし行くぜ」

そう言って五人は事務所を出ていった。

―――――――――――

調査は自分の足で、が心情の翔太朗、老若男女様々な人に聞き込みをする。

その間天道と侑斗は犯人を探すために血眼になって奔走していた。

城戸「なー、あいつら過去に行って犯人捕まえればいいんじゃねえの？」

翔太朗「話終わるから！！」

と、元も子もないことを言う城戸に翔太朗は激しくツッコむ。

場所は花鶏、休憩ということで二人は訪れていた。照井は仕事があるので戻った。

優衣「どう？何か分かった？」

仕事をしていた優衣が会話に加わる。

城戸「そう言えば優衣ちゃんも盗まれたんだっけ？下着」

優衣「う…うん」

流石に面と言われたら恥ずかしいのか顔を赤らめる優衣

翔太朗「どうしたもんだか」

剣崎「……水くれー」

翔太朗が考えていると何故かボロボロの剣崎がやって来た。

翔太朗「どうした剣崎？」

城戸「何があった？」

優衣「剣崎君、お水どうぞ」

剣崎「ありがとう優衣ちゃん」

水を飲み干し一息つく剣崎、翔太朗が何があったのか尋ねる。

翔太朗「で、何があった？」

剣崎「いや、ちょっと始と闘ってた」

城戸「何だそれ！？」

結構な事をサラッという剣崎にツッコむ城戸

剣崎「実は天音ちゃんがさ、例の下着ドロにやられたらしくて、それにぶちギレて暴走する始を橘さんと抑えてたんだよ」

翔太朗「そ…そうか」

城戸「そりゃ大変だったな」

剣崎「お前らは何してたんだ？」

翔太朗「城戸達に依頼されて、その調査さ」

剣崎「城戸が？」

城戸「ああ、美穂がな」

剣崎「ああ」
何となく察した剣崎、相づちを打ちながら翔太朗が調査結果を纏めた手帳を覗く。

剣崎「って多いなおい？」

翔太朗達の調査で分かったのは被害件数は約７０件、個人での調査と、恥ずかしさからの未通報で被害者はまだまだいるだろう。

翔太朗「それにしても、犯人どんだけ変態だよ」

城戸「……でも下着なんて盗んでどうすんだ？」

剣崎「どうするって……何がだ？」

城戸「え？だって下着履くのに他人のなんて汚いじゃん、しかも女の人のなんて」

さも当たり前だろう、といった風に言う城戸

翔太朗「いや、城戸……そこは、ほら……性…癖っていうかなんていうか」

城戸「ん？下着は履く以外に使い方あるのか？」

剣崎「えー…あー…優衣ちゃんパス」

優衣「えぇぇ！？私！？」

城戸「優衣ちゃん知ってるの？」

優衣「あ…あう…あ」

まさかこのようなことを聞かれるとは思わなかったので対応に困る優衣であった。

剣崎「純粋なのかバカなのか」

翔太朗「後者だろ」

剣崎「そだな、おい城戸、話戻すぞ」

城戸「ん？ああ……」

優衣「ほっ……」

結局分からないままなので不完全燃焼な城戸、優衣それ以上追求されずにホッとする。

翔太朗「さて、さっさと見つけねぇと」

城戸「美穂も盗られてから機嫌悪いんだよなあ……」

翔太朗「それ以前に暴走する奴が多いんだよな」

剣崎「あー確かに、始……」

城戸「あと天道とか桜井がな……」

翔太朗「神崎も荒れてたな」

どうも強者の部類に入る者達が暴走しているため顔をひきつらせる三人

剣崎「あれ？」

翔太朗「どうした？」

剣崎「いや思ったんだけどさ、盗まれたのってパンツだけなんだな」

城翔「「パンツ？」」

確かに手帳に書かれている被害の詳細にはパンツしか記述されていない。

城戸「パンツ……」

翔太朗「パン……ツ」

剣崎「パンツか……」

三人「「「……」」」

三人「「「映司ぃぃぃぃぃ！？」」」

優衣「きゃっ！？」

三人の頭に浮かんだのはパンツ好きで有名な映司であった。

翔太朗「いやまさか」

剣崎「でも可能性はゼロとは……」

城戸「と…とにかく確認しに行くか？」

翔太朗「あ…ああ」

剣崎「そうだな」

まさか映司が？とは思いながらも事実を確認するためクスクシエに三人は向かう。

―――――――――――

映司「ふぅ……今日もいい天気だなぁ」

町内会の決まりで掃き掃除をしていた映司、青空を見上げ伸びをする。

映司「ん～」

翔太朗「映司！」

映司「え？翔太朗？城戸さんに剣崎さんも」

そうしていると翔太朗達がやって来た。

城戸「映司、ちょっときたいんだが」

城戸はそれとなく映司に尋ねる。

映司「え！俺疑われてるの！？」

翔太朗「い…いや、そうゆう訳じゃ」

説明を終えると自分が疑われていることに驚く映司、翔太朗はそんな映司をなだめる。

映司「確かにパンツは大事なものだけど盗んだりしないからね！しかも女の人のなんて！！」

剣崎「分かってるって」

よくよく考えれば映司がそんな事をするような人物だと分かるので正直無駄足な三人であった。

城戸「これからどうする？」

映司「あ、俺も手伝いましょうか？」

翔太朗「いや、一般人に手伝ってもらう訳には……」

城戸「頼むよ、人手は多い方がいいし」

翔太朗「おい！！」

剣崎「細かいことは気にすんなって」

翔太朗「お前らな……」

映司「じゃあ頼むね」

渋る翔太朗を尻目に映司はタカカンを起動させる。

城戸「じゃあまた地道に犯人探すか」

そう言って四人は犯人探しを再開する。

比奈「映司君？」

映司「ひ…比奈ちゃん？」

すると黒いオーラを出しいかにも不機嫌な比奈がクスクシエから出てきた。

比奈「お仕事…サボる気？」

映司「いや！そうゆう訳じゃ！」

翔太朗（おい！何であんな不機嫌なんだ！？）

映司（比奈ちゃんも被害にあったんだ）

城戸（それで……）

比奈「どうかしたんですか映司君？」

映司「い…今から皆で下着泥棒探しをするところだったんだよ」

比奈「そうなんですか？」

映司「うん」

比奈「だったら早く捕まえて下さい！恐いんだから！！」

と、涙目で訴える比奈

剣崎（どうしたんだ比奈ちゃん？）

映司（比奈ちゃんのマンション結構高いのに泥棒に盗まれたから不安らしいんです）

翔太朗（それは恐いだろうな）

比奈「うぅぅぅ」

四人「「「……」」」

目の前で悲しんでいる人がいて、考えを改める四人

映司「比奈ちゃん、大丈夫、俺達が必ず捕まえるから」

比奈「映司君……」

映司「だから泣かないで」

比奈「……うん」

翔太朗「うし！そろそろ本腰入れるか」

城戸「ああ」

剣崎「お、タカカンが帰ってきた」

城戸「何か分かったのか？」

映司「じゃあ行ってくるよ」

比奈「行ってらっしゃい！」

――――――――――――

剣崎「て、訳でタカカンに連れられて来たんだけど」

四人がやって来たのはとある一軒家、見た限りでは不審な点は無い。

どうしようかと悩んでいると……

男「よっ…と」

いかにも泥棒という風貌の男が塀を乗り越えて出てきた。

四人「「「……」」」

城戸「……おい」

翔太朗「……おう」

剣崎「行くか」

映司「はい」

呆ける四人だったが直ぐに気を取り直し犯人確保に向かう。

それからは早かった。ただのコソドロとこの四人ではあまりに実力が違いすぎ、男は何も出来ずに御用となった。

――――――――――

照井「ご苦労だった、左」

翔太朗「いや、俺は依頼をこなしただけさ」

犯人を捕まえた後は照井を呼び受け渡す。

連行する際に天道達暴走組が犯人を絞めに来たが見殺しにする訳にもいかないので警察ライダーＶＳ暴走ライダーのライダー大戦が起こったとか起こってないとか。

映司「はい比奈ちゃん」

比奈「なにこれ？」

犯人が捕まり数日経ったある日、比奈は映司から紙袋を受け取る。

映司「プレゼントだよ」

プレゼントだと言われ比奈は早速開けてみる。

比奈「ななな何これ！？」

紙袋の中身は一般女性なら一生手にすることもない「ピー」な下着だった。

映司「この前盗まれたのは全部処分するって言ってたから、知り合いに頼んで用意してもらったんだ、もちろんその知り合いは女性だから」

比奈「いや、そうじゃなくて！」

知世子「あらあら、映司君も大胆ねぇ」

様子を見ていた知世子が茶々をいれる。

映司「どうかな？」

ニヤニヤと笑う知世子に対しニコニコと笑う映司、その笑顔からは善意しか感じられない。
むしろその善意が比奈にとっては余計なものでしかないのだが。
（まず女性に下着をプレゼントする時点で問題なのだが映司は全く気にしていない。）

比奈「あ…ありがとう……映司君」

映司「うん」

突き返す訳にもいかないので苦笑いで受け取る比奈、その日は家で顔を赤くしているのを信吾に不審がられるのであった。

～おまけ～

照井「で、何故下着を盗んだりした？」

署に戻った照井は男の取り調べをしていた。

男「何故って言われても……ちょっと魔が指したんっすよ」

照井「……ただ盗むだけでなく子供のものを盗んだり、高層マンションに侵入したり、よくやるものだ」

男「美女、美少女のためなら火の中、水の中ってね！そこに下着があるならどこだって！」

真倉「なんて男らしい！」

照井「真倉刑事？」

真倉「す…すみません」

と、男の妙なノリで取り調べは進まないでいた。

第二十九話ある嵐の日の兄弟

台風が近づき強風で大雨の今日、ソウジは妹のマユを学校まで迎えに来ていた。

ソウジ「災難だったな、帰る頃になって急に強くなって」

マユ「うん、お兄ちゃんが来てくれ無かったらびしょ濡れだったよ」

雨風がとても強く傘だけでは心許ないので二人はソウジが持って来ていたカッパを着ている。

ソウジ「今日はお客は来ないだろうな」

マユ「そうだね……あれ？」

ソウジ「ん？どうしたマユ」

マユ「お兄ちゃん、あそこ……」

そう言ってマユはある方向を指差す、ソウジは指が差す先を見てみる。そこは薄暗い高架下

ソウジ「あれは……矢車君に影山君？」

マユが見つけたもの、それは座り込む地獄兄弟だった。

影山「兄貴……寒いよ」

矢車「俺達にはこのくらいがいいんだ……ぬくもりを求めるな」

二人とも雨に濡れていて少し体を震わせていた。

ソウジ「君たち」

何を思ったかソウジは兄弟に話しかける。

矢車「お前は……カブトの」

影山「何か用か……？」

あまり身内以外には気を許さない二人、ソウジに対し睨みを利かせる。

ソウジ「そう邪険にしないでくれ」

マユ「大丈夫ですか？」

寒そうにしているのを心配してマユも声をかける。

矢車「ふっ…闇に生きる俺達にはこれが合っているんだ」

心配する二人を気にしないように矢車はそう返す。

ソウジ「……君たち」

矢影「「？」」

ソウジ「来なさい」

矢影「「は？」」

突然の一言に呆ける二人

ソウジ「さあ」

影山「お…おい！」

矢車「何を！」

ソウジは問答無用とばかりに二人の腕を引っ張り立ち上がらせる。

二人「「離せ！」」

ソウジ「まあまあ」

そうして二人をどこかへ連れていく。

おばあちゃん「おや、お帰り」

ソウジ「ただいま」

マユ「ただいまー」

矢影「「……」」

おばあちゃん「おや？お客かい？」

ソウジに連れられた矢車と影山をみて尋ねるおばあちゃん

二人が連れて来られたのはソウジとマユの実家の天堂屋だった。

ソウジ「いや、友人だよ」

おばあちゃん「そうかい……と、びしょ濡れじゃないか、風呂わかしてあるから入ってきな」

そう言って二人の背中を押すおばあちゃん、矢車も影山もおばあちゃんのペースに逆らえず、お風呂場に連れていかれる。

カポーン

影山「兄貴……」

矢車「……何だ」

影山「何で俺達風呂入ってんの？」

矢車「知るか」

影山「う…うん」

おばあちゃん『着替え置いとくよ』

矢車「……」

影山「……」

カポーン

矢車「……出た…ぞ」

影山「……」

しばらくして風呂を出た矢車と影山、ソウジの服を借り、久しぶりにまともな格好の二人だった。

おばあちゃん「座りな」

居間に通され全員で机を囲む。
マユは勉強のため別室にいる。

ソウジ「緑茶でよかったかい？」

矢車「……」

影山「……」

ソウジがお茶を入れるが二人は反応を示さない。

おばあちゃん「いるか、いらないか、どっちか言いな」

矢車「……もらおう」

黙っていた矢車だったがおばあちゃんの問いにしぶしぶ答える。

その後は特に誰も口を開かず、地獄兄弟には居心地の悪い時間が過ぎていった。

夕食時、机の上にはおでんは置かれていた。

元々営業用だったのだが、台風で客足がまったく無かったので、そのまま夕食になったのだ。

おばソウマユ「「「いただきます」」」

矢車「……いただき…ます」

影山「……いただきます」

全員でいただきますをしてから夕食を食べる。

矢影「「……」」

ソウジ「……どうした？」

ソウジ達が食べるなか、矢車と影山の箸はまったく進んでいなかった。

影山「俺達には……こんなもの食べられない」

ソウジ「こんなもの……だと？なにを……」

影山の一言にソウジが反応する。

おばあちゃん「ソウジ」

ソウジ「おばあちゃん……」

問いだたそうとするソウジをおばあちゃんが諫める。

矢車「こんな……こんな『愛』が詰まっている料理……俺達には食べられない」

ソウジ「……」

矢車達には食べられ無かった。
気付いたのだ、このおでんは食べる人の事を想っておばあちゃんが作っていると。
自らを闇の住人と名乗っている矢車と影山、故に『想い』なるものには過剰に反応する。

闇の住人故に『愛』が込められたこのおでんを食べるわけにはいかないと。
おばあちゃん「ぐたぐだ言ってんじゃないよ、さっさとお食べ」

矢車達の考えなどどこ吹く風、おばあちゃんはおでんを食べるよう促す。

矢車「むっ…俺達は……」

おばあちゃん「なんだい?私のおでんが食べられないのかい?乾の犬ッコロじゃあるまいし」

ソウジ（おばあちゃん、どこの酔っ払いですか……）

矢車「……」

おばあちゃんの気迫に押されてか、そっと大根を口に運ぶ、影山も

矢車に習い卵を食べる。

よく噛みしめた後、二人は堰をきったかのようにおでんを食べ出した。

おばあちゃん「ゆっくり食べな」

そんな二人は見ておばあちゃんはそう呟く。

その日はそのまま天堂屋に泊まった矢車と影山、翌朝には脱ぎ散らかされた服とともに『美味かった』と書かれた書き置きが残されていた。

ソウジ「はは♪」

その書き置きを見て不意にソウジは笑っていた。

それから時折天堂屋には妙な身なりの二人の男の姿が見られようになったとか。

ライダー学園物語～行ってみよう宇宙！～

フィリップ「さて、授業を始めようか……紅渡」

三年一組の授業にやって来たフィリップは渡に号令を促す。

渡「起り……」

賢吾「いや待てぇぇ！！」

渡が号令をしようとすると賢吾の横やりが入る。

フィリップ「何だい、歌星賢吾？」

賢吾「何故『ここ』でする！？」

今、フィリップ達がいるのは三年一組の教室ではなく、賢吾が所有するラビットハッチだった。

丁寧に机と椅子まで持ち込んでいる。

城戸「スゲェ！地球が見える！！」

カズマ「おっ！宇宙服もある！」

剣崎「なあ賢吾、どうやって外に出るんだ？」

士「……」↑フォーゼのライダーカード構える

それでもじっとしていられない連中はラビットハッチ内を漁っていた。

賢吾「とりあえず……宇宙服を着るな！名前を呼ぶな！ハッチを開けようとするな！スイッチを弄るな！パソコンに触るな！バガミールで遊ぶな！重力制御装置を切るな！何故フォーゼのカードを持っている！！」

一々ツッコむのが面倒くさいのか一気にツッコむ。

フィリップ「ちょうど宇宙の内容に入ったからね、こんな素晴らしいものがあるんだ利用しなかったら勿体無いだろう」

賢吾がツッコミ終えるのを待ってさも当たり前のように説明するフィリップ

賢吾「だからと言って勝手にいいい！？」

文句を言おうとした賢吾だったが突然体が宙に浮く。

賢吾「って乾いいい！！」

巧「おおう？！？」

辺りを見渡すと巧が重力制御装置のスイッチを切っていた。

映司「浮いたぁぁぁ！？」

良太郎「い…痛いっ！」

やはり賢吾以外は無重力など経験したことが無いので慌てふためく。

その中でも良太郎は頭をぶつけていた。

士「よっ！」

剣崎「楽しいなこれ！」

始めは驚いていたが運動神経がいい者はすぐに適応している。

フィリップ「じゃあそのままいいから授業を始めよう」

タクミ「あ、いいんだ」

フィリップ「まずは……如月弦太朗、フォーゼに変身して外に出てくれるかい」

弦太朗「おう！いいぜ！」

特に疑問に思わず弦太朗はフォーゼに変身して宇宙空間に出る。

フォーゼ「で？俺は何すればいいんだ？」

レーダーを起動してラビットハッチと通信する。

フィリップ「では、ロケットスイッチを起動して飛行してくれ」

フォーゼ「おう！」

フィリップに言われた通りにロケットを起動したフォーゼ、大分地球に近づいた所で再びフィリップから通信が来た。

フィリップ「その辺りで静止してくれ」

フォーゼ「なぁ、そろそろ何するか教えてくれよ」

フィリップ「ああ、もう少しだ……僕の計算が正しければ……」

フォーゼ「え？なんだっ…「シュッ！」……？」語尾が小さく、聞こえなかったので聞き返そうとしたフォーゼ、しかし顔とレーダーモジュールの間を何かが通り過ぎた。

フォーゼ「へ？なんダボラッ！？」

通り過ぎた先を見るフォーゼ、しかし顔を向けた瞬間後頭部に衝撃が走る。

フォーゼ「ななななな何だ！！」

振り返り衝撃の正体を確認しようとする。

フォーゼ「のわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

そこで見えたのは、大量のネジや破片等の飛来物――スペースデブリだ。

フォーゼ「ゲフッ！ダハッ！ブホッ！」

賢吾「フォーゼドライバーぁぁぁぁぁ！！」

ユウスケ「いや！弦太朗の心配してやれよ！！」

デブリに襲われるフォーゼもとい弦太朗よりもフォーゼドライバーを心配する賢吾であった。

弦太朗「ししし死ぬかと思ったぜ……」

賢吾「ドライバーは……ほっ、無事だ」

ユウスケ「いやだから……」

その後、何とか戻って来た弦太朗、息も絶え絶えである。

フィリップ「今、如月弦太朗が被害にあったのはスペースデブリ、人工衛星やスペースシャトルなどの破片、言わばゴミだね、約秒速７～８Ｋｍで飛び５ｍｍもあれば大砲と同等の威力がある」

剣崎「あんた鬼か！！」

しれっと解説するフィリップに剣崎が激しく突っ込む。

フィリップ「しかしフォーゼにデブリに耐えられる耐久力があってよかったよ、もし耐えきれなくなったらそれこそ……ふふふ」

「「「……」」」

フィリップの黒い笑いに全員が沈黙する。

弦太朗「……」ガタガタ

弦太朗に至っては体が震えていた。

フィリップ「今日はここまででいいか、とりあえず宇宙には危険がいっぱいだから気をつけるように」

それだけ言うとフィリップはラビットハッチを出ていった。

弦太朗「……」

賢吾「……昼食…おごるよ」

弦太朗「……ああ」

少しだけ距離が縮まった弦太朗と賢吾であった。

第三十話秋と言えば……

津上「はーい、焼けたよ」

そう言って津上は新聞紙に包まれたサツマイモを火バサミ持ち上げる。

今日は美杉家の庭で津上が育ててサツマイモでの焼き芋パーティーだ。

五代「ホクホクだー♪」

天道「ふむ、焼き具合、下ごしらえも完璧……流石だな」

タクミ「モグ……石焼きって、本格的ですね」

士「俺としては固体よりも液体の方が……」

ユウスケ「おい」

剣崎「しっかし、いいのか？こんなに食べちゃって」

現時点でかなりの量を食べている。

流石に食い過ぎか？と思うが……

津上「いいよいいよ、今年は豊作だし、ほら……」

そう言って津上は家の方を指差す。

真魚「芋は……」

義彦「もう……」

太一「嫌……」

既に大量の芋の処理をさせられているため、もう見るのも嫌な真魚と美杉親子であった。

城戸「うわ」

津上「まだまだあるからいっぱい食べてね」

剣崎「ありすぎだろ」

そうは言いながらもやはり味がいいため全員焼けたものから次々とかぶりつく。

そんな中巧は一生懸命焼き芋を冷ましていた。

津上「たっくん」

巧「たっくん言うな」

そんな巧の様子を見て津上は笑顔で話しかける。

津上「はいこれ」

巧「……何だこれ？」

津上が巧に出したのはサツマイモで作った茶巾絞りだった。

津上「茶巾絞り、たっくん熱いのダメだから作ってみたんだ」

巧「……いただきます」

津上「どう？」

巧「……美味い」

津上「よかった、他にもタルトとかケーキもあるから皆も食べてね」

「「「はーい」」」

斗真「翔一、スウィートポテトをもう一つくれ」

ダグバ「僕、タルト」

お代わりを所望する斗真――もとい闇の力、とダグバの回りには既に大量の紙皿が重ねられていた。

カズマ「お前ら食い過ぎだー！？」

津上「はいはい」

シンジ「また大量のお代わりが！？」

斗真「フッホば、ホウイヒ（グッドだ、翔一）」

ユウスケ「大はまりだな」

渡「もういいかな？」

良太郎「そうだね……ヘブ！？」

渡「良太郎君！？」

翔太郎「誰だ！？栗入れたの！」

三人が火の様子を見ていると何故か火の中に入っていた栗が弾け、良太郎に襲う。

カズマ「え？栗ってダメなのか？」

士「アホッ！！何で焼いた！？」

カズマ「栗美味いじゃん

城戸「カズマ？栗……どんくらい入れた？」

カズマ「えっと……結構？」

「「「……」」」

カズマ「……」

「「「逃げろぉぉぉぉぉぉぉぉっ！！」」」

パッン！パパンッ！！

全員が走り出した瞬間、栗が弾け飛ぶ。

良太郎「うわぁぁぁぁぁぁぁ！？」

カズマ「のわぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

先ず真っ先に逃げ遅れた良太郎と、シンジとユウスケに蹴り飛ばされたカズマが被害に会う。

渡「良太郎くぅぅぅん！？」

翔太郎「自業自得だカズマ！！」

心配するも逃げる渡、とりあえずカズマを罵倒する翔太郎であった。

ショウイチ「おら働け」

カズマ「ウェーイ……」

真魚「少し染みますよ」

良太郎「痛たたた」

騒ぎが収まった後はお開きとなり、全員で片付けになった。

良太郎は真魚に治療してもらい、カズマはコキ使われる。

巧「……美味い」

斗真「ふむ、翔一、今度はマロンケーキを作ってくれ」

ダグバ「だったら甘栗もー」

アスム「いや手伝ってくださいよ」

津上「はいはい」

と、妙に津上のお菓子にはまった巧と終始マイペースな二人であった。

第三十一話カザリ、学校に行く（前書き）

大分間が空いてすみません。

ついでに言うとあれなのですが一つお知らせがあります。

諸事情により小説に割ける時間をとることが難しくなりました。

そのためしばらくの間休載したいと思います。

順調に行けば二月には再開出来ると思いますので御了承ください。

第三十一話カザリ、学校に行く

カザリ「ちっ！遅刻だー！」

早朝の真木邸にカザリの声が響く。

メズール「全く、二度寝なんてするから」

エプロンを付けたメズールは呆れた様子で声をかける。

カザリ「ご飯いいから！」

メズール「待ちなさいカザリ、おにぎり握っておいたから持って行きなさい」

カザリ「ありがとう！行ってきます！」

おにぎりの入った包みを受け取るカザリは青い学生服――天ノ川学園高校の制服を着ていた。

ＪＫ「ヨッス！カザリ」

カザリ「おはよ、ＪＫ」
天ノ川学園の近くに来た辺りでＪＫと会い、そのまま一緒に登校する。

ＪＫ「そういやカザリが来てそろそろ半年だっけか？」

不意にＪＫが言う。

カザリ「そうだね」

カザリが天ノ川学園に通い始め、半年が経とうとしていた。

何故カザリが天ノ川学園に通っているかと言うとまた半年程さかのぼる。

ある日夕食の買い出しに出ていたカザリとウヴァ、その途中楽しそうに会話しながら歩く学生の集団とすれ違う。

カザリ「……いいなぁ」

ウヴァ「……」

学生の集団を見てカザリは無意識に呟く。

カザリは聞かれていないと思っていたがウヴァはしっかりと聞いていた。

ウヴァはそのことをメズールに話し、その後何故か話が鴻上にまで伝わり

鴻上「グリードであるカザリくんが青春を求める、素晴らしいっ！！」

ということで鴻上が色々と根回し―と言う程でもないが―をしてカザリが学校に通える様に手配した。

最初は遠慮していたカザリだが、学校に行ってみたい気持ちが強く結局折れて鴻上が用意してくれた制服で天ノ川学園に通うことになった。

ＪＫ「なぁカザリ、たまにはパーティーに来てくれよぉ、お前呼んでほしいって娘が多くてさ」

カザリ「い…いいよ、僕そうゆうの苦手だから」

ＪＫの誘いを断るカザリ、見た目で勘違いされやすいがカザリはいわゆる遊び人というカテゴリーではない。

むしろ苦手意識を持つくらいだ。

ＪＫ「ちぇ、まぁ気が向いたら来てくれよ」

カザリ「うん分かった」

ＪＫも無理強いはせず大人しく引き下がる。
そうしている内に二人は学校に着いた。

―――――――――――

授業とか何やかんやありまして

―――――――――――

昼休みになり、弁当を広げる生徒、食堂、購買に向かう生徒がいる中で、カザリとＪＫは食堂に向かっていた。

ＪＫ「昼飯だー！」

カザリ「色々と飛ばしすぎじゃない？」

ＪＫ「いいんだよ、授業風景とかどうせつまんねえし」

カザリ「いやいや」

ＪＫ「おっ、弦太朗さーん！」

食堂で弦太朗を見つけたＪＫはそちらに向かい、カザリはその後を追う。

弦太朗「よう！ＪＫ、カザリ！」

ユウキ「ヤッホー」

ＪＫ「どもっす！」

カザリ「やあ」

弦太朗「お前らも飯か」

ＪＫ「はい！……って歌星先輩は？」

弦太朗達を見かけやって来たのだが賢吾だけいなかった。
いつも三人で行動しているので不思議に思い尋ねる。

弦太朗「……」

尋ねられた弦太朗は何故かばつが悪い様子

代わりにユウキが答える。

ユウキ「実はさっき体育だったんだけど……」

弦太朗『おら！』

『わっ！？』

弦太朗『よっし！一人目！』

今日の二年Ｂ組の体育はドッジボールであった。

じゃん拳で２チームに別れ試合を始めるのだが早々にボールを確保した弦太朗は瞬時に相手チームの一人をアウトにする。

賢吾『まずあのバカを落とせ！あいつさえいなければ後は雑兵だ！』

弦太朗とは別のチームの賢吾、チームの指揮を取り力押しの弦太朗に対抗する。

弦太朗のチームが個々で好き勝手にプレーするのに対し賢吾のチームは賢吾の指揮の下、統率の取れたプレーをする。

ユウキ『皆頑張れー！』

いつの間にかアウトになっていたユウキは離れて応援する。

しばらくの間は拮抗した状況だったのだが弦太朗がボールを取り、正面に体制が崩れかけている賢吾

絶好の機会とボールを投げる弦太朗、しかし……

賢吾『へぶっ！？』

弦太朗『あ……』

ユウキ『うわぁ……』

グチャ、という擬音が聞こえてきそうなほど勢いよくぶつかるボール

当たったのが胴体か手足ならばまだよかった、しかし当たったのは

『顔』

賢吾はゆっくりと崩れ落ちる。

弦太朗『賢吾ぉおおおおおお！！』

ユウキ『賢吾くぅぅぅぅぅぅん！！』

『『『歌星いいいいいい！！』』』

『『『死ぬなぁぁぁぁぁぁぁぁ！！』』』

賢吾『……だから……殺すな……ガクッ』

そこで賢吾は意識を落とした。

ユウキ「で、今保健室で寝てる」

ＪＫ「弦太朗さん……マジ鬼畜っす」

カザリ「いや、そこまで……」

弦太朗「ダチを傷つけるなんて俺はなんて最低な奴なんだ！！」

カザリ「予想以上に落ち込んでた！？」

ユウキ「ゲンちゃんも普通の人と違ってバカみたいに力が強いんだから、賢吾君みたいな惰弱でひ弱な人に本気で相手したらすぐ潰れちゃうんだからバカみたいに本気だしちゃダメだよ」

「「「……」」」

ユウキ「あれ？どうしたの？」

弦太朗（どこから突っ込んだらいいんだ？）

ＪＫ（とりあえずバカを二回言ったとこっすか？）

カザリ（歌星の弁護は？）

「「「……」」」

「「「めんどくせ」」」

ユウキ「？」

弦太朗「さあて、飯食おうぜ」

ＪＫ「そっすね」

カザリ「何にしようかな」

ユウキ「？」

賢吾「誰が……つぅ！」

「大人しく寝てなさい」

何かを感じ取った賢吾、無理矢理突っ込もうとしたが頭の痛みに倒れる。

―――――――――――――

ＪＫ「じゃなー」

カザリ「ばいばい」

放課後、空が赤くなったころ帰り道でＪＫと別れる。

一人で歩く帰り道、好きなアーティストの歌を口ずさみながら行く。

途中どこの家からかカレーの匂いが漂ってきた。

カザリ「……今日の晩御飯何かなー」

そう呟くと少しだけ早足になった。

第三十二話ヒーローだって風邪くらい引きますよ（前書き）

今回は登場人物が風邪を引いたら、という話です。

まず一言

食べ物は粗末にしてはいけません

ではどうぞ

第三十二話ヒーローだって風邪くらい引きますよ

・五代の場合

五代「はい、みのり」

みのり「お兄…ちゃん？この深緑のドロドロ液体は……」

五代「薬、アフリカの……どこだったかな？」

みのり「ひく……」

五代「冗談だよ♪はい解熱剤」

みのり「もう……ありがとう♪」

・津上の場合

真魚「翔一君……リンゴ食べたい……」

太一「俺……桃」

義彦「私は卵酒がいいな」

津上「はいはい……どうぞショウガ湯です」

義彦「卵……」

津上「ショウガ湯です」

義彦「はい」

・城戸の場合

城戸「ゲホッ！ゴホゴホ！！……うぇぇ」

蓮「バカは風邪引かないはずなんだがなぁ」

城戸「何だとれｎ…ゴホッ！！」

美穂「まったく、大人しく……寝てなさい！！」↑正拳突き

城戸「へブッ！？」

優衣「真司君！？」

美穂「さてと、今の内にお粥作っとこ」

蓮「……まあこれも愛か」

・巧の場合

真理「はい、鍋焼きうどん」

巧「……怒るぞ」

真理「ふふん♪フーフーしてあげようか？」

巧「ゴホッ……この野郎、覚えとけ」

・剣崎の場合

橘「ジョーカーでも風邪引くんだな」

剣崎「ダディバナザーン……」↑発熱＋鼻風邪

始「……しんどいだったら寝てろ」

剣崎「ウェーイ……」

・ヒビキの場合

ヒビキ「たまにはこういうのもいいねぇ」↑滝に打たれながら

イブキ「ヒビキさーん!?何やってるんですか!もう12月ですよ!!」

ヒビキ「おう!一緒にどうだ?」

イブキ「いやいやいや」

・天道の場合

天道「常日頃からしっかりと体調管理していれば風邪を引くことも無い」

樹花「たっだいまー!」

天道「おかえり、樹花、今日のおやつはお汁粉だ、手を洗ってきなさい」

樹花「はーい!」

・良太郎の場合

―屋外―

モモ「良太郎!冬は乾布摩擦だ!」

良太郎「う…うん」

モモ「おおおおお！！」

良太郎「う…うぉおおおおお……」

「「……ハックション！！」」

・渡の場合

渡「うぅん……」

名護「やあ渡君」

渡「あ…名護さん……すみませんわざわざ」

名護「いや、気にしないでくれ、それよりいいこと教えてあげよう」

渡「はぁ……」

名護「風邪を引いた、そんな時は……」

渡「そんな時は……」

名護「そんな時は……イクササイズだ！！」

渡「……」

名護「さあ！さあさあさあ！」

恵「いい加減にしなさい！」

名護「恵！？」

恵「ほら帰るわよ！」

名護「み…耳を引っ張るな！…イタタタ！」

渡「た…助かった」

・士の場合

士「夏みかん……喉が渇いた」

夏海「はいはい」

士「夏みかん……暑い」

夏海「はいはい」

士「夏みかん……」

夏海「何ですか？」

士「……傍にいろ」

夏海「……クス♪はいはい♪」

・翔太郎とフィリップの場合

翔太郎「ハァ…ハァ……」

フィリップ「大丈夫かい？翔太郎」

翔太郎「あ？フィリップ……すまねぇ、寝てるのも辛くてな」

フィリップ「そうか……ところで風邪の対処について調べたのだけど……」

翔太郎「そうか、何すりゃいいんだ？」

フィリップ「とりあえず効果のありそうなのを色々やってみようと思う……ところで翔太郎、君は知っていたかい？」

翔太郎「何だ？」

フィリップ「風邪には……ネギがいいと」

翔太郎「ん？ネギか……そういやガキの頃は、お袋がネギいっぱいのみそ汁作ってくれたっけな」

フィリップ「じゃあ早速……」

翔太郎「ああ、頼む……っておい何でズボンに手をかけ……ちょっまっ……それ迷信……アッー！」

・映司の場合

映司「ほらアンク、アイス、今日は特別に二本食べていいよ」

アンク「ちっ……俺が風邪とはなぁ」

ロスト「大丈夫？」

アンク「あん？入ってくんなつったろが！感染ったらどうすんだ！？」

映司「アンク、大人しくしときなよ、さ、下行こうあっくん」

ロスト「うん」

・弦太朗の場合

弦太朗「さあ今日も元気に仮面ライダー部だ！……ってあれ？誰もいねぇ、しゃあねぇまつか」

弦太朗「中々来ねぇなユウキと賢吾は熱出て帰ったし……」

弦太朗「おっ、ユウキからメールだ、なになに……確認してみたら全員風邪でダウンしたので今日の仮面ライダー部はお休みです……ってなにぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！？」

ユウキ「何で弦ちゃんだけ風邪引いてないの……？」

終わり

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9655r/

平成仮面ライダーほのぼの劇場

2011年12月7日00時48分発行